



案山子



2014年冬号

新潟大学文芸部

もくじ

◆通常作品

繚乱百葉	夏村晋	3
おかあさん	幼夏	4
凋落、花や葉がしぼんで落ちること。	如月 杏	5
対して話す	自分	6
おきみやげ	止考作後	7
Sin	昆布中毒	8
安寧とルーコウス	Tuvos Luika	9
友達	Puney Loran Seapon	10
彼女たちの日常	如月椎奈	11
対談		12
おまけ1 & 2	高天美月	13
地に平和を（前編）	外衛真希	14
GLOCK17——theoria——	松本惇暉	15
神楽 冬	東 かおり	16
ファイブ・ムーブ・ストーリーズ	祐輝	17

◆お題作品

あおいろ	幼夏	19
ソウシヨク系男子	今畑 鏡	20
買った武器は装備しないと効果が無いぜ	Sincot9	21

一般作品

繚乱百葉

夏村晋

寒いが気持ちよく澄んだ青空の下、視界が捉えた光景に、シャルロットは思わず眉根を寄せた。

二月十四日。大学二年生であるシャルロットはもう自分の試験を全て終え、残るガイダンスを受けて建物から出てきたところだった。

建物の出入り口より少し先、広場のように開けた場所の一角に男が三人、明るい昼間に似つかわしくない不穏な空気を漂わせていた。大学内だというのに、三人の内の二人は隣接した付属高校の制服を纏っている。残る一人は私服であるから大学生だろう。

どうやら大学生と高校生の間で口論になっているようだった。高校生はそれぞれ金髪と黒髪で、金髪の方の彼は相手に掴み掛らんばかりの勢いである。

教室から出てくるのが遅かったせいか、周りには人もまばらで、敢えてその殺伐とした雰囲気の中に割って入ろうとする物好きもいない。それはシャルロットとて例外ではなかった。

しかし、困り果てた様子の黒髪の方の高校生とシャルロットの視線がふっと合った。途端に、分かりやすく助けを乞うような眼差しを向けられる。

シャルロットの口からは堪え切れず溜め息が漏れた。

視線で救助信号を出した高校生は紛れもなく自分の三つ年下の高校二年生の弟、アクエリアスで、更には金髪の方の高校生は自分の彼氏の弟、リーブラである。

物好きではないものの、流石に身内が困っているのを放っておくわけにも行かず、シャルロットはその長い黒髪を揺らして、そっと三人へ向けて歩を進めた。

「シャル姉」

ある程度距離が近づくと、アクエリアスに名前を呼ばれた。その声に、他の二人もアクエリアスの視線を追ってこちらを見る。アクエリアスとリーブラの表情が、希望の光でも見つけたかのように明るくなった。

傍まで来ると、大学生の方を向く。大学生はまあどこにでもいそうなタイプで、平均的な高すぎず低すぎずの身長、茶色に染色された髪が生え際にはすでに黒が混じり、毛先は明らかに痛んでいる。姿勢もあまり良いとは言えず、そもそも醸し出す雰囲気や目つきから少々粗雑で、頭の弱い印象を受けた。平たく言えば悪い方向でチャライ。

突然の第三者の介入、それも女だったのが意外で驚いたのか、怪訝そうな表情のまま、突っかかって来る様子もなかった。

「うちの弟と友人が何か」

そう問いかけると、何故か彼はわずかにたじろいだように見えた。それから、おもむろに口を開く。

「なんだよ、お前」

……うちの弟と友人、という言葉が伝わらなかったのだろうか。

「姉です。こっちの」

そう言いながらアクエリアスを指さす。

「それで、弟と友人が何か」

もう一度同じ問いを繰り返すと、ようやく言われたことが認識できたのか、ハツとしたように声を荒げた。

「何か、じゃねえよ！ こいつ、人の彼女たぶらかしやがって」

「だからたぶらかしてねーって言ってんだろーが！」

シャルロットの登場に、多少落ち着いていたリーブラが再び掴み掛りそうな勢いで言い返した。

「だったらそのチョコは何なんだっつってんだろーがっ」

チョコ、という台詞に視線を落とすと、確かに小さくて可愛らしい紙袋がアクエリアスの手にぶら下がっていた。

つまり、突っかかられているのはアクエリアスの方のようだ。

リーブラが本気で掴み掛らないための対策なのか、空いている方の手でリーブラの首根っこを軽く掴んだアクエリアスも抗議の声を上げる。

「俺も知らねーよ！ いきなりそこで先輩に渡されたんだって」

「何もない奴にチョコなんて渡すかよ、今日が何の日か分かってんのか！」

「痛いくらいにわかってるっつーの！」

「ストップ」

何故かリーブラが苛立ちとは打って変わって切実な声で叫んだところで、三人の言い争いを止める。

「そもそも何があったの？」

アクエリアスとリーブラを交互に見つつ聞くと、横から不要な言葉がまた飛んできた。

「だからこいつが俺の彼女を……っ」

「貴方がそう思う出来事があったのは分かりました。次は弟たちの話を聞かせてください」

あくまで静かにそう言うと、ぐっと言葉に詰まったように、ようやく男が押し黙った。それを確認してから、またアクエリアスとリーブラに向き直る。

「話して」

結局、途中で男の横やりや、アクエリアスとリーブラの言い争いも交えつつ無駄に長くなった話をまとめると、以下のようなことらしい。

二月十四日、バレンタインデーの本日。アクエリアスとリーブラのクラスでは、男子から女子にチョコレートを渡す、いわゆる「逆チョコ」というものを行っている男子がいた。シャルロットの妹が意中の相手であるリーブラは、何故かその男子の行いに酷く影響され、これは自分も渡

さねばなるまいという使命感に駆られたらしい。しかし高校校舎内にはバレンタイン用のチョコレートなんて売っているはずもなく、考えた末に、昼休みの内にコンビニに買いに行くことを思い付いた。一番近いのは大学の敷地内にあるコンビニのため、アクエリアスと共に大学まで買いに来た。

しかしそのコンビニに行く途中、「アクエリアスくん...？ きゃーっちょう久しぶり！ 何で大学にいるの？」(リーブラの物真似より)と話しかけてくる人がいた。それはアクエリアスの所属するバスケット部の元マネージャーで、「まさかアクエリアスくんに会えるなんて！」と一人でひとしきり騒いだ後、どういうわけかアクエリアスの手にチョコレートを押し付けて去って行ったらしい。タイミング悪く、その元マネージャーの彼氏と名乗る男がその現場を目撃。嵐のような勢いで元マネージャーが去ると入れ違いのようにして、アクエリアスに突っかかって来た為に口論に。そこに丁度シャルロットが現れた.....というのが全容らしい。

確かにアスとリーブラ君は悪くないな。

首を捻れば、このすぐ先にコンビニがある。目的地の目と鼻の先で足止めされた二人が災難だった。

そして、バスケット部の元マネージャーと聞いて思い出すことがあった。

去年のことである。アスが一年生にして試合に出るというので、兄弟でその試合を観に行ったことがある。その時に妹が、アクエリアスに首ったけになっている三年生のマネージャーがいることを教えてくれた。注意して見ると、そのマネージャーは実に分かりやすく、仕事をこなしつつもしきりにアクエリアスに話しかけていた。

そうか、あの時の。

でも確か、彼女は、

もう一つ、彼女に関する記憶が甦りそうになったが、それは今回関係ないので回想を打ち切る。今、対処しなくてはいけないのは、目の前のアクエリアス達だ。

シャルロットは改めてアクエリアスに尋ねた。

「その先輩と最後に会ったのは？」

「へ？ えーと、先輩の卒業式」

「それ以来、その人との交流は？」

「ゼロ」

「.....と、いう訳です」

「は？」

突然話を振られた男は、訳が分からないというように目を瞬かせた。

「聞いての通りです。約一年も交流がなかった相手に、本気のチョコを贈る女はいないかと。もう一つ言っておくと、この弟には毎年信じられない量の義理チョコが集まるんですよ」

「あ、それな。今年も既に何個貰ったんだよ」

シャルロットの言葉にリーブラが同意を示す。アクエリアスは知り合いの輪が広い上に気さくで、姉の目から見ても人気があるため、本人のお菓子好きも幸いして毎年たくさん義理チョコ

コを貰って帰ってくる。

ただし、あくまで義理チョコである。シャルロットの見立てとしては、義理に比べれば本命は雀の涙ほどしか貰っていないはずだ。

「数えてねーよ。あ、でもシャル姉、サンキュ。朝にくれたお菓子のお陰でお返し困ってないよ」

「ん、それは良かった」

毎年多くのチョコやお菓子を渡されても、誰に貰ったのかを逐一覚えておくほどの頭がアクエリアスにはない。もちろん、そもそもお返しを期待していない女子も多いだろうが、アクエリアスは変なところで律義な性格のため、ホワイトデーになってしよげている姿を見かけたことがあった。それから、解決策として、貰ったらその場でささやかながらお返しができるように、シャルロットはお徳用の大きな菓子袋を買って渡してやるようになった。

シャルロットは男に向き直ると、小さく微笑みながら言葉を紡ぐ。

「つまり、貴方の彼女さんは久しぶりに会った後輩が懐かしくて、他の人と同じように義理チョコを渡しただけだと思いますよ」

「……っけど！　じゃあ何で俺は貰ってないんだよ」

そんな事は知るか。

三人とも同じことを思いつつも、シャルロットは笑顔のまま続ける。

「あら、まだお昼になったばかり。バレンタインデーは全く終わっていませんよ。むしろ夜を待った方が雰囲気が出ると、そっちを好む女性もいますから」

今度こそ男は言葉に詰まった。

シャルロットはその様子を見て目を細める。

「お分かり頂けたようですね」

完全に話を終わらせるべく男に背を向け、アクエリアスとリーブラを促してシャルロットは歩き出した。

「お、おい待て！」

しかし男も往生際が悪いのか、負けたような状態になったことが悔しいのか、慌てた声を出しながら、立ち去ろうとするシャルロットの肩を掴んだ。

「まだ何か」

溜め息を隠せず、今度はもう睨んでしまう予感を抱きながら、シャルロットは仕様がなしに振り返ろうとした。

その時だった。

「ごめん、待たせた」

澄んだ声が割り込んできた。

「兄貴」

すぐ傍に立っている人物を見て、リーブラが声を上げた。

「俺の彼女に何か」

笑顔で言いながら伸ばされた手が、あくまで自然に、しかし容赦なくシャルロットの肩にかかっていた手をどける。

シャルロットは気づけば随分と至近距離に立っていた恋人、ナイトの顔を見上げた。お礼を、と思うものの、手を払ってもらったことについて払われた人物がいる前で言う訳にもいかず、代わりに小さく呟く。

「ガイダンス、終わったの」

「ああ。思ったより時間かかっちゃったな」

ごめん、と二度目の謝罪を口にするのを見ながら、ふと先ほどは強制終了させた回想がまた甦ってきた。

そう、高校三年生の頃、新入部員のアクエリアスに首ったけだったバスケ部のマネージャーは、その前の年は。

男が思い出したように目を見開くと、ナイトに指をさして叫んだ。

「ああ！ お前、確かナイトとかいう奴！」

マネージャーの子は、その前の年は、生徒会長をしていたナイトに熱を上げていた。

「何だ、俺のこと知ってるのか。でも、あんたは誰」

「知ってるのか、じゃねえよ！ 俺の彼女が事あるごとにお前の話すんだよ、てめえも人の彼女たぶらかしたんだろ！」

「誰の話だよ。てゆーか俺の彼女はここにいるんだけど」

「あ？ しらばっくれんな。この女共々、俺のこと馬鹿にしやがって」

はて、私はこの人を馬鹿にしたらろうか。

身に覚えがないというか、男の頭の中ではそれはもう盛大に先ほどまでの話がねじ曲がっているようだった。

くいとナイトの上着の袖を引く。

「高校の時の、バスケ部のマネージャーの子」

そう言っただけで、二秒ほどでナイトは思い当たったらしい。

「ああ、そゆこと」

小さく呟くと、男に向かって笑顔を向ける。

「どうやら誤解があるみたいだな。ここじゃあれだから、向こうで話し合っただけで誤解を解こうか」

先ほどシャルロットが出てきた建物が示される。何でそんなこと、と男も言いかけたものの、ナイトの有無を言わせぬ笑顔に圧倒され頷いた。

すぐ話を済ませるけど、ここは寒いから三人ともどこかに入っとけよ。

それだけ言い置くと、ナイトはさっさと歩きだし、男も渋りながらも着いていく。

二人の背中が、建物の中へと消えた。

数秒間、残された三人は動こうともせず、もう誰の姿も見えない出入り口を見つめていた。やがて、アクエリアスがぼつりと呟く。

「……あの人、詰んだな」

他二人も黙って頷いた。それから、三人で一斉に大きな溜め息を吐く。

「とにかく、二人は災難だったね」

「シャル姉来てくれて、ほんと助かった。結局あの人なんだったんだろうな」

「よく分かんねーけど、あの子の彼女があの子を好きじゃないってことだけは多分分かった」

好きになんねーだろ、あんな奴。と軽い暴言を続けるリーブラに、シャルロットもアクエリラスも肩を竦めて同意を示す。

しかし、ナイトのことを良く知る三人にとっては、あの男が気の毒に思えないこともなかった。

「でもま、こうでもしなきゃ終わらなかったかもな」

冬の冷たい風が、リーブラの言葉を攫っていった。

約五分後、男との話し合いを終えてナイトが建物から出ると、どこかに入っておくよう言ったにも関わらず、三人は同じ場所にいた。

「ナイト」

「冷えるからどこかに入れて言ったのに」

手袋から手を外し、外気に晒されていないために温かい指をシャルロットの頬に当てると、やはり冷えていた。

「兄貴、ありがと」

「ありがとうございます」

「どーいたしまして」

そこではたと、先ほどはシャルロットの肩に手がかけられていた事に気を取られて忘れていたが、本来アクエリラスとリーブラがこの場にいることの異常さを思い出した。

「そういえば、何でお前らここにいるの？ 授業は？」

「それは、」

「ちょっと待って、時間大丈夫？」

話しかけたリーブラを遮って、シャルロットが尋ねる。その言葉にアクエリラスが携帯を確認すると、ぎょっとしたように表情が引き攣った。

「っうわ、昼休み終わってる！」

「まじか！ 五時間目なんだっけ」

「担任の授業……っ」

「嘘だろ殺されんじゃねーかよ！」

一瞬にして青ざめると、二人は同時に高校校舎へ向かって弾かれたように駆け出した。

きょとんとして隣を見下ろすと、シャルロットが苦笑しながら説明をしてくれる。

「リーブラ君が逆チョコに影響されて、コンビニまで買いに来たんだって」

「なるほど」

駆けて行った背中に視線を戻すと、リーブラがアクエリアスの首根っこを掴んで急停止しているところだった。

アクエリアスの腕が苦しげに宙を搔く。大丈夫だろうか。

「何すんだ！」

「待て！ まだチョコ買ってなかった」

「はあ？ ったく、五秒で選べよ！」

「ラジャ」

大声の会話はここまで聞こえ、途端に二人がUターンをして、ナイトとシャルロットの前を駆け抜けてコンビニへ向かっていく。

二人がコンビニに無事入ったところまで見守ってから、シャルロットと目を合わせた。

「俺らはお昼食へに行こうか」

「ああ、そうだったね」

場所はもう前々から行こうと決めていたカフェなので、その方角にどちらからともなく歩き出す。

「そういえば、そもそも何であんなに揉めてたんだ」

「あの男の人から聞かなかった？」

「なんか言ってたけど、どう考えても主観オンリーで話してたから」

「そう。じゃあ初めから説明するよ」

あ、でもその前に、とシャルロットは自分の鞆を探る。

抗うまでもなく胸にじわりと期待が滲んでしまい、そんな自分に苦笑したくなった。

そして、シャルロットはその期待を少しも裏切ることなく、綺麗にラッピングされた箱を取り出した。

「はい。バレンタイン、だから」

期待が滲んだように、今度は顔に笑みが滲むのを堪え切れない。いや、これは俗に、にやけていると表現する方が正しいのかもしれない。

対してシャルロットは不自然なくらい口元を固く結ばせていて、目線はやや下を向いていた。

もともと感情が顔に大きく出ないタイプであるものの、一番傍にいるナイトには僅かな表情の変化さえ意味を読み取れた。

あ、照れてるな。

「ありがとう」

とすん、と彼女の頭に手を置くと、ようやく口元が小さく綻んで、頬がほんのりと赤く染まる。

「大事に食べるよ。ホワイトデー、楽しみにしてて」

「うん。……あ、」

伏せられていた瞳が、ナイトを映す。

「私も、ありがとう」

言葉の意味を、首を傾げて問う。自分は何かお礼を言われることをしたのだろうか。

「さっき、助けてくれて」

ああ。言われて思い出したものの、それはナイトからすれば至極当たり前の行動だった。それなのにお礼を言われたせいか、くすぐられたような気持ちになる。

そんな感情はひた隠しにして今度はナイトが目を伏せた。

「当然だろ」

隣で、いつもはクールな恋人が、ふわりと笑う気配がした。

了

後日談 壺

「そういえばあいつ、バレンタインデーの時のガイダンス以来、見なくね？」

後ろの席から聞こえてきた会話に、シャルロットは一瞬動きが止まった。あの日の事が即座に頭に浮かび、後ろの会話が否応なしに耳へと飛び込んでくる。

「何かあいつ、引きこもってるって聞いたけど」

「え、まじ？」

「俺はノイローゼって聞いたな」

「どっちにしろマズいだろ、それ。なんかあったのかな」

「バレンタインデーの日に彼女に振られたらしいけど」

「そのショックか」

「さあ？」

「まあ、あいつちょっとおかしかったもんなー」

「あ、そういや俺の友達、ちょっと前にあいつに会ったって言ってた」

「え、外出てんじゃん」

「なー。でもその時は虚ろな目をして「もうしばらく恋愛は良い」って繰り返し呟いてたとかかなんとか」

そこまで聞いたところで、シャルロットは立ち上がり、静かにその場を後にした。

後日談 式

「エリーゼさん！ これ受け取ってください！」

放課後、いちごミルクを飲みながら帰宅しようとして歩いていた想い人の前で、リーブラは土下座せんばかりの勢いで、昼休みに担任の説教と引き換えに買ってきたお菓子を差し出した。

「……なんで？」

「ば、バレンタインなので、その、」

「……ふうん」

「……………っ」

「ま、くれるんなら貰う」

「あ、ありがとうございます！ このご恩は、」

「はい、これお返し」

「へ？」

「じゃあねえ、ばいばーい」

「え、え？ 夢？ え？」

「エリーゼさん、ホワイトデー楽しみにしておいてください！」

リーブラの声が、人気のない廊下に響き渡った。

「は？ チョコくれた？ エリ姉が？」

人から貰うことは多々あっても、自分以外の為に買い物をするのは大嫌い、かつて一度として他人にチョコをあげたことなどない、魔性の女と称しても何の違和感もない自分の姉が、リーブラにチョコを渡すなどアクエリアスにとっては晴天の霹靂も良いところであった。

だらしなくにやけきったリーブラが、さあ証拠を見せてやろうとばかりに右手を差し出して開く。

その手を覗き込むと、紙で一つ一つ包装されているタイプの一口チョコが、一個だけころんと乗っていた。

「……これで終わり？」

「おう」

「……。まあ、お前が良いなら」

「もうやばい死ねるレベルで嬉しい絶対食わないで家宝にする」

「やすい家宝」

「ほら、氷漬けにすれば何万年も大丈夫なんだろう？ 冷凍マンモスみたいに」

「食べよ」

了

あとがき

だから登場人物多すぎてわかんねーんだっつこの人のための登場人物早見表再び。

「四兄弟」

長女シャルロット(大学二年、ナイトと恋人)

長男イーゼス(大学一年、アプリコットと恋人)

次女エリーゼ(高校三年)

次男アクエリアス(高校二年)

「三兄弟」

長男ナイト(大学二年、シャルロットと恋人)

次男リーブラ(高校二年、エリーゼにぞっこん)

長女アプリコット(高校一年、イーゼスと恋人)

今回は最年長カップルが主人公。二人とも落ち着いている上に頭は良いわ要領良いわなので、話の中でトラブルを起こしずらくて作者が瀕死です。アクエリアスとリーブラの掛け合いだけテンポ良く書けるこの感じを何とかしたい。

今回は文章が詰まってて疲れましたよね、理解しているので石を投げないでください。

そうですか、大学二年生の恋愛はこんなではないですか、理解しようがないので石を投げないでください。

一応ページ数が私的に過去最多となりました。思ったより長くなった後日談を含め、ここまで目を通して頂いて本当にありがとうございます。読了感謝。

おかあさん（幼夏）

「はやくしてよ、約束の時間に遅れちゃうでしょ！」

買ったばかりの安い浴衣は、まだビニールのにおいを纏っている。自分では上手く扱えない帯を母親に押し付けて、大声を上げた。

「まっすぐ前向いて！ 余計遅くなるでしょう」

帯が胸の下あたりを滑り、ぐっと締め付けられる。

「お母さんは、いつもそう！」

その瞬間、帯飾りのテグスが千切れてビーズが弾けた。

おかあさん

幼夏

「脳出血だって」

妹の千里が、震える声でそう告げた。病院の廊下に、独特のつんとする臭いが流れていた。

「あと十分遅かったら、死んでたって」

千里の顔をまともに見ることもできない。どうしてこんなことになってしまったのか——答などない問を、頭の中で繰り返す。父はただ黙って、眉間を押しえている。夜の病院は背筋が凍るほどに静かで、夏だというのに寒気が止まらない。業務用エアコンの吐き出す冷風とは違う、何か冷たいものが肌を撫でるのだ。

「松原貞子さんのご家族ですか」

I C U——集中治療室の扉が静かにスライドして、奥から若い看護師が出てきた。そうですが、と答える父に、看護師は何やら書類を渡して説明を始めた。廊下に響く声は耳に届いてくるものの、まったく頭には入ってこない。頷くばかりの父親を横目で見ていると、看護師と一瞬目があった。——何を思ってそんな目で私を見るのか。一番哀れなのは、私ではない。この壁の向こうで眠る、母だというのに。

「今日は帰っていただいて構いません」

看護師が最後に告げたその一言だけが、ようやく意味を持って聞こえた。

*

まともに寝られやしなかった。嫌な汗が体表面を這いずり回り、寝かせてはくれない。何度目を覚ましたことだろう、空が白んできたので、眠る努力をやめた。寝室を同じくしている千里は、まだ隣のベッドで寝息を立てている。

喉が痛いほどに乾いていて、足は自然に台所へと向かった。八月二日。夏休み真っ只中の早朝、住宅街は静けさに満ちている。しかし私は、家中を満たしている静寂の中に、微かな音を聞き取った。耳をそばだて、音の源を探る。音の発生源は、父の部屋だった。

父が、泣いている。

私が耳にした音は、父の泣き声だった。すすり泣く父の、声を喉の奥に押し込めたような音は、聞いているだけでも胸の奥が苦しくなる。父は泣かないものだと思っていた。どんな時も毅然としているものだ――。

悪いことをしているような気分になって、足音を立てないようにその場を離れた。ぐっと小さくなった肺に、空気を無理やり押し入れながら、寝室に戻った。どうせ寝付けはしないが仕方がない。何も聞いていないふりをするため、布団に潜って瞼を下した。

*

八時、家族三人は再びICUの前に来ていた。昨日同様看護婦が出てきて、部屋の中へと呼び入れる。入り口で帽子とマスクを受け取って、手を消毒してから奥へ進んだ。

集中治療室と聞いて、ガラス張りの個室をイメージしていたため、現実とのギャップに驚いた。広い部屋は簡易的な衝立で仕切られ、その間に置かれたベッドに、患者が横たわっている。特別広い病室、といった様子だった。

看護師に導かれるままに、部屋の一番端に設置されたベッドへ近寄った。その上に寝かせられている『患者』を覗き込んだ。顔がパンパンに腫れて、バスケットボールのように膨らんでいる。赤みを帯びた顔は、変わらない首から下とあまりにアンバランスで、言ってしまえばグロテスクだ。

これが本当に、私の母なのか。

信じられない。チューブとコードがそこら中から生えた体は、ピクリとも動かない。もとより動くこと等出来ない生き物であるかのように、ただそこに在る。

「おかあさん……」

千里が母の手を握り、泣き出した。

「ちーだよ、おかあさん、ちーだよ」

小さな声で呼びかける。呼びかけても無駄なのは、千里もわかっているはずだ。中学二年生は、それが分からぬ歳ではない。それでも、彼女の抱えた悲しみが、そうさせたのだと思う。そうする千里の姿を、看護師は一步下がり、黙ってみている。父は千里の手の上から、母の動かない手を握った。

その輪の中に、入っていけない。自分も家族の一員であるのに、感傷を共有すべき一人であるのに、手を重ねることが出来なかった。それどころか、一筋の涙も流れない。どうしてなのか全く分からないが、私の中の「悲しみ」は、決して表に出てこようとはしなかった。

看護婦が父にアイコンタクトを取ると、父は「帰ろう」と千里に声をかけた。ゆっくりと千里が手を放す。涙を啜り、止まらない涙を拭う千里の様子は、「正しい娘の姿」であるように思われた。対する自分が、醜く思えるほどに。

*

八月一日は、県内最大級の花火大会が行われる日だった。毎年家族で見に行っていたが、今年に限っては、父親の仕事の都合で家族全員が揃うことは出来なかった。

しかし、私はそれを好機と捉えた。人生で初めて出来た彼氏との初デートを、まさにその八月一日にしようと画策したのだ。夜の外出である、親の反対は必至だったが、押し切るつもりでいた。

母にその話を持ち掛けたときは、相当な大喧嘩になったが、一週間かけて何とか説得することが出来た。

そこまでは良かった。いや、正確には、花火大会が終わるまでは良かったのだ。

「春香」

背後から私を呼ぶ声がして、振り返る。千里だった。

「ちょっとくらい、手伝ってよ」

幼いころから千里は、私のことを「春香」と名前と呼んでいる。それはいつも通りのことであるのに、今の呼び方にはどこか刺があった。千里はハンガーの束を片手に、こちらを睨み付ける。

。

「ああ、うん」

間の抜けた返事が、自分の口から漏れるように出た。

「春香は、皿を洗ってね」

それだけ言うと、千里は洗濯機のある脱衣所へと消えていった。重たい体を持ち上げて、ゆっくりと立ち上がる。台所のシンクと向かい合うと、まだ何もしていないにもかかわらず、疲労感が襲い掛かってくる。シンクには、入りきらないほど食器が山になっていた。文字通りの山である。折り重なった食器が蛇口にもたれ掛かっていて、このままでは水も出せない。

「はあ……」

大きくため息をついた。母が倒れてからというもの、家族全体の生活サイクルは崩れてしまった。洗濯物も洗い物も、部屋の隅の埃も際限なく溜まっていく。家に帰れば当たり前のように用意されていた手料理は、インスタントのラーメンやレトルトカレーに成り代わった。

今までずっと、母が全てを行っていたのだ。娘二人の「お手伝い」など、僅かな助力にもなっていなかったに違いない。朝から夕方まで、パートに出ていた母。専業主婦と変わらない家事を成し遂げるために、どれだけ身を削っていたのだろう。

思えば、母に感謝の意を示したことなど、ほとんどなかった。母の苦労を想う機会など、精々母の日くらいのものであった。家が常に清潔なのも、毎朝毎晩何皿も食事が出てくるのも、当然だと思っていた。「それが母親というものだ」とさえ思っていた。——どうかしている。母だって一人の人間なのだ。疲れもストレスも、その体の中に全部閉じ込めて「隠していた」だけなのに。

。

傲慢な私たち家族の考えが——いや、考えの至らなさが、母の脳血管を破ったのだ。

一枚ずつ、汚れた食器をスポンジで擦る。何度も繰り返していくと、手が洗剤の刺激で引きつってきた。

「ちょっと」

背後から千里の声が聞こえる。振り返って顔を伺わなくても、彼女の感情が分かってしまうほど、その一声には怒気が滲んでいた。

「靴下裏返したまま洗濯場に出さないでって、この前言ったよね。干す側の気持ちにもなってよ！」

「は？ 人のこと言えないでしょ。文句言う前に、ぐちゃぐちゃに下膳すんのやめてよ！」

頑張っているのが自分だけであるかのような物言いに腹が立つ。売り言葉に買い言葉、反射的に強い言葉で反論してしまう。口喧嘩となれば、三歳分の歳の差など、関係なくなる。

「あたしが何も言わなかったら皿洗いもしないくせに！」

「いつも誰がお風呂洗ってると思ってんの！」

延々と続くと思われた口論に終止符を打ったのは、千里の一言だった。

「春香が花火大会なんていかなければ、お母さんは倒れなかったよ！」

言い返す言葉が、見つからなかった。突然頭が真っ白になって、どうにも言葉が出ない。突然黙った私を前に千里は、悪いことを言ったと思ったのか、そそくさと脱衣所へ引っ込んでいった。

花火大会の夜、私の母は倒れた。私を迎えに行くため走らせた車の中で、意識を失ったそうだった。その時偶然、千里が助手席に乗っていた。救急車を呼んだのも、仕事中の父親に連絡をしたのも千里だった。母が倒れた頃、私は呑気に焼きそばをほおぼっていたのだから笑えない。

救急車がけたたましくサイレンを鳴らしながら、自分のすぐ近くに止まり、私は野次馬として近寄った。人垣の成す輪の中心に、自分の母親の姿を見つけたとき――恐怖が足の裏から体中を支配した。

それは、誰かに責められることへの恐怖だったと思う。

母親が倒れたなど、すぐに実感が得られるわけもない。だからこそ、もっと端的な恐怖が湧いて来た。それは瞬時に「自分のせいだ」と感じてしまったせいかもしれない。頭の中が壊れてしまうほど、負荷がかかっていた母を呼び出して、待たせていた自分がある。その一方で、母の命を繋ぎとめた妹がいる。私の中で、母を救った妹は正義だった。対する私は――。

皿の山が小さくなって、ついには最後の一枚になった。皿をすすいでいると、右のポケットに突然何かが突っ込まれた。突然のことに驚き、咄嗟に振り返ると、逃げ去る千里の背中が見えた。皿を洗い終えた手をタオルで拭い、ポケットの中を確認する。

「いちごみるく」

三角形の、小さな飴だった。千里なりの謝罪だったのかもしれない。

*

「明日、リハビリセンターに移動することになった」

冷凍餃子を温めただけの、簡素な夕食を摂りながら、父は何気なくそういった。父は母が倒れて以来、毎日母の入院している病院に通っている。どんなに仕事が忙しくても、欠かさず通っているのだ。ああ、夫婦愛ってこういうことをいうのか、と思う。

母が手術を終えてから一月半の時が立っていた。季節はすっかり移り変わり、木枯らしに揺すられる銀杏が、秋めく街並みの中に映えている。

「もうリハビリなの？」

千里が驚いたように尋ねた。

「病院には毎日新しい病人が来るから、いつまでもベッドを貸すわけにはいかないんだとさ」

餃子を乱暴に口へと放り込む父の手は、少し痩せて皺が目立つ。疲労が表皮に刻まれているかのように見えた。千里も毎週末、母に会いに行っていた。祖母でさえここ一カ月半で三度は会いに行っている。一度も会いに行っていないのは、私だけだった。

「春香」

父に名前を呼ばれ、びくと肩が震える。

「母さん、会いたがってるぞ」

誰とも目が合わないように、俯いた。

無理だ、どんな顔をして会えと言うのか。会っていない時間が長ければ長いほど、気まずさと恐怖は膨らんでいった。

母の手術は成功したと聞いている。それでも、右半身には麻痺が残ってしまった。まだまともに歩くこともできないという。私の中の母は、手術前の、顔面が鬱血した姿のまま停滞していた。半身麻痺でリハビリをしようかという母は、イメージすることさえできない。自分の中にある像と、一致しないのだ。

冷蔵庫の中に、高濃度アルコールに浸された血塊が保存されている。父が医師に依頼し、持ち帰れるように取り計らってもらったという。しかし私からすれば、その血塊の入った小瓶の存在さえ違和感の発生源だった。それが母の体から取り出されたものだと知ってはいても、理解することが出来ないのだ。単なる異物にしか、見えなかった。

＊

十一月に入り、さらに冷え込みは厳しくなる。放課後になってすぐ、音楽室に移動した私は、窓の外を見る。四階に位置する音楽室からは、ある淡い桃色の建物が見える。私は、あれが何の施設なのかを知っていた。

「先輩、『故郷の四季』の楽譜が見当たらないんですけど……」

部員の一人に声をかけられる。彼女がいつ音楽室に入ってきたのか——全く気が付かなかった。どのくらいの時間、あの建物を眺めていたのだろう。

「ああ、楽譜の束ね。製本前だから、準備室に入れてあるかな」

「はい、じゃあ私、鍵借りてきますね！」

後輩が音楽室を出ると、再び音楽室には私一人になる。私は合唱部に所属している。この時期の合唱部は、夏の大会も定期演奏会も終え、のんびりヒーリングコンサートの練習をしている。ヒーリングコンサートは、最寄りのリハビリセンターで行われるささやかな演奏会だ。あの桃色の建物は、まさに訪問先のリハビリセンターであり、現在は母の居所でもあった。

どんな顔をして歌えばいいのだろう。母は、聞きに来るのだろうか。ヒーリングコンサートが開かれる頃、病室から聞きに出て来られるほど、回復しているだろうか。

楽しそうにお喋りする一年生の声が、音楽室へ近づいてくる。そろそろ活動を始める時間だった。私は発声練習のため、静かにグランドピアノのカバーを剥いだ。

*

ここ最近、家事の分担が自然に出来上がりつつあった。最低限、皿洗いや洗濯はしなくては、生活に支障が出るからだ。相変わらずリビングは、嵐の後のように散らかっていたが、生活に不便しないためか誰も片付けようとしなかった。新たな習慣を取り入れるというのは、想像以上に難しい。

私は皿洗いと炊事を担当するようになった。いつまでもインスタントの食事をしているわけにはいかない。仕方なく料理を勉強するようになった。

一人で皿を洗っていると、ふと昔の出来事を思い出した。

幼いころの私にとって、「お手伝い」といえば皿洗いだった。刃物や火を使う料理はさせてもらえなかったし、水を吸って重くなった衣類を扱うことは当時の私には難しく、洗濯物を干した覚えもあまりない。母が考える、「最も安全に手伝わせられる家事」が皿洗いだったのかもしれない。

幾つの頃だったのだろうか、私は母の外出中、自主的に皿洗いをし始めた。帰ってきた母を驚かせるためだったと記憶している。しかし、私は誤って手を滑らせ、母のティーカップを割ってしまった。

怒られる。

恐怖で混乱し、割れたティーカップをどうにか隠そうとした。割れ物など扱ったこともなく、破片を集めようとした右手を切ってしまう。割れたカップも、滲み出る血も、隠し切れはしなかった。帰ってきた母と目が合ったとき、目をぎゅっと瞑って、肩をすくめた。

案の定怒声が飛んできて、それと同時に抱きしめられた。

結局、ティーカップを割ったことには、何も触れられなかった。ただただ母は、私が自分の指を傷つけた不注意を咎めていた。抱きしめられた時の母の香りとぬくもりが、今でも忘れられない。異様に鮮明な記憶として、今でも残っている。

母親というのは、どうしていい香りがするのだろうか。香水とも柔軟剤とも違う、安心するあの匂い。

皿洗いを終わると同時に、追憶も終えた。水道水を冷たく感じる季節になった。冷水に晒された手は、真っ赤になっていた。

*

見舞いに行くように進める父に、私は忙しいのだと言い訳してきた。それは母に対する言い訳であり、自分に対する言い訳でもあった。

その言い訳に対し、自分で納得できなくなってきた。部室から桃色の建物を見る度、心臓を握りつぶされるように感じる。

「先輩、松原先輩？」

後輩が、私の前でひらひらと手を振っている。

「大丈夫ですか、顔色悪いですよ……？」

「大丈夫。心配してくれてありがとね」

後輩は納得いかない顔で「無理しちゃダメですよ」といった。後輩に軽々しく話せるほど、単純な事情ではない。

今日は母の誕生日だ。何度もメールを打とうとしたが、何を書いていいのかわからなかった。物心ついた時から、誕生日には母親の似顔絵を贈るのが通例になっていた。似顔絵を贈らなかったのは、去年が初めてだった。母と喧嘩が絶えなくなったのは、去年あたりからだったと思う。少し遅めの反抗期は、例の八月一日にかけて悪化の一途を辿っていた。あの日も、浴衣の着付けの件で喧嘩して――。

去年贈れなかった分、今年は似顔絵を贈れたら、と思った。しかし、すぐに考え直す。今、母がどんな顔をしているのかも分からない。

今日会わなかったら、もう関係を修復できない気がしていた。

このままヒーリングコンサートで、親子としてではなく、客と演奏者としてあってしまったら。そこを境に、決定的な溝が出来てしまうような気がした。

それでも足は地面に張り付いたまま動かない。窓の向こうに見えるリハビリセンターは、画面に映し出されるただの像であるようにさえ思えた。

*

部活を終えると、辺りはすっかり暗くなっていた。陽が落ちるのが早くなっている。電車で帰宅する友人と別れ、自転車小屋に向かう。自転車を開錠して、その場で迷った。

行くべきか、行かざるべきか。

冷たい風が表皮を刺すが、なかなか決断できずその場を動けない。その時、ブレザーの内ポケットで携帯がバイブした。

――自宅からだ。電話に出ると、携帯の向こう側から千里の声がした。

『もしもし春香？』

「うん、どした」

『さっきまでお父さんと一緒に、リハビリセンターに行ってたんだけど、お母さんね、今日初めて歩けたんだって。ねえ、今日はお母さんの——』

電話を途中で切った。最後まで聞く必要はない。それに何より、最後まで聞きたくなかった。そして自転車は、リハビリセンターに向かって走り出した。

*

リハビリセンターの前に辿り着いたとき、面会終了時間が間近となっていた。昨年もヒーリングコンサートのために訪れたが、以前感じた印象とはだいぶ違う。赤色灯が唯一の光源となっているロビーは薄暗く、足を踏み入れるのに少し勇気が必要だった。

大きく息を吸い込んで、自動ドアの正面に踏み出した。大判ガラスが両脇にスライドすると同時に、ロビーの主照明が点灯する。この時間ともなると、ロビーには全く人がいない。病室へつながる廊下を歩くと、自分の足音が不気味なほどに響いた。

二〇八号室。四人部屋であるこの部屋の名札に、「松原貞子」の字が入っているのを確認する。お世辞にもかぐわしいとは言い難い病室前の空気を、お腹いっぱい吸い込む。吸って吐いてを何度か繰り返して、内側から胸を殴りつけてくる心臓をなだめた。

緊張の上に、不安が乗っかる。「今さら」と思われまいだろうか。最初に何を言ったらいいのだろう、冗談でも「どちら様ですか」などと言われたら、立ってられないかもしれない。遠回しに「お前のせいでこうなった」と、なじられでもしたら——。

光の速さで巡る思考をかき分けて、右手を扉の取っ手にかけた。そのまま一思いに横へ動かす。扉の向こう側、カーテンが引かれていない一つのベッドが目に入る。出来るだけ平静を装って、歩み寄る。右も左もカーテンの細い歩行路をゆっくり抜けると、奥のベッドに見慣れた姿を認めた。

目が合う。

何も変わっていなかった。倒れる以前の姿そのままの母が、半身を起こしてベッドに寝ていた。少し違うのは、手術のために剃られて短くなった、左半分の髪の毛と、だらしなく放られたように垂れている腕位だろうか。病室着から伸びる四肢は、若干痩せたようにも見える。

「あ、えっと、その」

言葉がうまく出ない。暫く目を見開いて、ただ驚いていた母が最初に言い放った言葉は、「こんな時間に一人で、危ないでしょう！」

だった。ああ、またそうやって、私を心配するのか。連絡の一つもよこさず、顔も見せに来なかった娘を、最後の日も喧嘩したままに分かれた娘を、心配するのか。

脳が少し壊れても、中身は同じ母だった。私がよく知っている、優しく少し過保護な、私の母そのものだった。

こういう時、口はまともに働きやしない。しかし足は自然と母のもとへと引き寄せられて、思わずすぎる様に抱き着いた。

涙だけはどうかこらえ、いいセリフを探した。何も言えないままにただ抱き着く私を、母は左手で抱き寄せた。

「……ごめんなさい」

やっと言葉が出てきた。掠れて上手く言えたかどうか分からない。ただ一度言うと歯止めが効かず、私は謝罪を繰り返した。何に対して謝っているのかも、分からないままに。

「ごめんなさい、おかあさ……ごめん、ごめんなさい」

すると、視界の端で母の右手が持ち上がる。ぎこちない動きで、ゆっくりと挙げられた右手は、私の背中にあてがわれた。右手からも、左手と変わらぬぬくもりが伝わってくる。

割れたティーカップで指を切った幼い日を、思い出した。消毒液にまみれても、母の匂いは変わらなかった。空より広く海より深い安らぎが、ここにある。息苦しくなるほど、腕に力を込める母は、震える声でつぶやいた。

「あーあ、悲しいな。春香に触ってるの、感じないなんて」

その瞬間、我慢していた涙が零れた。右半身の神経が麻痺している母には、分からないのだ。ぬくもりも、柔らかさも。感じる事が、出来ない――。

「もう春香にも、千里にも、何もしてあげられない。死ぬことさえできないなんて、ただの足手まといだね」

母の声が耳元で響く。私は何度も首を横に振った。「そんなことない」の一言さえ、涙が邪魔して出て来なかった。

そんな顔しないで、死なないで。生きてるだけでいいから。

心の中で何度も叫んだ。母は物言えぬ私が泣き止むまで、頭を撫でていてくれた。

泣き止んでしまうと、先程まで心の中で氾濫していた気持ちは、恥ずかしくて口に出せなかった。

代わりに、私は一つお願いをすることにした。

「おかあさん、似顔絵描いてから帰りたい」

面会終了時間を過ぎかかっていることは承知していたが、言ってみた。

「だめ。また今度ね。今日は帰りなさい」

案の定の答えだった。今日でなくては意味がないのに、と文句を言ったが、却下された。

似顔絵を描かなくてはいけないので、どんなに忙しくても来ない訳にはいかない。来ない訳には、いかないのだ。

＊

時の流れは速い。思えば二年の月日など、瞬く間に過ぎて行った。大学生活にも慣れ、冬の足音が聞こえるころとなった。しかし慣れないのは親の方のようで、三日に一度はメールが来る。母の携帯左手打ちも、ずいぶんと速くなったものだ。

『それで、年末はいつ帰ってくるの？』

「だから、まだわからないんだってば」

最早何度目か分からない電話が、今日もかかってくる。歩いて外出するには寒い季節になったので、部屋にこもりきりで退屈しているようだ。

「予定が分かったら、また電話するから」

同じ台詞を何度言ったことだろう。母は今日もようやく納得し、電話を切った。私は一人椅子に腰かけながら、取りたての自動車免許を眺めた。

「帰ったら、足になってあげようかな」

窓辺に目をやれば、サッシが結露している。出来心で窓を開けると、冬の香りが鼻孔をついた。そろそろ、雪が降る。

おわり

あとがき

いつまでも在ると思うな親と金。親は、いついなくなってしまうか、分からないものです。みなさん、ご両親が手の届く世界に居るうちに、親孝行しましょう。

「親から受けた恩は、自分の子供に返してあげなさい」我が母はこういいますが、素直に聞き入れる私ではありません。親に返して、子供にも与えます。倍返しだ！

以上、幼夏ちゃんでした。

凋落、花や葉がしぼんで落ちること。（如月 杏）

凋落、花や葉がしぼんで落ちること。

如月 杏

私の父方の祖母の名前は椿といった。あまり覚えていないのだけれど、幼い頃の私は相当のお婆ちゃんっ子だったらしく、話し相手とか、遊び相手とか、それとお小遣いとか、お世話になりっぱなしだったそうだ。私が中学校に入ったくらいから、私が忙しくなったからか、はたまた彼女の老いの所為なのか、二人きりで話すことが殆どなくなってしまっていた。

老いても綺麗な――美しい人で、若かりし頃はさぞ沢山の男性に言い寄られたことだろうと思うのだが、訊いてみたら、女性からの方が多かった、なんて言っていた。彼女は学生時代、エスカレータ式の女子校に通っていたのだとか。いいところのお嬢様だったというわけではないが、彼女の身体から溢れ出す上品さが関係者の目に留まったらしい（その関係者が一目惚れしたという噂もある。もちろん彼女自身が言い出したことだ）。

では祖父と祖母とは社会に出てから知り合ったのかと思いきや、実は禁断の恋から始まったのだそうだ。祖母は教え子、祖父は教師。初めての教職、初めての女子校でガチガチだった祖父を優しく補佐したのが彼女で、そしてその姿に祖父が惚れたとか。

祖父も恐らく世間では格好いいと言われる部類だと思うのだが、彼ら二人に発現した遺伝子は、私には伝わらなかったようだ。自分で可愛いだの不細工だのと言いたくはないが、敢えて言うなら、少なくとも人好きはしない顔であろう。イケメンって、劣性形質なのだろうか。

祖母は大学を出てすぐに結婚し、それからはずっと専業主婦だったそうで、家事において彼女の右に出る者は、家の中には、どころか訪ね来る親戚やら客やら（本来ならば客人に家事などさせるべきではないのだが、客が彼女と家事対決をしたい、と言い出すことがあった）にさえいなかった。特に料理に関して類まれな才能を持ち合わせていたようで、彼女自身が手がけたものを口にした人は誰もが舌鼓を打つほどだった。

そしてその皆が一様に言うのは、飛び上がるほど美味しいという感じではなく、しみじみと美味しいのだ、ということ。おばあちゃんの味、ということだろうか。彼女が聞いたら憤慨しそうな言葉である。

祖母は決して名前負けすることのない、芯のある人だった。むしろ、芯しかなかったと言えるかもしれない。自分でこうと言ったことはほぼ絶対に曲げない。仕方なしに周りが折れるのだが、すると必ずといっていいほど幸運が舞い込む。一時期、座敷童だとか、福の神だとか呼ばれていた。その時は既に私がいたから、童って年齢ではないと思うのだが。

永遠の六歳児、ということだろうか。確かに、一步引いてよく見れば、考えを曲げない辺りとか、六歳児らしいような気もする。その幼稚さを感じさせなかったのは、年の功ってやつだろう。そういえば、年齢を訊ねた時も、年長者らしからぬ様子になっていたっけ。

「女性に齢を訊くって、女としてどうなのさ」

彼女の言葉だ。

「心はいつまでもうら若き乙女」

これも、彼女の言葉だ。

ある時、彼女はこんな話をした。桜が八分咲きになる頃だった。

「桜の木の下には死体が埋まっているんだよ」

いつもに比べ、真剣そうに言うので、私は正座して応えた。

「梶井基次郎ですか？」

「なんだ、知ってるのかい、つまらないね」

言って、むくれた。とても年長者とは思えない。

「まあいいや」

そうして、次の瞬間にはけろりとしている。やはり、子供のような人だった。

「私が死んだら、庭の桜の根本にでも埋めてとくれ」

死体は焼いて墓に入れるものだと思っていた私は、そんなことしていいのか、と訊いた。

「いいんだよ、バレなきや。私も焼き肉になるよりは、桜の栄養になるほうがいいよ」

冗談か本気か分からない口調で言った。

彼女がよく臥せるようになったのは、最近の事だ。最初は、昼食の後すぐに昼寝だと言って、夕食に呼ばれるまで寝ている程度（それでも普段昼寝などしないから、不思議なことではあった）だったものが、少しずつ少しずつ長くなって、やがて日の出ている間のほとんどを床で過ごすようになっていった。まだその頃は夜起きてから、夕食の片付けを手伝ったり、室内干しの洗濯物を片づけたりもしていた。

少しするとそれすらもなくなって、食事の時に起きてくるだけになり、最期の数日は床に臥したまま、体を起こすこともしなく――できなくなっていた。

そうなれば家族もなんとなく祖母の最期を感じ取るようになっていた。彼女自身は気丈に振舞って（寝たきりだから振る舞うも何もないのだが）いても、その弱りようは、少なくとも私達家族には、火を見るより明らかだった。

日に日に、刻々と衰弱してゆく彼女を見て――看着るのは、私にとって、多分私以外の家族にとっても、そして彼女自身にも苦痛だっただろう。

ある日、家族の誰かが椿の花を買ってきた。多分父親だったと思う。真っ赤な、綺麗な多弁の椿。祖母の希望だったそうだ。枕元に自分と同じ名前の花を置きたかったのだろう、と父親が言っていた。弱っていく彼女の傍で、椿は不気味なほど美しく咲いていた。

「私の命を吸ってるんだろう」

彼女の言葉だ。

「いいんだ、落ち葉は次の花の栄養になるんだから」

これも、彼女の言葉だ。

最期の時、彼女に付いていたのは私だった。父親も母親も、祖父も弟も何かの用事で出かけていて（後で分かったことだが、家族は私と祖母を二人にしようとしたらしい）、家にいたのは私と祖母だけだった。

額のタオルを温かいお湯で絞って、彼女の額に載せる。

「〇〇（私の名前だ）」

「はい」

「そこの椿は咲いているかい」

彼女はいつからか、目は瞑っていた。

「はい、紅くて、雄々しくて、でも可憐で、とても綺麗です」

そうか、それなら好かった。そう言って、彼女は口を閉じた。目は瞑ったままだった。

沈黙が続いた。冷たくなった額のタオルを換えようとした時、思い出したように祖母が呟いた。

「〇〇」

「はい」

声を出し辛いはずの彼女が、何か言おうとしているときには、口元に耳を寄せるようになっていた。

「〇〇、そこにいるかい」

「はい。ちゃんといますし、聞こえていますよ」

少しでも彼女を安心させたかったのだと思う。そんなことを、自然と口にしていて。耳元で、彼女は小さな声で言った。

「椿は見舞いに持って行ってはいけないよ。首が落ちるって、不吉なんだ」

僅かに笑いながら言って、彼女は私の耳にキスをした。唇は乾いていて、くすぐったかったけれど、じんわりと体温が残る。

ぽとり。音を立てて、獅子咲きの紅椿が、畳に落ちた。

おわり

あどかき

（南西諸島海域、バシー島沖にて。昼戦中に画面が暗転）

あれ、こんな特殊カットインあったっけ……？

（中破画像のイムヤ（注、伊号第一六八潜水艦）が沈むような演出とともに、画面にロストの文字）

「ああ、もっと太陽を浴びていたかったな…。海の底はもう…飽きたよ……」

えっ、えっえっ。えー。

おっかしいなあ。なんで六艦で出撃したのに、編成枠空いてるんだらう。イムヤいないんだらう。

ねえ、危なくなつたから急速潜行したんだよね、ね。もう戦闘終わったよ……？ 夜戦もないよ……？ なんでずっと海の中にいるの、ねえ。

海の底飽きたんでしょ、ほら、上がってきなよ。戦闘のあと、補給もまだしてないでしょ？ 怪我してたから、お風呂も入らなきゃだし。ね。

ちょっと出かけてただけど、帰ったら大鳳駆逐幼稚園で第六駆逐隊たちのお世話してるイムヤが出迎えてくれるよね。お仕事しながらスマホしてるのを注意させてくれるんだよね。

ねえ、帰ってきてよ。そしたら幼稚園の皆で、晴れた日にピクニックにでも行こうよ。お日様好きだよ。ね。

ほら、ゴーヤ(注、伊号第五八潜水艦)も寂しがってるよ。うちにはイムヤとゴーヤしか潜水艦いないんだからさ。

だからさ。

早く帰ってきてよ。

(その後、北方海域アルフォンシーノ方面進出にて。戦闘後のドロップが水色背景でがっかりしていた所、)

「伊一六八よ。何よ、言いにくいなの？ じゃ、イムヤでいいわ…よろしくねっ！」

誰がそんなに早く出てこいと言った。

まあその日のうちに帰ってきてくれて良かったです。ちょっと深海棲艦たちと遊んでたんですね。おかえりなさい。

ちなみに、原因は中破出撃でした。目を離していて、中破カットインがなかったのをいいことに進撃したら、見事に大破してました。皆様も中破進撃の際は、必ず戦績を確認しましょうね。困ったらF5……おや、誰か来たようだ。

(艦これをご存知でない方、お嫌いな方、並びに艦娘たちを愛する提督様には、不愉快な表現があったことをお詫びします)

対して話す（自分）

対して話す

木材

水谷

高天 美月

自分 著

自分 編

《これは、二〇一三年一月に行われた、文芸部の著者、木材氏、水谷氏、高天美月氏の対話である》

おもしろいということ

水谷 これ始まっての？

自分 始めますか。

木材 始めますか、はい。

自分 では、お忙しい中、自分の企画にご協力いただきありがとうございます。

水谷 いえいえ。

木材 どういたしまして。

自分 参加者様にはメールをお送りしてますので、やることは大体おわかりいただいていると思います[①]。基本的に対話ということで、お話をさせていただく。で、目的は、聞き取って各自で、得るものがあればいいねというところがあったりなかったり、結構雑だったりするのですが。一応一番最初のお題ということで、「おもしろいということ」というのを設定しましたので、そこから入っていきたいと思います。ではまず、お一人ずつ聞いていく形で……。木材さんは……。

木材 はい。

自分 前回と特に変更はないです……。

木材 なあいよっ[②]。

自分 ハハ……、はい。自分自身がおもしろいと思えば「おもしろい」……ですね。

木材 はい、何かおもしろいって思うこと。

自分 はい。では水谷さん。

水谷 あ、そう。え、これもう話に話かぶせてく感じでぺちやくちやしやべって、録音のこととか考えなくていい……。

木材 って感じですかね。前書きが終わったって感じで、説明文が終わって、スタート。

水谷 「おもしろい」ということ、まあ前回もらった質問に答えてみた結果なんだけど、やっぱり作品だったら得られるものがあるってのがおもしろさだろうなあっていう風に思って、思ったんだよなあ。で、得られるものってホントに何でもいいんだけど、何か、おもしろい言い回しと

か自分が聞いたことない言い回しとか……ねえ。フフフ、大体同じだったじゃん[③]。その、まあそういうところ、一言で言うと。

木材 う～ん。

水谷 で、書く時でも読む時でもベストがそこかなって感じ。はい……。フフフ。

木材 で、回していく感じか。

高天 私にとって「おもしろい」っていうのは……。

水谷 読むな！（笑）

木材 読み上げるな！（笑）[④]

水谷 もう本当に録音のこと考えないで、さっきみたいな。

木材 さっきみたいな雑談を、続けていこうという、意志で、わたくしやっております。

高天 これは、率直に答えればいいんですか。なぜとか、答えなくても。

自分 読み手側を考える場合は、何とか自分が頑張るんで（笑）。

水谷 コンパクトにするよね。

自分 はい。

木材 よし、じゃあ普通に、まじめな話しようっていう。

自分 はい。

高天 私は、「おもしろい」はとりあえず、読み手として答えるならば、小説で言うなら今まで私の読んだことのない小説は全ておもしろい、ということになる。

木材 う～ん、見たことないなら全部。

高天 まあ言ってしまうえば、簡単な言葉で言えば、「未知の体験」がおもしろいということですが、ですが、そんな中でも読んでいて、でも「これはおもしろくないなあ」って思う時は、ありますよね。

水谷 うん、あるよね。

木材 ありますよね、それはね。

高天 それはやっぱり、好みがあると思うんですね。例えば「自分はこれが好きだ」という、アンテナとかチャンネルとかあって、で、それを私は今回頑張って考えた結果、何が必要か、何があればとりあえずおもしろくなるだろうかって考えたら、とりあえず四つ出したんですけど。

水谷 ほう。

高天 事前に送ったメールには三つしか、書かれてなかったんですけど、対談の四日前に、「あ、そういえばあれもあるじゃん」って思って追加したんですけど、まず一つ目に「意外性」がある、二番目に「ド派手」、三番目に「シンプル」、で、四番目にその一、二、三が必然的に生まれたもの、「必然性」がそこにあるっていうことで。

水谷 ああ。

木材 ああ、はいはいはいはい。

水谷 おもしろいじゃん。

木材 そうなるようになった、ならざるをえなかった。せざるをえなかったといえますか。

高天 作者がそれを、書いた必然性？ 例えば意外性だったら、意外性を描くために作品を書いたのだったら、書いたとしても、そこから物語世界を構築するわけですよね。

木材 はいはい。

高天 で、その、トリックの要請とかで作られた世界は、私は好きなんでいいんですけど、例えば使われなかった設定とか、たまにあると、その設定と作者が想定する意外性の結びつきはっていう、いらぬものは何一つないってというのが、理想かなって。

水谷 ああ、うん。

木材 うんうん。

高天 地に足がつかない状態になってしまうのは、あまりおもしろくないなってというのが、最近読んだ本にあったので。

木材 まずこれがあって、そこから、何か続いて意外性抜群になったし、ド派手になったし、単純明快にもなったよっていう、そういう風につながってるのが、いいよねっていう。

高天 例えば、叙述トリックとか、あるんですけど。

水谷 俺好きだよ。

高天 叙述トリックとかをやるために、作品を書くと、叙述トリックって読者に対してのみ有効なんですよ。

木材 はいはいはいはい。

高天 登場人物達にはそれはもう明らかですから。つまり、叙述トリックと登場人物たちの世界は、別につながってないんですよ、必然性がない。つまり、私は別に叙述トリックは嫌いではないですけど……。

水谷 あ、そうなの。嫌って書いてあったよ。ハハ。

高天 嫌って書いてましたっけ……。

水谷 部誌に部誌に[⑤]。

木材 あっ、あれな。あとがきのところにずらっと書いてあるのの中の一つか。

水谷 はい、はい、はいはい。

高天 ……あああ。

水谷 じっくり読んできた。

高天 結びつきは薄いですよ。

木材・水谷 はい。

高天 だからその……、あまり地に足がついてないというか、間が抜けているというわけではないですけど……。

水谷 何だろうね。

木材 何かずれてる。

高天 何かずれてる印象が。

木材 二つとりあえずコンビじゃなくて一緒にいる、ピン芸人が二人。

水谷 メタ次元のところにいるよ、物語内には関係ない読者に見せ方の問題というか、という気はする。

木材 はいはいはいはい。

高天 別にその、叙述トリックをやりたいんだったら、その世界観じゃなくてもいいし、その登場人物でなくてもいい。

水谷 ああ。

木材 そこにつながりはないよねっていう。

高天 逆ならいいんです。叙述トリックやりたいからじゃなくて、その登場人物を出した上で、「あ、じゃあこれができるね」だったら。

水谷 ああ、はいはいはいはい。

木材 うんうんうんうん。その世界観だからこそできるっていうつながりがあれば。

高天 っていう感じでやっていくと、「あれ、じゃあ必然性が一番重要なんじゃないの」っていう話になるんですけど、でもよくわからないなってなる。

木材 小説の中の要素が全部つながっているといいよねっていうそんな感じですよ。

水谷 必然性って聞いて、そうか、俺が思ったことと結構違ったんだけど、それで必然性っていうか何かその、作者がそれ作るにあたっての必然性じゃん。

木材 ああ、はいはい。

水谷 何となく俺、色々賞とかチェックしてみたときに[⑥]、必然性って言葉出た時って、物語の進み方の必然性っていうか、別にこいつが何もこういう風になるはずがないのにここで助かっちゃうとか。

木材 なる必要ないよねっていう。

水谷 そういう予定調和とか、予定調和しないとか、そういうやつの方だと思って……。

高天 それも含みますね。

水谷 それも含む？ それもやっぱ作者の作り方の問題なのかな。

高天 同じです。作者がその登場人物をどう動かしたいか、その物語の世界とその登場人物の行動原理に、やっぱり必然性。

水谷 やっぱり必然性かあ。

木材 総合的に見て、「これである必要はないよね」って言わせないようなものもいい、っていう感じですかね。

水谷 これである必要がでも、見え透いちゃうのもよくないってない？

木材 あああ。あざとすぎる。

水谷 少年漫画的には敵が出てきて逆転しないといけないじゃん。何かそういうので、作者そういうの書きたくて、そのために逆転するための何かその、パワーとか、敵の弱点とか色々設定して、それがもうちょうどよく主人公も追い込まれたところで、「そういえばこれとこれとこれあれば倒せるじゃんえい」っていう風に、やっちゃうみたいなのが、作者の思惑が見え透けちゃうっていうか。

木材 うんうんうんうん。

水谷 まあそれはこの流れでやりたかったんだらうなっていうのが見えちゃって、逆にダメみたいの、気にしない？ このキャラがいて、この世界観でなら、叙述トリックできるわって、何か

その調和で考えて、一本のラインなってんだけど、あんまりにも「そらそうなるわな」ってか、そういうの見え透いてもよくないみたいな……。

木材 つまり、簡単に言うと、双子が出てきたら、「ああこれ入れ替えトリックがあるんだな」っていう風に思うやつと同じようなやつですよ。

水谷 ハハ。かな、かな。

木材 違うか。

水谷 どうなんだろうな。

木材 逆に、必然性で組み合わせると展開が予想できちゃったりして、萎えちゃうみたいな。

水谷 ばれるとよくないみたいな気はしますけどね。

木材 はいはい。

藍染時止め密室ディアボロ論争（ネタバレ注意！）

水谷 何で必然性ないとダメなんだろうな。

高天 ご都合主義感は……。

水谷 やだよ。……そうだなあ、ご都合主義感はいやだよ。

高天 読んでるうちは「ああカッコいい」って思っても、冷静になって読み返してみると、「あれ、何でこの主人公が急にパワーアップしたんだろう」みたいな。

水谷 ハハ。そういうの冷める時ってあるよね。それ読んでる間無事だったらいけど、読んでる間「はい」ってなっちゃうの、あれは、あの原因何だろうね。あれも、意外性の問題……。

まあ、ここで逆転するもんだから、逆転したんだなあっていう、構造を知っちゃってるから。

木材 For example を出した方がいいと思う〔⑦〕。

水谷 例えば……。

木材 例えば、えっとまああれかな、死神の力を失う代わりに一時的にすごい力を出して、藍染を倒すみたいな。

水谷 言っちゃった、ハハハ。そうですねそうですね。

木材 そういう感じのって、ちょっとさーっていう(笑)。

水谷 あれはもう勝つ場所だから勝ったってだけで、何も頑張っていないというか、意外性がない。

高天 そもそも作者がそういう人だから。

水谷 もうこれ勝たせたかったんやなっていうところしか見えない。……藍染(笑)。

木材 何か違う気もしますけど……。

水谷 でも、あれは確かに冷めましたもんね。俺、最高に冷めて。確かにわかりやすい「つまんない」の代表だったなって気はします。

木材 あれは単純にこう、なんか強くなった、倒したっていうだけだからつまんないんじゃないかなあと思う。思わんではない気がします。

水谷 必然性ない……。

高天 その主人公でなくてはできないこと、まあそれだと素質がどうのこうのっていう……、ありますけど、そりゃじゃあちよつとっていう。

水谷 ちよつと、だよね。

高天 素質はあってもいいですけど、その素質を活かしてきた場面から、あ、じゃあこれもできるからっていう、そういう流れがあるならいいですけど、突発的に出るのは……。

水谷 だ、よね。そっか。それは必然性の問題なのかな。

木材 難しいななんか。

水谷 そうですね。

木材 ええ。個人的なところだと、斬月のおっさんが解放されるころまではいいと思う。

水谷 はい、俺も思う。

木材 斬月のおっさんが解放されるころまではいいと思う。^{ばんかい}卍解もセーフだと思う。

水谷 卍解もセーフだと思います。

木材 そこからちよつと^{ほろうか}虚化が入ってくると、ちよつと、「ヌツ？」っていう風になってくる気がする。

水谷 ああ、確かに……。

木材 虚化は……、まだギリギリセーフかなって言う感じ。^{フルプリング}完現術……。完現術はまあなくなったからいいとして。

水谷 ハハハ。

木材 完現術と死神に力を組み合わせた、「ちよつと待て」っていう。まあ、繰り返しの問題かな、そっちの方だと、例えだと……。連続で、なんか繰り返して覚醒覚醒覚醒、強くなっていく強くなっていく強くなっていくっていう感じ。だからダメなだけかもしれない。

水谷 やっぱ流れが、「だよね知ってる」ってなっちゃうから。

木材 承太郎が時止めに覚醒するのはありだと思うんですよね。

水谷 ハハ、そうですね。……え、そうか？ あれはありなんですか。時々アッチも疑問に思う時ありますけど。

木材 ああ、はいはい。突発的な都合いい覚醒っぽいところはあるかな。

高天 ま、若干ありますけど。

木材 若干ある、それは若干ある。つまり若干あるってことは、要素は持ってるんだな。

水谷 その、藍染につながる(笑)。

木材 藍染に近い。

水谷 藍染、あの鏡花……、もういいよ藍染の話するよ(笑)。鏡花水月って技あったじゃないですか。

木材 ええ。

水谷 俺、もうこれ絶対倒せねえだろって思って、あれジョジョの色んなラスボスでも共通するものあるなあって思って、もう勝てねえわって思って、どうやって倒すんだろ、そんなんいいわバーンて倒したじゃないですか。

木材 うんうん。

水谷 あれの異端さというか、それと同じ感が、承太郎の時止めにもあるような気がして。

高天 若干設定が崩壊しかけてる、ギリギリのセーフっていう。

木材 今までの積み重ねがあるから、まあセーフかなって思わされてるのがあるんだろうな。

水谷 そうそう。説得力の問題。

木材 説得力の問題……。

水谷 何であれが冷めるか……、はい(笑)。

(高天さんに振る。高天さん、苦笑いで)

高天 あれってどれですか？

木材 突発的な覚醒？

水谷 突発的な覚醒、承太郎の時止め、一護の無双、ハハ。……俺これ、固めれた方がいい。

木材 うん。ちょっと仮に固めておこう。

水谷 何でだろうね。結局ジョジョとかの話になっちゃうハハ。

木材 なりましたね。まあ、まあ……。

水谷 おもしろいから。

木材 おもしろいから。

水谷 ダメなのは……。 「必然性」っていう言葉がテーマにあるよね、カギとして、流れとして。……ミステリーともつながりそうな気がするんだけど。構造としてはさ、犯人がいる、謎がある、で解決方法が全然わかんない、とかがあって、でその主人公、探偵的な人が歩き回って、証拠見つけて、それ組み合わせて最後には解決、じゃん。

木材 はい。

水谷 証拠が出てから、解決に説得力が出るのかな、どうなんだろう……。

高天 それは、推理小説で言うなら、探偵という存在そのものが既に、探偵だからこその世界を、秩序正しく収められることができるっていう、いわゆる神の存在なんです。だから説得力が出るわけで……。

木材 はい。

水谷 あそうか、あれはそういうもんだからか。

木材 実際、探偵ものの小説と、探偵もののTRPG[⑧]みたいな、いわゆる読者が推理してねっというの、難易度がダンチなんですよね。

水谷 そっか、推理小説のあれは、もうこいつが回答役ですっていう前提があるの？

高天 そうです。たいていはそうです。でそれを、逆手にとったミステリーもあるにはあるんですけど、基本的には。

水谷 それ逆手だもんね、あくまで。

高天 でそれが、探偵の存在に関する、話題としては、後期クイーン問題[⑨]ってのがあってあるんですけど、それは関係ない。

木材 置いておく？

高天 置いておきましょう。

水谷 えっと、藍染の話、ハハ。

木材 藍染の話。

高天 藍染の話だと……。

水谷 藍染の話ですと、主人公は、あれ倒すよね絶対ね。倒す前提だったよね。

木材 倒しますね。倒さなきゃいけない。

水谷 紆余曲折経ても、こいつが「倒す」んでしょってことは、はるか前から知ってたよね。にもかかわらず納得ができななかつたよね……。

木材 あれかな、読者の期待を裏切る形になったのかな。まず、こんな敵がいます。こいつやべえじゃん、「どうやって」倒すんだろうか。倒すはわかってる。どうやってのところがすごく気になる謎。

水谷 あった。

木材 で、そこの「どうやって」のところに結局当てはまったのが、「強くなって倒す」。……いやそれ俺でも想像できるしっていう。

水谷 解答例合っていないのかな。推理小説で言うところの、こいつ犯人じゃね、探偵頑張る、やべえでも全然カギ集まんねえ謎完璧すぎる、お前本当に犯人なのかわかんねえぞ、で犯人が実際俺犯人でした、あマジか、解決っていう、そういう違和感。

木材 それはいやだ。

水谷 謎と答えが合っていない。

木材 はいはいはいはい。読者の期待と何か違うっていう。何をやるとそれが起こるのかっていうと難しいですけど。……言語化はしにくいもの。

(木材さんが高天さんに振る)

水谷 ハハハ、困ったら振るスタイル。多分、推理小説を例にとるなら、意外性？ 推理小説の意外性っていうのはどっちかっていうと、トリックですよ。

木材 はい。

高天 でその、探偵が解決するのはいいとして、そのトリック、ここで言う必然性っていうのは、犯人がそのトリックを行使した理由。

木材 ううん。

水谷 とかかな、も含めではあるけれども。

高天 例えばその、なんで殺したかは別にいいんですよ。

木材 はい、今回は。

高天 おまけなんで。ただその、例えば密室殺人、なぜ密室を作ったのか、作らざるをえなかったのかっていう。

水谷 それはあるね。何となくじゃよくない場所。

木材 ええ。犯人として疑われたくないからみたいな。

高天 でそこで、密室トリックを使うために、その密室を含む館を作るわけですよ、それは必要ですから。

水谷 うんうん。

高天 で、世界観を作る。でその、世界観……。ちょっと待ってくださいね、今考えますから。

水谷 俺も俺も。

木材 やっぱり私は、読者の期待がどうやってそれ、難しいこと、例えば藍染を倒すとか、例えば密室を作る、密室作ってその中で人を殺すとか、まあ難しいこと普通できないようなことをやるんですけど、それをどうやってやるのかの期待が裏切られた感じを受けるっていうのが、なん

かポイントなのかなあと思いましたね。例えば、密室殺人が起こったぞっていう時に犯人は実は俺でした。で、わざわざ密室になるような部屋を館にちょっと作ってもらって、ちょっと人が見えないようなところに指紋認証があるんだけど、そこで俺だけあてられるんだけど、っていう風にやったら興ざめじゃん。

水谷 それ興ざめですよ。そうか。

木材 その期待度の部分が、何か関わってるんじゃないかと、まあ仮説としてふと思った。

水谷 期待と回収のプロセスが、成立してないというか、バグっちゃってる。

木材 はいはいはいはい。

水谷 それはあるか。

木材 肩すかし感、があるかもしれないと、ちょっと思いました。

高天 そっちですか。あ、そっちの方かと。

木材 すみません。どこ考えてるかは、全般だと思っただけです。

高天 今はその、ご都合主義感の話でしたっけ。

木材 ご都合主義周り全般。えっと承太郎のスタープラチナ時止め疑惑。

水谷 そのご都合主義感っていうのがあって。

高天 別の例の方がいいって。

木材 ごめんね。

水谷 それ俺の考えを言っちゃうと、やっぱ結構結論、俺の今の中の結論は、木材さんのさっき言った答えと同じで、やっぱ期待感っていうのが生じるじゃん。で期待感の正体っていうのが何かあって、ちょっと物語論[⑩]に走るけど、何か欠如、読者に何か与えられてない情報があって、ミステリーだったら犯人の動機だとか、トリックそのものを一体どうやって犯人は成し遂げたのかとか、そういうのが情報の欠如としてある――

* (中断) * [⑩]

木材 再スタート。

水谷 じゃあ、各々結論、結論じゃないけど、思っていることからいってみようか。……俺かな。

木材 はい、どうぞ。

水谷 物語論だったね。その欠如の回復のプロセスがしっかり、藍染で言うところのハハ、「鏡花水月をどうやって破るんだろう」っていう期待を、期待というか欠如を、情報の欠如を読者に生じさせてたのに対して、最終の回答が鏡花水月とかどうでもいいねんって藍染が強くなって、で主人公も、じゃあ俺もどうでもいいわって言って強くなって、はい勝った。俺の方が強かったでしょっていうのと、最初に提示されてた情報の欠如が満たされていないので「キモい」、っていうのが第一で、密室トリックポイして、実は俺が知らない秘密の抜け道があって、秘密の抜け道ってタブーだよ。

木材 うん。

高天 まあ、基本的には。

水谷 基本的には。で、その秘密の抜け道があったんだよ、ああなんだよ良かった……おい！ っ

てそういうのがダメ、なのも同じく、最初に提示されてない、今まで出してきた、構築してきた密室の謎全部パーかよって、この話はいったい何なんだよっていう謎の回収ができてないので、欠如回復がしっかりいってないので、ダメってというのが一個、つまらなさの原因で、それを起こさないのがおもしろさの条件かな。まあ条件かなってというのが。

木材 まあ起こしたら興ざめするよねっていう。

水谷 興ざめするよねのパターンってことです。はい。

高天 私はその、今回は藍染ではなくてディアボロの……。ジオルノを出しますけど、あれのタイム、決着も少々ご都合主義感は否めない。

木材 ええ。ディアボロが強い、どうしようっていう風になって、ジオルノが「ゴールドエクスペリエンスレクイエムに、この矢を刺して……」強くなった、ゴールドエクスペリエンスレクイエム、一撃必殺！ ……勝ちっていう、そういう流れでしたもんね。

高天 やっぱりなんか、自分の能力を活かしてっていうところじゃない。そのキャラでしかできないことって言うと、同じ言葉になっちゃう。

水谷 まあいいじゃん。

木材 ディアボロっていう敵に、ジオルノっていう。

高天 設定したからには……。

木材 これでどう勝つのっていう。

高天 だからやっぱり、必然性。そのキャラに、そのキャラを据えた結びつきがないと、読者にとっては。

水谷 納得できない……。

高天 納得できないというか、それはないよっていう。

水谷 ないよ、だよ。

高天 「どのキャラでもいいじゃん」ってなっちゃう。

木材 じゃあ俺もちよっと矢刺すからさ……。

水谷 それ藍染で（笑）、ディアボロがエピタフとかどうでもいいんで俺も強いぞーってなって、俺がゴールドエクスペリエンスになることだつって、バンてやられたら同じになるの。ホントだ。

木材 ホントだ、うん。

高天 っていう。

水谷 っていう一つ、藍染時止め密室ディアボロ論争……かな。ハハ。

木材 私もおよそ同じで、この枠組み中で、何とかしてくださいっていうところで、実はこの枠組みの外で何とかしたよっていう風に言われたら、それちよっと卑怯じゃねっていう、興ざめだよっていう。そういうのが問題だなんて思ってますんで、大体結論的には一致している感じですかね。

水谷 これでじゃあ、一個片付いた感じですかね。じゃあ、話題探しましょうか。ジョジョオールスターバトルの永久コンボって最近なくなっただけですけど————

水谷 イエイ、`いたはら[⑫]、見てる～。一年生のみんな、今時間あるから新人賞出そうぜ。一年生のうち書かないと多分書かないよ、頑張れ。これを読んでる頃、私はもう三年生です。

* (中略) *

高天 わたくし高天美月は、……案山子六十六号の製本版以降、小説を書くことはないでしょう。

木材・水谷 ほう。

水谷 To be continued.

木材 To be continued。次回のために謎を残しておくって感じ。……いい引きだよ。

高天 つまりこの対談が、私の遺作というか、そういうものになるでしょう。以上。

* (中略) *

木材 で、まわってきたのが私かな。えっとね、言外からここでこう言ったのは、こういう意図なんだなってのはあれですよ。藍染惣右介を例に出したり、「僕の考えたオリジナル斬魄刀ね」って言ったり[⑬]して、こいつ口では、ああも言いながらも、結構『BLEACH』好きなんだなっていうのが読み取れますよねっていう。ちょっと客観的に考えて思った。……はい！

水谷 ハハハハ。

木材 なんか、もうちょっとかっこいいことも言えなくもないけど、まあいいや。あ、でもこの間『BLEACH』読んだんですけどね、むっちゃくちゃおもしろいの。マジで、ほんっとうにおもしろい。

水谷 ソウルソサイエティ 尸魂界 編までは嫌いじゃない。

木材 そうそうそうそう。なんだかんだで、尸魂界編からインフレの影が見え始めるから、ちょっと「ヌツ？」て言う風になってきますけど、少なくとも尸魂界入る前まではすげえおもしろいと思う。

水谷 藍染は……ハハ。

木材 藍染はなあ。

水谷 転倒は藍染（笑）。

木材 っていう感じです。

水谷 まさかの『BLEACH』……。

木材 藍染惣右介で始まり、藍染惣右介で終わるっていう、ろくでもないことになりましたが————

编者より

これが、数時間に及んだ対話の冒頭三十分と終わり数分の内容である。ここに載せられなかった対話内容は、完全版として、文芸部のブログに投稿する予定である。

おもしろいということとはなんであるか。三人の異なる著者がいれば、異なる視点や価値観の衝

突が多くあってもおかしくはない。だが、今回としては、思った以上にそれが少なかったように思う。むしろ、言葉の定義の共有齟齬という問題を解決しながら、共通の仮定的結論を導くにまで至った。

高天氏の提示した「必然性」の有無を起源とした、「おもしろさ」に関する対話の深まりは、まず話者同士における「必然性」という言葉の定義共有を経る。そして、「つまらない」ものは「情報の欠如」の回復に失敗した「ご都合主義感」に起因する、という共通認識から、少なくともつまらないためには、出てきたもの、設定されてきたものから、納得のいく「必然性」を持った「欠如回復」のプロセスが必須であるという一定の結論を導くこととなった。

冒頭にある「おもしろいということ」とはなんであるかという問いの回答は、木材氏は一貫して「自らのおもしろいという感情」、水谷氏は「何かしらを得ること」で、高天氏は、「意外性」、「ド派手」、「シンプル」、そして同時に必要条件となる「必然性」と、一見してバラバラである。しかし、衝突が少なかったことから、編者は、その本質はかなり似ているものだという仮定をたて、このことについて考察してみることにした。

高天氏の提示した意外性と必然性は背反存在に思えるが、必然性を理性、意外性を読み手の知識体系の侵食と考えるなら、違いは明らかである。

読み手の知識体系の外に、理性的に処理しうる情報や知識が存在した時、それは驚きと納得の双方が訪れる。これが、高天氏の「おもしろい」の要素の関係性かもしれない。

そしてこのような気づきの営みから生まれるであろう「あ、そういうのもあるんだ」という言葉は「何かを得る」という水谷氏の「おもしろい」の定義に非常に近いものではないだろうか。

「それわかる」と、既に知っているものには「飽き」がくる。わかりきっているものはおもしろくない。だからこそ、自分の中になかったものには、注目をする。これが意外性の必要性だ。

一方で、未知のものの出現が突発的すぎたり、非論理的であったりすると、読者は納得できない、受け止められないのだ。それはきっと、おもしろくないと感じるに違いない。未知の事象は、読者の理性のうちで認識できるものである必要がある。わからなければ、おもしろいかどうかすら、評価することはできない。つまりこれが必然性の必要性だろう。

となると、作品自体に絶対的なそれらを求めるとするのは、中々難しいことになる。もしこれに基づくのであれば、問題にしなければならないのは、読者自身の「おもしろさ」の枠組みになるからだ。

だが、これこそ「人」という最もわかりづらいものを扱わねばならず、さすがにその論を展開するには、今回はその場にふさわしくないので書かないことにするが、だからこそ木材氏がそうするように、まずは何より自らの「おもしろい」の感性を重んじることが、現状最も「おもしろい」を実践できる方法なのかもしれない。

そして、前回の対話において秋月氏が述べていたように、自分にとって「おもしろい」ものを「力を入れて書けば、つまらないということはない」、誰かの琴線に触れるものを書くことができるのかもしれない。

この『対して話す』に、編者は以下のような期待を抱いている。①部内作家の三人に「おもしろいということ」というお題で、自由に対話していただき、そこから生まれるだろう何かと、その

営みを分析し、その知を共有する。②対話を通して三人の作家について知り、作品の鑑賞をより有意義なものにする。③読者、対話者、編者等この対話篇に触れた人全員の「おもしろいこと」への普遍的な探求のきっかけやてがかりにする。

編者にとって、これは「対話篇」と呼ぶべき存在である。というのは、この作品の本質が対話に他ならないということからなのだが……。

そもそも編者が対話と呼んでいるものとは、作品中の話者の会話のみにとどまらない。先にあげた編者の目的の③にもあるように、この作品は読者にも会話を求めているのだ。つまり、読者も話者の一人なのである。

だが、物理的に作品内の話者に読者が語り掛けるのは不可能なことだ。もちろん、話者もリアルタイムで話した内容が後の考えと同じであるとは限らない。話者のみの会話も、作品と読者のみの会話も本質的には編者の望んだ対話になりえないということだ。

そこで注目したいのが目的の①と②だ。ここにこそ、編者の望む対話の本質が隠されている。

読者と読者、読者と話者の作品、そして作者としての話者と読者……。これらの会話は市販化された作品では、共時的なものになりがちである。それは①と②の営みが非常に少なく希薄であることに帰結するからだ。そのような市販化された作品や、著名な作者との会話では対話にならないのだ。

だが、話者のみ、読者のみで止まっていた会話の営みを通時的に行うことができる、作者と作品と読者が一同に会し、日常的会話という形でもその余韻がいつまでも残る、新大文芸部であればどうだろうか。輪読会や、部活中・後の何気ない会話。本作品は文芸部員によって構成され、文芸部員によって会話されることで初めて「対話篇」として完成し、それであり続けるのだ。

そして編者は、そんなきれいごとで色付けをした営みの中で、その部員がどんな人なのかを知ろうと企んでいるのである。

省みの間

カエル 今回は三人か。やはり充実したものになったな。

自分 そうだね。

カエル だが、十一月の頭に録音しておいて、結局編集し終わるのが締切当日とは、やはりお前は口だけだな。レコーダの維持管理も雑みたいだったし。

自分 ……。

カエル それに、最後のお前のまとめと目的の説明も、なんだかうさんくさいな。

自分 そうかもね。でも、やりたかったんだし……。

カエル やりたいことやるにしても、協力してくれる人や、読む人間がいるということは、問題にしなきゃいけないだろ。いつからそんなに偉くなったんだ？ 特に目的の最後とかな。

自分 別に偉くなったつもりはないよ。でも、やれるのならやりたいし、やれるの今しかないかなと思ったから……。

カエル あっそ。じゃあ俺は知らないわ。好きなだけ書いて、批判されるだけ批判されればいい

んじゃないのか？

自分 そのつもりだよ。それに、批判されなきゃ何が悪いかわかんないし。

カエル ……お前、何だか変わったな。それならまあ、行き過ぎない程度に頑張ればいいと思うよ。

最後に

ご協力いただいた、木材氏、水谷氏、高天美月氏に感謝申し上げます。

编者

脚注

[①]話者には事前に質問を行った。事前質問の回答についても、完全版と共に投稿する予定である。

[②]木材氏には、二〇一三年の夏号でも、秋月氏と共に同企画に参加していただいた。

[③]高天氏の質問シートへの回答と内容が似ていたことを指している。後日質問の返答を参考にしたい。

[④]この時、高天氏は質問シートを棒読みした。

[⑤]二〇一三年夏号、高天氏の作品あとがき(?)を参照。

[⑥]水谷氏は、個人で作品を新人賞に投稿し、最終選考まで残ったことがある。

[⑦]ここから例として様々な作品中のキャラやシーンが登場する。詳しくは作品をご覧になるか、ググってください。

[⑧]トークロールプレイングゲーム。一種のパーティーゲーム。

[⑨] [推理作家のエラリー・クイーン](#)が著した後期作品群に典型的に見られる2つの問題の総称。
(Wikipediaより)

[⑩]水谷氏の専攻。

[⑪]レコーダー電池切れ。申し訳ありません。

[⑫]某文芸部員。

[⑬]前回対話篇での木材氏の発言の一部。

おきみやげ（止考作後）

おきみやげ

止考作後

1

人がまばらに見える大通りは、赤く染まっていた。見上げると赤い空、その下をたくさんのカラスが飛んでいる。もうすぐ日が沈む。最近ここの辺りで変質者が出たらしいから、制服で女子高生と身分を明かしている私たちは、早めに帰ったほうがいいのだろう。

突然、横からシャッターの音が私を襲った。反射的に振りむくと、サチがケータイ片手に笑みを浮かべていた。

サチは私の妹だ。歳は私の一つ下で、今は高校一年生。

「残念。逆光だ」

「いや、なんで撮ったのさ？」

「ゆうき姉が面白そうな顔してたから」

サチはそう言ってケータイを見せてくるが、サチの言う通り背景の夕日のせいで、その面白そうな顔が真っ暗だ。

「しょうがない。逆光のときはどうすればいいか、教えてあげるとしよう」

「え、知ってるけど……あ」

サチの言葉を見無視し、私は半ば無理やりケータイを奪う。そしてさっきの写真を破棄してからケータイを閉じて、固まっているサチに返した。

「……勝手に消すのはひどい」

「勝手に撮るほうが悪い。撮るなら百億万払いなさい」

そう言って私は、サチに手のひらを見せた。少しの間しらけた空気が流れる。それに耐えきれなくなったのか、サチが小さな声で笑い始めた。それを見て私も吹き出してしまい、またシャッターの音がした。

「言ったそばからやります？」

「ごめん、間違っって押しちゃった」

笑いながら謝るサチ。でもそれが本心でないのはバレバレだ。その証拠に、手の動きからして確実に保存している。

「ちょっと一、なに保存しちゃってんのさ」

多少強引にサチのケータイを覗きこんだ。そしてある写真が目に入った。

「そうだ、この写真のことなんだけどさ」

「これ？」

私が指差したのは、私とサチのツーショット写真だ。二人とも笑顔でピースしている。家族旅行で沖縄に行ったときの写真で、お互い手首にハイビスカスのコサージュをつけている。

「このコサージュちょっと貸してもらえる？ 友達が借りたいって言っててさ」

サチから反応がない。サチの顔を見てみると、明らかに顔が引きつっている。

「まさか、失くした？」

「……失くしてない」

「じゃあ、どこにあるの？」

「……引き出しのどっか」

「失くしたんだね」

サチは黙り込んでしまった。ケータイで口元を隠し、視線はどっか遠くに向いている。私は呆れてため息しか出てこない。

「サチー。いらぬものは捨てなって言ったじゃん」

「……全部、いるもん」

サチの呟いてるように小さな声。その顔は物憂げな表情をしている。今度は自分に呆れてため息が出た。それと同時に、暗い顔のサチを元気づけようと、実際にはイタズラ心から、サチをくすぐってやろうと思った。

「ごめんねサチ。でもそんな顔しないでさ」

サチの後ろに回りこんで、サチのお腹に抱きつき、

「笑ってわら——」

痛みと生温かさ。それが私の背中を襲い——

2

「……あれ？」

気づいたら、私は部屋の中にいた。見覚えがある部屋で、すぐに自分の部屋だと分かった。でも、さっきまで私はたしかにサチと一緒にいたはずだ。

「……夢、だったのかな？」

「ちげーよ」

後ろから声が聞こえた。振り向くと、純白の衣服をまとう若い男が部屋の中にいる。驚きのあまり、私は後ろによろめいてしまう。壁に手をつこうとして、手が壁に吸いこまれた。

「え……」

一瞬の暗転、そしてバランスを取り戻したころには、私は別の部屋にいた。その部屋も知っている。私の部屋の隣の、段ボール箱がやけに多いサチの部屋だ。

「一体どうなってんの？」

「いやに騒がしい女だな」

同じ声が聞こえ、私は無意識に振り返った。若い男の上半身が壁から生えていた。

「うわー！」

あまりにありえない光景に、思わずしりもちをついた。それと同じタイミングで、自分の足が段ボール箱を貫通していることに私は気づいた。

「え、な、なに……これ……？」

「ちっとは考えろ。霊体だからすり抜けるだろ」

「へ？ 霊体？」

「ん？ そーかてめえ、自分の状況分かってねーだろ」

男の腰、膝、足が順番に出てきた。男は浮いたままサチのベッドの上まで行き、音もなくそこに着地する。それからベッドに座り腕と足を組み、あごを上げて横柄な態度で自己紹介と始めた。

「俺の名はコード。お前らで言うところの、天使だ」

意味が分からなかった。私の理解が追いつかないまま、自称天使の男は私を指さして、
「お前が死んだか、ここに来た」

とだけ一言。そしてまた腕を組み直す。

「……は？」

全然私の理解が追いつかない。それを見てか、コードという男はため息をつくと立ち上がり、私に近づいてきた。そして私の腕を強く掴んだ。

「ちょっ、なに！」

「ついてこい。証拠を見せてやる」

そう言ってコードは壁に向かって走り出した。壁にぶつかると思い、反射的に目をつぶる。しかし壁にぶつかった様子も、止まった様子も一向にない。目を開けてみると、そこには赤い空が広がっていた。

「な、なにこれ！ 飛んでる！」

飛ぶ、と言うにはちょっと低いが、私たちはおよそ住宅の二階に当たる高さに浮いていた。その高さを車と同じくらいの速さで移動している。後ろを振り返ると、私たちの住まいのマンションがある。どうやらそこから移動したらしい。

「夢……だよな？」

右を見ると、小学生ぐらいの子供たちがゲームで遊んでいる。左を見ると、私と同年らしい子が一生懸命勉強している。下には、井戸端会議中のおばさんたちや、犬と散歩するおじいさん。夢と言うには、あまりにも細かすぎる。

「本当にそう思ってるなら、あれを見な」

止まった私たちの下には、人が四人いた。一人はうつ伏せで倒れている少女。そしてそれに声をかけるもの、ケータイに話しかけるもの、ただそれを見るものがいた。

コードに連れられて地面に着地したら、四人の内一人がだれなのか分かった。

「……サチ」

サチは座りこんで、うつ伏せの少女を黙って眺めている。なにも喋らず、肩を震わせながら。

「一体なにを見て……」

少女が仰向けにされ、その顔が見えた。私の顔そのものだった。もともと大体の予想はできていた。そもそもここはあの場所だ。でも実際にそれを見ると、言葉が出てこなかった。

「お前はここである男に刺されたんだ。あの女の代わりにな」

コードが指さした先にはサチがいた。サチの肌には血の気がなく、目からは光が失われている。

「……ごめん……ごめん」

「サチ、どうしたの？」

返事は、ない。

「サ、サチ……聞いているの？」

サチの肩を叩こうとして、私の手はサチの体をすり抜けた。

「ダメだ。もう心臓も動いてない」

「……あ、警察ですか？ 人が死んでます、早く来て下さい！」

だれからにとっても、私は死んでいるようだ。

「ゆうき姉……ごめん……」

それはサチも例外でなく、

「コード……戻ろう」

「は？ 面倒なんだけど」

「いいから！」

「お、おう……」

私はその場を去らずにいらなかった。

3

「なんでコードは、私の前に現れたの？」

日付が変わり、朝が来た。窓がない私の部屋では朝日を拝めないが、マンションだから仕方ない。

部屋に戻った私は、一晩中ベッドの上で頭と心の整理をしていた。私が乗ってもベッドは沈まず、自分が死んでいることを物語っているようだ。

「やっと聞いてくれたか」

壁に寄りかかっていたコードは、頭をかきながらもう一方の手で私を指さした。

「お前、なんかを伝えたいやついるか？」

「……いるけど」

それが無理なのは分かっている。サチには私の声が届かず、ほかの人も私に気づかなかったのは、昨日体験したばかりだ。

「そいつと話ができんだよ」

「……は？」

コードが言ってることの意味が分からない。上半身を起こしてコードの顔を見ると、彼は自慢するような顔をしていた。

「もちろん、普通は無理だぜ。だが、俺の力で例外的に話をさせてやれるんだ」

「……例外的に？」

まだ納得できないが、納得するしかないのだろう。でも、だれかと話せるのはいい。言い残したことはたくさんある。

「コード！ 早速お願いしていい」

「まー待て」

飛ぶ鳥を落とす勢いだった私を、コードは右手で制する。そして人さし指以外を握ると、メトロノームのように横に振る。

「詐欺と言われる前に行っとくが、これには条件があるんだ」

そして左手も人さし指だけを伸ばすと、両手の人さし指を私に見せつけた。

「一人に一分、これは絶対だ」

「……少なすぎない？」

「しょうがねーだろ。そういうルールなんだから」

「なんのための？」

コードは「答えられないと」言ったが、私はしつこく尋ね続けた。それに観念してか、悪態つきながらも答えてくれた。

「俺らの存在を、お前ら人間に知られちゃいかねーんだよ」

「なにその壮大な言い訳」

「あ、もう一つ」

コードはまた私に人さし指を見せつけた。

「死んだ後のことを話すのも禁止な」

「知られないためね」

「そうだ。もし言ったら、お前の来世は犬だ」

「……なにそれ」

私がドヤ顔のコードにそう言うと、コードは苦い物を食べたような顔を一瞬浮かべた。それから一回咳して話題を逸らす。

「あと一つ」

「多すぎて覚えられないんだけど」

「簡単なことだ。だれかに話すなら一週間にしろってことだ」

死んでも期限があるのか。そう思うと、苦笑いしたくなる。

「さて、これで言うべきことは全部だ。他に質問あつか？ ないよな？ よし、ない」

壁に寄りかかるコードを見ながら、私はだれに伝えるか考えた。お父さん、お母さん、サチ……。

「いや、一個」

コードが舌打ちをした気がするが、あえて気にしない。それよりもこの質問のほうが私にとって重要だ。

「前に死んだ人と話したことがある人って、二度目はダメってことあるの？」

するとコードは驚いた顔をしてこっちを見た。それから目を閉じて、こめかみを指で数回たたく。

「意外に頭いいんだな、お前。……いや、前に霊体と話したこと、思い出したのか」

私は頷いた。

「場合によるな。前に話したのが昨日ってならまず無理だ。一年経てば……あれ、十年か？ 子供なら超短いような……。面倒だ。気になるやつがいるなら調べてやる」

コードはまた目を閉じて、こめかみをつつく。

「サチ。私の……」

「妹だな。……たしかに前歴あるな」

不安が私の心臓を大きく震わす。拳が強く握られるのが、自分でも分かった。私が固唾を飲むと同時に、コードがこっちに視線を向けた。

「ま、子供んときで、八年も前じゃ平気だな」

安堵の息が出た。体から力が抜けて、私は床に座り込む。

「そう。ありがと」

「どうも。他には？」

「平気」

私が首を横に振ると、コードは頭をかきながらため息を吐き、私に言ってくる。

「とりあえずさっき言ったこと守ればあとは自由だ。だれになに言おうがな。ま、一度きりだから気をつけろよ」

私は黙って首を縦に振った。

「さて、じゃあだれに言うんだ」

「まだ決まってないよ」

悪態をつくコードを尻目に、私は「なにを」伝えるか考え始めた。「だれに」言うかは決まっている。サチだ。

なぜならサチは、私も含めて、すでに三人も家族を失っているのだから。

4

八年前のある日、私の家にサチがやってきた。

事情を考えれば仕方のないことだが、あのときのサチは引っ込み思案で、おまけにいつも暗い顔をしていた。

『あたしはゆうき、君は？』

『一緒に遊ぼうよ？』

『ポテチ食べる？』

私がなにを聞いても、サチは口を開かなかった。本当は両親を失ったせいで答えられる精神状態でなかったのだが、当時の私は無視されていると思っていた。

その次の日、私がサチの部屋をのぞいてみると、サチは写真を見ていた。

『なに見てるの？』

私は興味本位でサチに聞いてみた。サチは案の定答えず、それどころか写真を隠してしまった。

『……いいじゃん、隠さなくたって！』

その反応に私は少しキレて、無理にでも見ようと手を伸ばした。その手はサチに払われ、サチは写真を持ってどっかに逃げてしまった。

そのとき私は追いかけることができなかった。追いかけたら負けだと思って、立ち尽くすしか

なかった。

そのときだった。

——ゆうきちちゃん。

声が聞こえた。突然のことに驚いて辺りを見回した。でも、サチの部屋には私以外いなかった。
——いきなりごめんね、ゆうきちちゃん。

『え……なに？』

——さっきの今で悪いんだけど、

知らない男性の声。今思えば、あれはサチのお父さんだ。

——サチと仲良くしてもらえるかな？

『……ムリ。だってあの子、私のことを無視するんだもん』

そのとき理由を言ったのは、色々と我慢の限界だったからだろう。だれかに文句を言いたかったのだ。でもサチのお父さんは黙って聞いてくれた。

——多分、サチは怖がっていると思うんだ。

『怖がってる？』

——うん。サチは一人になっちゃったから、知ってる人がいなくて、寂しがっているはずなんだ。そして一人ってことに、とても怖がっていると思う。

『一人に？』

その口調は「多分」や「と思う」といった曖昧なものではなく、むしろ確信しているようだった。

——だからサチと一緒にいてほしい。いいかな？

『……でも』

どうせ無視されちゃうよ、私はそう思っていた。でもサチのお父さんが私に要求したことは、思っていたのと違っていた。

——別になにかしろってわけじゃない。本当にただいだけでいいんだ。そばにいて、サチの声を聞いてほしい。

『それだけでいいの？』

——うん。

それを最後に、声は聞こえなくなった。あまりの不思議体験に、しばらくは気が抜けたようになっていた。そしてとりあえず、サチを探し始めた。

『ママ……いかないでよ……』

サチはマンションの踊り場に、うずくまって泣いていた。その姿を見て、私は気がついた。サチのお父さんの言うことがやっと分かった。

『なに見てるの？』

私が声をかけると、サチは怯えた顔を見せまた逃げ出そうとした。でもなにを思ったのか、逃げずにいてくれた。

『さっきはごめんね。もう写真を取ろうとしないから』

そう言って私はサチの横に座った。サチは縮こまって私から離れたが、私はそれを気にしなかった。

しばらく黙ったまま写真を隠していたサチだが、最後には震える手で写真を見せてくれた。写真にはサチと、サチの両親と思われる男女が映っていた。おそらく川辺でバーベキューしている写真だろう。

『お父さんとお母さん？』

『うん』

サチは悲しそうに頷くだけだった。

『この人がお母さんで、こっちがお父さん？』

『うん』

『なんの写真なの？』

『バーベキューの……』

そのときサチは微笑んでいた。それからサチは、そのときのことを楽しそうに話っていた。楽しい日々の思い出が頭の中に浮んだのだろう。聞いているこっちも、楽しい気分になってきた。

『サチさー、笑ったほうがかわいって』

話が終わったところで、私はサチにそう言ってみた。一瞬驚いた顔を見せたサチだが、すぐに暗い顔になってうずくまってしまった。

『そんな暗い顔しないの。辛いときはあたしに言ってね。だって私たち、家族じゃん』

『家族……？』

『そう、家族』

それを聞いて、サチは泣き出した。私はくっついて、サチの頭をずっと撫でていた。泣き終わるまで、ずっとしていた。

『ゆうきちちゃん』

『どうしたの？』

『ずっと……わたしと一緒にいてくれる？』

『なに言ってるの。あたりまえじゃん。なんだって』

この一言で、私たちは姉妹になった。

『あたしはサチのお姉ちゃんだよ』

5

私が死んでから三日目。今日の昼頃から私の葬式が行われるらしい。当の私は場所を知らないのだが。

両親が葬式会場へ出かける直前、警察の人がやってきた。私を殺した犯人が見つかったそうだが。もっとも麻薬中毒で死んでしまい、逮捕にはならなかったそうだが。

「行ってくるね、サチ」

「ちゃんと寝てるんだぞ」

「……いつてらっしゃい」

具合が悪いということで、サチは家に残った。ベッドに横になったまま動かずにいる。散らかっている部屋の中で、私はずっとそんなサチを見ていた。

「なあ、まだ決まんねーのか？」

どんなことを言うかは決まっている。サチの中にある罪悪感を拭い去って、勝手にいなくなったことを謝りたい。

「うん……でも、どうしょ」

でもそれを、一分にまとめることができない。私はどうしようか悩んでは、ため息をついているだけ。私もサチも動かないあいだに、時計の針は何度も巡る。

「なに言えばいいん……」

それを見て、私の思考が止まった。ゴキブリだ。

「ぎゃー！ 来るな来るな！ あっち行け！」

「うわっ！ なんだいきなり」

サチの部屋が汚いのが災いしたのだろう。私は必死にもがいた。私の願いが叶ったのか、ゴキブリはあっちに行った。サチのベッドの下に。

「……きやあー！」

ベッド下から現れたゴキブリに驚いてか、サチはベッドから転げ落ちた。そのときケータイをはじめ、机の上にあったものがまきぞえをくろう。ケータイが地面に落ちた衝撃で開いた。

「……あ」

ケータイに映っていたのは、私とサチのツーショット写真だ。沖縄旅行のときの写真で、お互い手首にハイビスカスのコサージュをつけている。二人とも笑顔でピースしている。

「……そうか」

実物でないとはいえ、二日ぶりに見たサチの笑顔。それを見て、私の頬は自然とゆるんだ。それと同時にサチには、そうあってほしいと思った。

「コーナ、決まったよ。サチになに言うか」

「え？ そ、そう。それじゃあ早速いいかい？」

「うん」

私が頷き、またサチの方に目を向ける。どうやらゴキブリとの戦いは終わったようで、散らかっているものの真ん中で立っている。なぜか肩を震わせながら。

「サチ？ どうしたの？」

「……誰？ 誰なの？」

震えた声でサチは眩き、焦ったようにあたりを見回す。私も一通り部屋を見回すが、サチ以外誰もいない。

「ちっ、マジかよ」

「コーナ、なにが起こったのさ？」

「……さき越された」

「それってどういう……」

『前に死んだ人と話したことがある人って、二度目はダメってことあるの？』

『場合によるな。前に話したのが昨日ってならまず無理だ』

つまり、だれかが私より先にサチに言葉を贈ったのだ。でも一体だれが……。

「……違う」

「な、なにが……」

「違う！」

震える両手で耳をふさぎながら、サチは勢いよく叫んだ。まるで自分の罪悪感をすべて吐き出すかのように。

「あなたが、あなたが殺したんだ！ あなたが、ゆうき姉を！」

彼女自身にしか聞こえない声に抗っている、サチ以外の全てが止まった。サチの言葉が、私にそう感じさせる。

「コード！ どういうこと！ どうして私を差し置いて、私を殺した奴がサチと話してるのさ！」

「仕方ねーだろ！ だれと話すかはあの男の自由だ！」

「だからって……」

サチの方を見ると、サチは声に怯えうずくまっていた。

「違う……私の、せいじゃ、ない」

彼女の声は、静寂に溶けそうな弱々しかった。そのままサチはなにも喋らずにいる。そんな黙ったままのサチが、なぜか私は怖く感じた。

「ゆうき姉、ちょっと待っててね」

心臓が止まった気がした。静かに起き上がるサチの姿が、なにか危険なことを考えてる気がしたから。

「待って、サチ！」

サチに手を伸ばした私の手はサチに届くも、払われることなくすり抜けた。サチはクローゼットへと足を進める。

「……お願いコード。サチと、話をさせてよ」

「無理だ。ルールはルールだからな」

「じゃあ、サチをほっとけっていうの！」

私が声を荒げている間に、サチはベルトで輪っかを作っていた。それをドアノブにひっかけている。なにを考えているか私には分かった。

「……今、いくね」

「止めてサチ！ そんなことしちゃダメ！」

私の言葉を見ても、サチはドアの前に座り輪っかに首を引っかけた。サチの体重が、自身の首を絞める。サチの表情がやわらいでいき、動かなくなった。

「サチ？ 起きてよサチ」

私がどんなに声をかけても、サチは反応を示さない。どんなに体を揺らそうとしても、彼女の体は動かない。

「やだよ……サチまで死んじゃったら……」

「無理だ。お前はもう、こいつになにもしてられない」

コードの言うことはよく分かっている。もう三日も体験していることだから。

私にできるのは、死に行くサチを見ていることだけだ。

「サチを、助けてよ……だれか、だれか——」

その瞬間、世界静かになった。コードがなにか言っている気がするが、耳に入ってこなかった。そう思わせるほど、ある考えが私の頭を支配している。

あったのだ。サチを助ける方法が。とても簡単で、だれでもそうするであろう方法が。

「コード、ついてきて」

迷いはなかった。

サチを救うためだから。

それが唯一の方法だから。

コーナの返事を待たず、私はまっすぐ向かった。文字通り壁や床を無視して、まっすぐに。

6

八年前、私はいじめにあっていた。理由は分からない。でも突然、クラスの女の子全員から無視され始めたのだ。

『ゆうき。新しく家族になるサチちゃんよ。仲良くしなさい』

無視され始めてから二週間後、サチと出会った。無視されることに敏感になっていた私は、サチを傷つけかけて、

『あたしはサチのお姉ちゃんだよ』

サチと仲良くなった。それから毎日私たちは、毎日一緒に遊んだ。私は学校が終わるとすぐ帰ってくるようになった。サチと遊ぶのは楽しかった。

『ゆうき姉、いいの？ 私とぼっか遊んで』

『いいのいいの。サチと遊ぶほうが楽しいから』

たまにサチに聞かれては、いつもそう返してた。嘘はついてなかった。本当かどうかは、別として。

しばらくして、サチも学校に行くようになった。もちろん同じ学校だ。朝は一緒に行った。

『サチ、サチのほうが学校早く終わるから、先帰っててね。あたしたち三年生は遅くなるから』

でも放課後は一緒に帰らなかった。いじめられている事実を知られたくなかったから。

やがていじめはヒートアップして行って、私も我慢ができなり、学校を休んだ。家族にも先生にも相談できずにいた私の、残された手だった。

『ゆうき姉、大丈夫？』

『大丈夫……ごめんね。あたし風邪ひいちゃったから、一緒に学校行けなくて』

サチには悪いと思いながらも、学校には行く気になれなかった。それが毎日続いて、土日も合わせ一週間も休んだ。両親はもちろん、サチも大変心配していた。でも、本当のことをいうのは、私のプライドが許さなかった。

そんなある日のことだ。寝ている私のところにサチが心配そうな顔でやってきた。

『ゆうき姉、これなんだけど』

サチの手には、私がサチから借りていたホチキスがあった。ずっと学校に置き忘れたままだった。マジックで「バーカ」とか「きえろ」とか書いてある。

『サ、サチ……ごめんね。これはふざけて……』

『もしかしていじめられてるの？』

見透かされた気がして、サチの目を見ることができなくなった。言葉を絞り出そうとしても、なかなか出てこない。

『ねえ、お母さんに言ったほうが……』

『言わないでよ！』

私が大声を上げたからか、サチはかなり驚いていた。*

『でも、これって絶対いじめだよ』

『サチには関係ないじゃん！』

『関係なくないよ！』

今度はサチが叫んで、私が驚いた。サチの睨むような目を初めて見たからだ。だがすぐにいつもの優しい目に戻った。

『困ったことがあったら私に言ってね。今日はずっと一緒にいるから。だって私たち、姉妹でしょ』

目からなにかが出そうになった。それを押しとどめるのが、とてもツラかった。

『……ただの風邪だって』

『看病するから』

『……うつっちゃうよ』

『いいよ。風邪はうつしたほうが早く治るって言うし』

『多分、辛いよ？』

『ゆうき姉だけがツライほうが、私はもっとツライよ』

我慢ができなくて、私はとうとう泣いてしまった。泣きながら、自分がどんなにツラかったかサチに話した。サチは私の頭をなでながら、静かに聞いてくれた。

まるであの日の私のように。

7

目が覚めると、お父さんとお母さんの泣き顔が見えた。と思う。私はサチでないのだから。

「大丈夫か、サチ」

「よかった」

「お父さん？ お母さん？ ……ここは？」

サチは戸惑ったように両親の顔を、そして部屋中を見た。まだ状況を理解してないようだ。

そこは白で囲まれた病室。あのあとサチはすぐに見つかり病院に送られた。早期発見が幸いして後遺症もないらしい。私も安心したことは言うまでもない。

「よかった、無事で」

「なあ、ホントによかったのか？」

私の隣で、コードが戸惑ったように尋ねてくる。

「うん、サチも生きてることだし」

「だがよ……普通じゃないぜ。つーかあの人だれ？」

つまりこういうことだ。私はサチを助けてもらうため、管理人さんと話すことにしたのだ。私の家の鍵を持って、しかもすぐにサチを助けられたのは、管理人さんだけだったから。

「『黙って妹を助けろ！』だっけか？ あれは傑作だわ」

「仕方ないじゃん。慌ててたんだよ」

「いや、ホントすごかったわ」

コーナが何度も蒸し返してくるから、今になって恥ずかしくなってきた。仕方ないから話題を変えよう。

「そういえばさ、私っていつ成仏するのさ？」

「あー、忘れてたわ。普通は話してすぐなんだが……」

毎度のように頭をかきながら考えるコード。しばらくしてから鼻で笑い、質問に答える。

「いや、お前の好きなタイミングで。おもしろいもん見せてもらったから」

「……そう。ありがとう」

私はサチたちの方を見た。サチは無理に体を起こそうとしている。お父さんがそれを止めて、サチはおとなしく横になった。

「今の話、ホント？」

「信じられない話だが、管理人さんはそう言っている」

「不思議なこともあるものね」

「そう……そうなんだ」

その話のあとお父さんとお母さんは、サチも死んだら自分たちがどんなに悲しいか、涙ながらに語っていた。それを聞いているサチは、ひたすらに「ごめん」と謝っている。

「なんで私、あそこになんだろ」

「そりゃー死んじゃったからだろ」

「で、成仏していなくなるんでしょ？ そのあとそうなるの？」

「魂が受け継がれるんだよ、次の命にな」

「……なんかロマンチックだね」

コードはなにも言わなかった。

しばらくして看護師が病室にやってきた。面会時間が終わっただけらしい。お父さんとお母さんが帰り、看護師もいなくなって、病室はサチ一人になった。

最初は一人になにかを呟いていたサチだが、やがてぐっすり眠ってしまった。最近無理をしていたせいか、気持ちよさそうに寝息を立てている。

「サチ」

ふと、サチになにか言いたくなり、サチのすぐそばにやってきた。たとえ伝わらなくても、言わずにはいられない。

「サチはこれからも……」

サチの顔を覗いて、そこまで言って、

言葉にするのを止めた。

「コード、そろそろ」

「いいのか？ まだなんか途中っぽいが」

「うん、言う必要がなくなったから」

「……分かった」

次の瞬間、私の体が足元から光になって散っていった。その光はタンポポの綿毛のように宙を舞う。

「ねえコード」

なぜか一つの疑問が私の頭をよぎった。それはコードに聞いても意味ないことなのに、聞かすにはいられなかった。

「サチはもう、大丈夫かな？」

「さっき見ただろ」

「でも……」

「だったら、もう一度見てこい」

私は首を横に振った。ちょっとした不安を振り払うように。

「……あれ？」

次の瞬間、私のなにかが無くなった。なにかが無くなったのかは分からない。でもなにかが無くなったんだ。

「え……？ なに……これ……？」

その感覚は何度も私を襲う。私の中の不安が、どんどん大きくなって、『ゆうきちゃんの魂を、次の命に受け継がせることさ』

恐怖になった。どうして気付かなかったのか。新しい命に受け継がれるということは、いままでの自分を一度消し去るということに。

いや、気づいてはいた。考えないようにしていただけで。

「いや」

忘れたくなかった。

「いやだ」

失いたくない。

「いやだ！」

サチとの思い出を――

『ゆうき姉』

サチの声が聞こえた。サチが私の目の前にいた。

『ダメだよ。そんな悲しそうな顔しちゃ』

微笑みを向けながら、サチはゆっくりと私に近づいてくる。驚きのあまり言葉が出てこない。私はされるがままに、サチに抱きしめられた。

『笑ってなきゃ』

サチの声が、サチの笑顔が、私の不安を、私の恐怖を、消し去ってくれる。気づいたら、私もサ

チを抱きしめている。

「そう……だね」

そうだ。サチと出会ってから、楽しいときも悲しいときも、ずっと一緒にいたんだ。サチがいたから、サチがいるから、
私はもう大丈夫だ。

サチ、ありがとう――

「ママー」

ママが作ったおいしいおやつを食べながら、あたしがしゃべっていたから、
「ゆきね。飲みこんでから話なさい」
て、ママから注意されちゃった。あたしはおやつを飲みこんでからママに聞きたいことを聞いてみた。

「どうして私の名前って『ゆきね』なの？」

「いきなりどうしたの？」

「学校の宿題」

ママは「そう」とだけ言うと、天井を見上げた。

「ママはねー、お姉ちゃんがいたの。あなたの名前は、お姉ちゃんの名前からとったの」
ずっと天井を見たまま、ママは笑っていた。いつもの笑顔とは少し違うけど、あたしはこの笑顔も大好きだ。

「前ね、ママが笑顔を忘れちゃったとき、あお姉ちゃんに思い出させてもらったんだ。……今でも笑っているかしら」

「笑っているよ」

気付いたらそう言っていた。でも、自分が変なことを言っているとは思わなかった。あたしは何度でもこの言葉をふつうに言えると思うし、今もとびっきりの笑顔で言っていたと思う。

ママは少しおどろいてた。けどすぐに笑顔に、いつものような優しい笑顔になって、言った。
「そうだよね……。ありがとう、ゆきね」

おわり

Sin

昆布中毒

並び立つビルの谷間を一つの人影が駆け抜けた。『人影』いや、その影を人影と呼ぶのは正確ではない。そこにいたのは人間を模倣して作られたロボットアンドロイドである。

「ロディ、この奥よ」

そのアンドロイドに対して無線連絡が入った。ただし、無線機は彼の体内に内蔵されているので、端末を手にとって連絡を受けることはしない。

「りょーかい」

気の抜けた返事とは裏腹にアンドロイドは歩行速度を上げた。

ビルに挟まれた裏道を抜けると、大通りに出た。彼の目の前にある通りは普段ではひっきりなしに車が行き交う場所であるが、今は車は一台もないし、人間もアンドロイドも見当たらない。夜道を昼のように照らす街灯と、道の両脇で星の無い夜空を支えるビルの群れだけが彼の視界に飛び込んできた。

「ちと、早すぎたかな」

「もうすぐ来るわ」

「レディの到着を待つんだったら何時間でもいいが、野郎どもを待つってのは数秒でも苦痛だな」

通信越しでふざけたやり取りをしていると、けたたましいエンジン音を鳴らした車が彼に近づいてきた。

「ようやく到着か、待たせやがって」

彼の視界に、闇を弾くような純白のボディを輝かせた車が法定速度を大幅に超過したスピードで走ってくるのが見えた。まだ米粒ほどの大きさにしか見えないが、彼の眼は車内に四体の男性型アンドロイドが乗っているのを捉えた。

「まったく、むさ苦しそうな車内だ」

そう呟くと、彼は車道の真ん中に躍り出て、そのまま車の方向へと駆け出した。一瞬のうちに車との距離は縮まり、正面からぶつかろうとする瞬間、彼は跳躍し、車のボンネットに飛び乗った。車に乗り合わせた四人のアンドロイド達は一瞬の出来事に啞然として、フロントガラスをふさぐ影を見つめていた。

車内で固まるアンドロイド達に向かって、ボンネットに仁王立ちする彼は両手に一つずつハンドガンを持って銃口を向け、こう宣言した。

「違法アンドロイド取締部隊のロディだ。銀行強盗、交通法違反およびその他諸々の容疑でお前たちを『処分』する」

言い終わると、ロディは両手のハンドガンの引き金を容赦なく引いた。銃口から青白いレーザー光線が放たれ、運転席と助手席そして助手席の後ろに座る三体のアンドロイドのボディが貫かれる。

「おっと、一体だけ残ったか」

ロディは運転席の後ろに残る一体に銃口を向け直した。

しかし、運転手の手を離れ、コントロールを失った車は大きく蛇行し、ボンネットの上のロディはバランスを崩してしまった。

「くそっ、ちょっとハンドル借りるぜ」

そう言うと、ロディは右の拳でフロントガラスを殴り粉碎した。その穴から両腕を突っ込み外側からハンドルを思いっきり右へ切る。自動車が街灯に激突し、止まった。ロディはそのはずみでボンネットから放り出される形になったが、態勢を崩さず難なく着地した。一方、車内に残った残り一体のアンドロイドは転がり落ちるように車から降り、よろけながら路地裏へと逃げ込んだ。

「ターゲット全四体のうち三体が『機能停止』残りの一体はB隊の方へ向かった」

ロディは無線で他の部隊に連絡を取ってから、後を追った。

ロディが犯人に追いついた頃には、取締部隊のアンドロイド達が犯人を追いつめていた。しかし、犯人を取り押さえるには至らず、膠着状態が続いていた。原因は犯人に取り押さえられて銃を突き付けられている一人の少女である。

「お前ら動くな！ コイツがどうなってもいいのか！」

犯人は少女と銃を見せつけ大声でわめいている。取締部隊は銃口を犯人に向けているが、少女を盾に使われて引き金を引くことができない。

「おいおい、人払いは完璧に済ましたはずじゃなかったのか？」

集団の後方で待機しているアンドロイドにロディが問いかけた。

「それが、どこかから紛れ込んだようで……」

困惑している隊員にロディはさらに訊ねる。

「あの子は……人間か？」

「はい……そのためこちらは一切手が出せない状況に……」

「分かった、じゃあ俺に任せとけ」

そう言ってロディは隊員たちをかき分けるように前へと進み出た。

「ろ、ロディさん、一体何を？」

隊員が引き留めるが、構わずとうとう最前列まで歩み出た。当然、犯人も警戒を示し、一層やかましい声でわめき散らした。少しずつ後ずさりしている速度も心なしか早くなっている。

「おい、てめえ！ 動くなつてのが聞こえねえのか、クソ野郎！」

しかし、ロディはそんな罵声には耳も貸さず、流れ作業をするような冷淡な顔つきでハンドガンを取り出し、銃口を犯人に向けた。

「ロディさん、無理です！ 人間を盾にされては……」

「おい、分かんねえのか、こいつは人間なんだぞ！ そんなもの向けたって……」

犯人と取締部隊両方から静止がかかるが、気にも留めず犯人側にこう言った。

「お前の失敗は自分よりガタイの小さい人間を人質にしたことだ」

言い終わると何一つためらうことなく引き金を三度引いた。銃口から放たれる三本の光線は、

『盾』からはみ出してる犯人の両足と額を撃ち抜き、人質の少女を傷つけることはなかった。犯人はそのまま活動を停止し、少女は犯人の手から解放された。すると一気に身動きできなかつた隊員たちが犯人の活動停止の確認と少女の保護のために駆け寄った。

「流石ですロディさん、でもなんであの状況で撃てるんですか？」

先ほどロディを引き留めた隊員が確認を終えて、ロディに尊敬と疑問をまぜこぜにした表情で尋ねてきた。このような質問をされた時、ロディは決まってこう返すようにしている。

「そりゃあ、『当たるわけ無い』って思ってたから撃ててたのさ」

アンドロイド。それは人間に限りなく近い存在でありながら、人間ではないもの。人間を型どつた機械の体をもつ

者。科学が大いに進歩したこの時代、人類は己によく似た操り人形を創ることに成功した。彼らアンドロイドは人間のような複雑な思考にも耐えうる高度な電子頭脳を持ち、人間の社会の中で人間と共に生き、時には人間以上の働きを見せることもあつた。しかし、人間とアンドロイドの関係が対等というわけではない。アンドロイドの思考プログラムにはいくつもの制限が加えられている。いずれも全て、人間がアンドロイドを支配するためのものである。その最たるものが『いかなる場合も人間を攻撃できない』という制限である。この制限は例えわずかでも人間を傷つける可能性がある時にも適用され、強制的に行動が停止させられる。そのため先ほどの隊員達は、誤射の可能性のせいで人間を盾にした強盗犯を撃つことができなかつたのである。

しかし、人間を取り押さえて盾にし、危害を加えた強盗犯のようにこの制限に逆らうアンドロイドもいる。この制限にも抜け穴は存在する。『sin』と呼ばれるプログラムが出回つて以来、アンドロイドによる犯罪行為が増加したのだ。この『sin』というプログラムはアンドロイドに課されているあらゆる制限を解除することができるものである。当然、違法プログラムであるため徹底的に取り締まれたが、アンドロイドを悪用したい人間、人間に逆らいたいアンドロイド、様々な思惑に憑りつき、今も裏社会の市場を流通している。『sin』の登場により激増したアンドロイド犯罪に対応すべく活躍の場を広げたのが『違法アンドロイド取締部隊』である。もともとはプログラムのバグによって暴走したアンドロイドを鎮圧するための組織であつてが、今では

『sin』を使用したアンドロイドの取締がメインの活動となつた。ロディは非常に高いスペックを生かして数々の成果を挙げる部隊筆頭のアンドロイドである。

本部に帰還したロディはまずオペレーションルームに立ち寄つた。人一人が活動できる程度の広さの部屋に一つ椅子があり、その椅子に座つたまま手が届く範囲にキーボードやパネルが設置されており、正面には壁一面を使った大型モニターが様々な情報を表示している。そのモニターの前でせわしなくキーボードを操作している女性型アンドロイドに話しかけた。

「ようサリア、お疲れ様」

「あら、お帰りなさい、今回もまた無茶したみたいじゃない」

サリアと呼ばれたアンドロイドは先ほどロディに無線で連絡を取っていた声の主である。彼女は普段ここで情報の収集、整理や、現場のアンドロイド達へ指令の伝達などを受け持っている。

「まだ何か調べることがあるのか？」

「現場で大暴れすればいいアンタたちとは違って、こっちはこまごまとした作業がたくさんあるのよ」

フレンドリーに接しようと努めるロディに対してサリアは皮肉を交え冷たくあしらう。

「アンタが助けた女の子のことよ。あの子身元が全然わからないの」

「身元が分からない？ どこのどいつかわからないってことかい」

「ええ、まず住民票で彼女と一致するデータがない。町の監視カメラから行動範囲を特定しようにも、一切彼女の姿が写ってない。まるで今日初めて外にでたとでも言いたいのかしら」

「そりゃあとんでもない箱入り娘だな」

「まあ、気を失っている彼女が目覚めればすべて本人から聞き出せばいいことだし、それよりもここ最近多発している銀行強盗の件はもっと調べる必要があるわね。同一グループと考えるべきだろうし、奴らの根城を突き止めないと……」

話しながらもサリアは一瞬たりとも振り向きもせずモニターをにらみ続ける。

「それはそれは、ご苦労様なこった」

「少なくとも、少女の件についてはアンタが犯人を一人取り逃さなければこんなに苦労はしなかったんだけどね」

「それはとても耳が痛いお言葉だ」

そう言い残してロディは部屋か出て、自室へ戻った。

翌朝、ロディは目覚めると本部建物内がやたらと騒がしいことに気づいた。すぐに自室を出て、オペレーションルームにいるサリアにわけを訪ねた。

「いい話と悪い話の二つがあるわ」

サリアはそう切り出した。

「まず悪い話から話すわね」

「おい、こういう時は、どっちから聞きたいかって聞くもんじゃないのか」

「今はそんなことしてる余裕はないわ。」

彼女は昨日のようにモニターを睨んだまんま説明しだした。

「昨日、人質にされた女の子をここで保護してたのだけれど、今朝になって部屋をのぞいたらぬけの殻だったわ。部屋を出た形跡もないし建物内の監視カメラにも全く姿が写ってないわ」

「子供一人のためにこれほどの大騒ぎか。いつからここは託児所になったんだ？」

ロディは呆れたように言う。

「で、俺はその迷子捜索に参加すればいいのか？」

「いいえ、もっとアンタ向きの仕事があるわ。いい話の方よ。件の銀行強盗団のアジトが特定できたわ」

「なるほど、今から突入して根城を丸ごと制圧して来いつてか」

「そういうこと、子守よりよっぽど得意でしょ」

「全くだ」

ロディは笑った。静かに。

大通りから抜けて路地裏に面した、用途も所有者も不明な小汚いビル。その中にロディはいた。周りにはわずか十分の間に彼によって活動停止に追い込まれた違法アンドロイド達の屍がゴロゴロと転がっていた。

「まさか、昨日強盗犯を確保したすぐ近くにアジトがあったなんてな。アイツらももう少しで到着ってところで捕まったってわけか。ツイてないな」

ロディは床にうずくまる亡骸たちを見下ろしながらそう呟いた。

「残すは地下フロアか」

本棚の奥にあった隠し扉を見つめた。アジトに潜むアンドロイドに銃口を突き付けて無理やり聞き出したものである。古典的などは思ったがいまどきの方がかえって見つかりにくのかともロディは思った。

重厚な鉄製の扉だが、ロディはそれをものともせず蹴破った。現れた地下へと続く階段を小走りで駆け降りる。階段を下り終わると再び扉が現れた。その奥からは物音が聞こえる。誰かがまだ残っている。そう判断したロディは先ほどと同じように扉を一気に破り、部屋の中に向けてハンドガンを構えこう叫んだ。

「動くな！」

その声に反応して振り向く影が一つあった。白髪頭の白衣をきた男だ。その男の姿を捉えた瞬間、ロディは体の異常を感じた。引き金にかけた人差し指が凍ったように動かないのだ。

「……お前、人間か？」

「ああそうだ」

しわがれた男の声を聞いて、ロディは危機感を抱いた。人間確保の部隊の到着まであと十五分ある。それまでロディはその男に無抵抗な姿を晒すことになる。

「お前が、『sin』を配布して強盗を主導したのか？」

「ああそうだ」

何を訊いても男の返す返答は無感情なものだった。

「何が目的だ？」

「金だ」

「いったい何のための金だ？」

ロディがそう問うと、男はその場所から右へと退いた。代わってロディの眼に飛び込んできたのは人間が一人入れそうな大きさのカプセルであった。いや、実際に中に人間が一人入っている。それを見てロディは驚愕した。中にいるのは昨日人質にされた少女なのである。

「これは……どういうことだ？」

「これは『オリジナル』だ。もう一つ下のフロアには生産ラインが用意されている」

「オリジナル？ 生産ライン？ どういうことだ？」

未だに状況が呑み込めないロディは矢継ぎ早に質問を繰り返す。それに引き換え男は悠長に説明を続ける。

「すべてのきっかけはこれだった」

そう言って男は手元の机から一枚の灰色の紙束を持ち上げた。新聞紙だ。今となっては電子データでの配布が主流になってしまいめっきり見なくなった品である。

「私は毎朝六時に起きる。一分も遅れることなくな。そしたらすぐに新聞を開いて三十分のうちに読み切って、六時三十分ちょうどに朝食の準備を始める。それが私が何十年も続けてきた朝の習慣だ」

ロディは未だに話が見えない。しかし男は自分のペースで話を続ける。

「だがある日いつものように新聞を読み終わって朝食の準備を始めようとして時計を見ると針は六時四十分を指していた。確かに六時に起きたはずなのに……四十分かかった。読むのに四十分かかった。そんな馬鹿なと思った。何かの間違いだと思った。しかしそれ以降新聞を三十分で読み切ることはできなくなった。そう、『できなくなった』。それどころは今となっては一時間かかる始末だ。……老眼だな。私は恐ろしく思った。老いというのは人間のささやかな習慣にまで見境なく干渉してくる。新聞のことなど氷山の一角に過ぎないのではないか。今までに『できなくなった』ことに気づいてない事柄が山のようにあるのではないか。今日できていたことが、明日目が覚めるとできなくなってしまうのではないか。そんな恐怖が私の頭を離れなくなった。そして私はこう思った。私の娘にはこんな思いをしてほしくない、と」

『私の娘』その言葉を聞いたときロディは恐ろしい考えが浮かんだ。その考えが外れであることを願い、ロディは訊いた。

「……ってことは、そのカプセルの中にいるのはお前の娘か？」

「ああ、その通りだ」

ロディの期待はあっさり裏切られた。彼の想像通りだった。返す言葉が見つからないロディに対し男はこう述べた。

「私はね、人間は一日が終わるたびに『死ぬ』べきだと思う。毎日死ねばそれ以上老いることはないからね。私の娘には毎日死ぬように生きてもらいたい。だから作ったんだ、毎日死ぬる方法を」

「毎日死ぬる方法だと？」

「毎日死ぬということは、毎日生き返ることだ。具体的な方法はこうだ。一日一体のペースでその人間のクローンを作る。そのクローンは一日が終わると生命活動を停止するように調整する。それが死んだ頃に新しいクローンが作られる。死んだクローンは体内に仕込んだナノマシンによって完全に分解され跡形もなくなる。口で説明するのは簡単だが、どれもなかなか金のかかる研究だった。一体だけ外へ逃げ出してしまったのは失敗だったな」

ロディはようやくすべて合点がいった。突然、少女が姿を消した理由も分かった。しかし、事件の全貌が明らかになるにつれて怒りと恐怖が増していった。

「ここがばれてしまっちはもう私の計画はこれまでだろう。しかしこのまま老いつづける娘の体をこのままにしておくのだけは我慢ならない」

そう言う男は懐から拳銃を取り出し少女に向けた。思わずロディは咄嗟に叫ぶ。

「やめろ！」

「アンドロイドの分際で何を言う。老いの苦しみを知らぬ者の分際で何を言う。止めたいのなら止めてみる。できるものならな」

男の言葉に対してロディは怒りに体を震わせる以外に何もできなかった。先ほどから男に向けているハンドガンも制限プログラムのせいで引き金に指をかけたまま一ミリたりとも動かない。ならばと思い男の拳銃を撃ち落そうと照準を向け直すが、それもあえなく阻止されてしまう。何のことはない、ただ男がもう片方の手で弾道を遮ったのである。

「くそっ」

ロディは自分の無力さに歯噛みした。自分の願望のために娘の命を弄ぶ科学者への感情は行き場を失い、彼の中で渦を巻いた。

「私は娘のために膨大な時間と金と愛を費やした。だから娘の命くらいは好きに使わせてもらってもいいだろう」

男はロディを説き伏せるかのように言った。しかしこのような詭弁はロディの耳には届かない。ロディは獣のように唸る。凍り付いた人差し指を動かそうと必死に力を込める。

「もう終わりだ」

そう言って男が拳銃の引き金を引こうとした瞬間だった。突如、青白いレーザー光線が男の両手首を貫いた。

「ぐああああ」

男は激痛のあまりその場にうずくまった。拳銃は弾丸を発射することなく彼の手から滑り落ちた。男はロディの方を見る。今のレーザーは間違いなくロディが放ったものだ。ロディも自分自身のことながらこの状況に驚きを隠せないでいる。

「何故だ！ なぜアンドロイドが人間を――」

男は床を這いずってロディから離れながら喚いた。

「いいや違うね。お前は――」

ロディはこう答える。この答えしか彼は持ち合わせていない。

「お前は『人でなし』だ」

あとがき

- ・編集長さんめ切破ってごめんなさい。
- ・作中のsinは正弦のことではありません
- ・昆布おいしい

安寧とルーコウス (Tuvos Luika)

安寧とルーコウス

Tuvos Luika

彼女を抱いて眠る
窓の向こうに闇がある
凍てつく空に
銀色の星がある
その青白い寂しさを
私はひとかけらも知らないのだ

彼女を抱いて眠る
ふたり動くことをやめて
魚が冷たい水の中
ゆったりと一日を終えるように
その身を切るような不安を
私はひとかけらも知らないのだ

彼女を抱いて眠る
互いの温もりを絡めあう
静まりかえって寒々とした地上に
なけなしの反抗を図る
この心まで包まれる安らぎを
私はまだ知り尽くせないでいるのだ。

どうも、トゥボス・ルイーカと申します。

ルーコウス(原語表記:Rukous)とはフィンランド語で「祈り」を意味します。エイノ・レイノによる同タイトルの詩を読んでいただくことを私はここでお勧めいたします。

友達（Puney Loran Seapon）

友達

Puney Loran Seapon

私の名前は、^{すどう きょういちろう}須藤 響 一郎。

こんな男みみたいな名前ですが、私は女です。本当は『^{きょう か}響香』という名前になるはずが、こんな名前になってしまいました。私が生まれて、両親はよほど興奮したみたい。男の子が生まれたら『響一郎』って名前にする予定だったせいか、出生届けに、名前を間違って記入してしまったそうです。なので、親は私の事を『響香』って呼びます。

でも、この男みみたいな名前のせいで、小さい頃、よくからかわれたりもしました。なので、私は極力、人にこの名前を知られないよう、目立たないように生きてきたつもりです。これで、嫌な思いをしない。私は、そう思っていました。

しかし、思わぬ落とし穴が、私を待っていました。

地元の中学校に入学してすぐのことだと思います。どんどん周りの子達が、いわゆる『グループ』と呼ばれるものを作っていく中で、私だけが『グループ』を作ることができず、クラスで孤立していることに、私は気がつきました。目立たないように生きてきたので、どうやらコミュニケーションを取るのが下手になってしまったようです。

孤立がいじめへと発展するのに、そう時間はかかりませんでした。

最初は無視されることから始まり、無視は陰口へ。そしてそれは、靴や教科書を隠されることへと変わっていったのです。急速に、突然に、まるで揚げたての天ぷらが、すぐにしなってしまうように。孤立していた私は、いじめのいいスケープゴートだったのでしょう。

中学校の三年間を、私はいじめられて過ごしました。暴力を振るわれることこそなかったものの、自分の名前をネタに陰口を叩かれることは、ダンスの角に小指をぶつけるのと同じくらい辛いことでした。こうならないよう、今まで努力してきたのに、結果として、自分のやってきたことは、全て無駄なことだったのです。

成績は悪い方ではありませんでしたが、いじめが辛いのもあって、この学校の誰も行かないような偏差値の低い高校に、私は進学しました。とにかく、逃げたかったのです。いじめから、そして自分の名前を知られてしまったことから。

でも、何も変わりませんでした。入学初日、クラスでの自己紹介で、ある男子生徒が吹き出したのがきっかけで、クラスメート全員が大爆笑。入学しばらくは『いじり』だったように思いますが、徐々に自分がクラスで孤立していくのが分かりました。それがいじめへと発展していくことも容易に想像が付き、そしてそれが現実となったことに、私は愕然としたのです。無視され、陰口を叩かれることはもちろんのこと、中学校の頃のいじめではなかった、暴力や恐喝も加わり、拳銃の果てには強姦もされて、私は学校に行くことに恐怖を覚えるようになったのです。男子生徒のほとんどがタバコを隠れて吸っていたので、男子に絡まれたときは、私の腕や足にタバコを押し付けられることもあり、男子が怖くなりました。

親も先生も、いじめられているのは、自分のコミュニケーション能力に問題があるからだと言
い張って味方になってくれないので、私は不登校になることさえ許されず、地獄の半年間を過
したのではないかと思います。

夏休みが明けて、新学期が始まる頃。私は自分の体に残る、いくつかの醜いアザやタバコの痕、
目の下にくっきり残るクマを見て、そしておそらくはあるであろう十円ハゲを想像し、黒く、悲
しい感情に支配されました。そして私はいよいよ、学校に行くことと、自分の人生を、今日で最
後にしようと思ったのです。

そんな、ある日のことです。

夏が終わったとはいえ、まだ残暑が厳しい九月。私の学校は私服で登校することが許されている
ので、生徒のほとんどは半袖で登校してきます。醜いアザやタバコの痕を見られたくないので、
私は長袖で登校しました。お昼休み、汗で腕にべったり張り付く袖が鬱陶しく、暑さで頭も朦朧
とする中、私はハンカチが廊下に落ちているのを見つけました。おそらく今、目の前を歩いてい
る女子生徒が落としたのでしょう。とても可愛い花柄のハンカチでした。

人と関わりたくないのに、普段なら放っておくのですが、今はなぜか、そのハンカチを拾いま
した。そして、周りにたくさんの生徒がいる中、光に引き寄せられる虫のごとく、私はその女子
生徒に話しかけたのです。

「あっ……あのっ……このハンカチ、おっ……落としました？」

緊張しているのか、スラスラと文章が出てきませんでした。話しかけたことは彼女に伝わっ
たようです。彼女は、こちらを振り向きました。隣のクラスの子です。

「……」

彼女は私を見て、固まりました。私の目を、じっと見つめています。こんな反応は初めてです
。てっきり無視されるか、舌打ちされるか、今差し出しているハンカチをひったくられるかのど
れかだと思いましたが。

「あっ……こっ……これっ！」

周りでクスクスと笑い声が漏れる中、私は手に持ったハンカチを彼女に突き出しました。多分
、意図が相手に伝わっていなかったのだろうと思ったのですが、どうやらそうでもなさそうです
。相変わらず彼女は、私の目をじっと見つめていました。私も釣られて彼女の目をじっと見つめ
、まるで時間が止まってしまったかのようなようでした

「……ありがとう」

彼女はそう呟いて、なぜか逃げるように走り去りました。

そして放課後。

誰かに目を付けられる前に、さっさと帰ろうと生徒玄関を出た時です。午前放課の日だった
ので、^{さんさん} 燦々と照る太陽の眩しい中、

「あのう、すみません」

誰かが私に話しかけてきました。声が聞こえた方に目をやると、そこには、お昼休みにハンカ
チを落とした子が立っていました。お昼休みの時は気づきませんでした。よく見れば、なかな
か可愛らしい子です。少し天パった黒髪に、とろんとしているけど大きめの猫目。背は私と大差

はなく、ファッションも上品です。まさに清純派美人と言ったところでしょうか。

「ハンカチ、わざわざありがとうございます」

彼女は私に近づいてきて、頭を下げました。その瞬間、ふと、オトメユリの甘く濃厚な香りがしました。まさか、お礼を言うために、わざわざ……？

「あっ……いやっ……別に……」

突然の出来事に、私はつかえながら、そう返しました。今までの経験から、これは何かあるぞと、私の勘がそう言っています。

「本当にありがとうございます。これ、すごく大切なものなんです」

……どうやら、本当にお礼を言いに来ただけのようです。嬉しそうに、頬を朱に染め、顔を輝かせてそんなことを言う彼女からは、何の悪意も感じませんでした。

「私、^{あませきょうか}天瀬響花って言います」

「きょう……か？」

「はい。『響く花』って書いて、響花って読みます。……あの、どうかしましたか？」

偶然、自分が付けられるはずだった名前と同じ読みの名前を聞いて、それ以上声が出なくなっていた私を、響花は不思議そうに見つめました。

「あっ……いや、何にも……」

ようやく出た声は、少し掠れていました。

「あの、よろしければ、お名前を教えてくださいませんか？」

響花にそう聞かれて、私は返答につまりました。教えたくないという気持ちもありましたが、響花になら教えても不快な思いはしないような気がします。

「須藤響一郎……っていいます」

意を決して、私は自分の名前を名乗りました。よく考えれば、私は今日で、自分の人生を終わらせる予定だったのです。不快な思いをしたところで、どうってことはない。私は、そう思いました。

「響一郎……？」

響花は、首を傾けました。おそらく、聞き間違えたのだと、彼女は思ったのでしょうか。できればスルーして欲しかったのですが、笑われたりしないだけ、まだマシな方です。

「……本当は、字は『響く』『香り』って書くけど、読みはあなたと同じ響香って名前になるはずだったんだけど……」

暑さのせいなのか、人生がもうすぐ終わるせいなのか、頭がおかしくなっていたようです。私はふと、そんなことを呟きました。こんな話、中学生になった頃から誰にも話さなかったのに……。

私の呟きが聞こえなかったのか、彼女は何の反応も返しません。ただ、黙って首を傾げ、不思議そうにしていました。

「……それじゃあ」

私はそう言って、帰路につこうとした時です。

「あの、帰り道、そっちなんですか？ 私もそっちなので、もしよかったら、一緒に帰りませ

んか？」

響花が不意に、そんなことを言いました。本当はさっさと帰りたかったのですが、何分、こんなことを言われた経験は中学生になった頃からほとんど無く、断るための言い訳もすぐには思いつかなかった私は、つい首を縦に振ってしまいました。

一緒に帰ろうと言っておきながら、帰り道、響花は何かと理由をつけて、私をいろいろなところへ連れ回しました。喫茶店やブティック、雑貨屋さんやアニメショップ。他にも色々なお店へ連れて行かれた気がします。でも、不思議と嫌な気はしませんでした。生まれて初めて、親以外の人とショッピングを楽しんだ気がします。響花は私のことを無理に詮索せず、それが私にとって、すごく心地よく思えました。もしかすると響花は、私が今日で自分の人生を終わらせるつもりであることに気づいていたのかもしれない。

「今日はありがとう、天瀬さん」

家につく頃には、日が落ちかけていて、空が朱に染まってとても綺麗でした。自分の人生を終わらせる予定でしたが、今はもうどうでもいのように思えます。響花は、首を横に振りました。

「響花って呼んで。私の方こそ、わがままに付き合ってくれてありがとう。すごく楽しかった。私たち、気が合うのかな？」

そう言って笑う響花が、私にはただただ眩しかった気がします。

「じゃあね。また明日。『響香』ちゃん！」

一瞬、私は聞き間違えたかと思いましたが、自分の耳が正常であることに気がついたときにはもう、響花ちゃんの姿は見えなくなっていました。もしかすると、中学校以来初めて、私に友達ができたのかもしれない。友達がいなかった私には、友情を確信できませんでしたが、とても暖かな気持ちになったのです。

次の日から、私は響花ちゃんと、授業の時以外はいつも一緒にいるようになりました。響花は決して、私のことを本名でよばずに『響香』って呼んでくれて、響花と私は不思議と話が合い、一緒にいるだけで、晴れやかで楽しい気分になったのです

「あれ、響花ちゃん、もしかしてシャンプー変えた？」

ある日、昨日まではオトメユリの香りだったのが、ライラックの甘い香りに変わっていることに気づき、私はそう聞きました。

「あっ、気づいてくれた？ 最近、シャンプー作るのにはまっているんだ。これは、ライラックの花で作ったの」

「シャンプーって、作れるんだ！ 知らなかった」

「へへへ、今度、教えてあげよっか？」

「本当？ じゃあ今度教えて……って、うわっ！ もうこんな時間。次の数学の授業遅れちゃう！ 急がないと！」

「えー、もっと話そうよ。響香ちゃんの次の授業って、確かセクハラしてくる先生が担当でしょ？ 私、次の授業の担当の先生苦手だから、一緒にサボらない？」

憂鬱そうに響花ちゃんがそう言いましたが、私は首を横に振りました。

「だ一め！ 授業をサボるわけにはいかないって！ 確かにあの先生、ちょっと女子にセクハラするって噂だけど、私はまだ一度もされたことないし、多分大丈夫だよ。……それじゃ、また次の休み時間に！」

まだ何か言いたそうな響花ちゃんでしたが、そんな響花ちゃんを残して、私は教室に戻りました。

結局、それからその日はずっと、響花ちゃんは沈んだように暗い表情で、私は申し訳ない気分でいっぱいになったのです。

次の日、響花ちゃんのシャンプーは、ライラックの香りからラケナリアの香りに変わっていました。

そんな日もありましたが、それはそれで、後から思えばいい思い出になったのではないかと思います。響花ちゃんと過ごした日々は、私の人生に潤いと喜びをもたらしてくれました。

ですが、重要なことを、私は忘れていました。響花ちゃんと友達になったからといって、私に対するいじめがなくなった訳ではなかったのです。

確かに響花ちゃんと一緒に過ごすようになってからは私へのいじめはかなり減りました。今までみたいに、一人でいることがあまりなかったからでしょう。少なくとも、恐喝や強姦はなくなったと思います。でも、完全になくなっていた訳ではなかったのです。

ある日のことです。放課後いつものように、響花ちゃんとおしゃべりしながら生徒玄関まで来た時のことです。私が自分の下駄箱を覗くと、自分の靴がないことに気がつきました。

「あれっ……？ 響香ちゃん、靴どうしたの……？」

「……多分、どっかに隠されたんだと思う」

「えっ……？」

その時、私は響花ちゃんの顔を見ることはできませんでしたが、声の様子から、響花ちゃんがひどく悲しそうな表情をしていることは想像できました。あまり心配をかけたくなかったので、私は響花ちゃんに、自分がいじめられていることについては何も話していませんでした。

「響花ちゃん、実は……」

意を決して、私は自分がいじめられていることを、響花ちゃんに話すことにしました。

「……どうして、話してくれなかったの？」

全部話した時、怒ったような、それでいてショックを受けたような、そんな顔で響花ちゃんは呟きました。

「私、響香ちゃん以外の人とはあまり話したことないけど……。そういえば、いろんな人が響香ちゃんの悪口言ってた……。そっか、そうだったんだ……」

他にも何か呟きながら、響花ちゃんの目には涙が溢れていました。

「ごめん……響香ちゃんが苦しんでいること、気づいてあげられなくて……」

そう言って響花ちゃんは私を抱きしめてきて、私は何も言えず、ただその場に突っ立っていることしかできませんでした。でも、その言葉を聞いた時、暗くなっていた私の心が、少し晴れやかになったように感じたのです。

結局、靴はゴミ箱の中から見つかり、無事私と響花ちゃんは帰路につくことができました。その途中、

「そういえば、靴を隠した人に心当たりはあるの？」

響花ちゃんが、不意にそんなことを聞いてきました。私が思いつく人物を挙げると、響花ちゃんは、

「……そう」

と言って、そのまま響花ちゃんは話題をかえました。

それからこの日は、私へのいじめについては何も触れぬまま、別れたのでした。

この時、私は気づくべきだったのかもしれませんが。いや、この時でなくとも、次の日から、響花ちゃんのシャンプーの香りが、香りアザミのパイナップルのような香りに変わっていた時に気づくべきでした。響花ちゃんの様子が、少しおかしかったことに。

「……っ！」

あれから数日後、朝のホームルームで、私は絶句していました。クラスメート数人が、両腕両足を骨折し入院したと、担任の先生が言ったのです。不良の多い学校なので、怪我して入院するくらい、あまり珍しくないことですが、入院したクラスメートというのが、以前響花ちゃんに話した『心当たりのある人物』で挙げた人たちだったのです。

とはいえ、響花ちゃんは折角できた私の友達。それに、響花ちゃんが不良相手に怪我をさせるなんて考えられません。どうしても響花ちゃんを疑いたくなかった私は、ただの偶然で済ますことにしたのです。

それからしばらくは、特に何事も無く月日は流れ、私はこの事を綺麗さっぱり忘れてしまったのでした。

「ねえ、響香ちゃん。今日、暇？ 暇だよな？ 遊びに行かない？」

とある休日の朝、響花ちゃんからこんな電話がかかってきました。

「五時までなら大丈夫だよ」

「あれっ？ 何かあるの？ いつもはもっと遅くまで一緒にいてくれるのに……」

「うん。今日、お母さんの誕生日なんだ。準備しないと。あと、誕生日プレゼント買いたいから、付き合ってくれる？」

「えっ……？」

最後に響花のそんな声が聞こえましたが、それがなんなのか気になった時にはもう、私は電話を切っていました。

「あれっ？ 響花ちゃん。それって前使ってた、ラケナリアのシャンプー？」

いつもの待ち合わせの場所に行くと、既に響花ちゃんが待っていた。近づいたときの香りが、いつもと違っていた事に気がついた私がそう聞くと、響花ちゃんは黙って頷きました。少し悲しそうな顔で、いつもより元気がありません。

「響花ちゃん、プリクラ行かないっ？」

少し心配になった私は、いつもよりテンションを上げて、響花ちゃんの手を引っ張り、ゲームセンターへと向かったのです。でも結局、響花ちゃんはこの日、元気のないままだったのです。

目を疑う光景が、写っています。おびただしい熱気が、私の頬を撫でていきます。自分の家が、燃えていました。

時は、あの休日から数日たった日のことです。学校で私のクラスの数学の先生が、セクハラで懲戒免職になり、私と響花でその話題で盛り上がりながら帰路についていました。すると自分の家のあたりで、真紅の炎が揺れて、何やら騒がしく、嫌な予感がした私は、響花を置いて一人で炎の方へと走ったのです。

後は、前述の通りでした。

私は周りの声が何も聞こえず、今家にいる母の安否など何も考えられず、気がついた時にはもう、真紅に燃える家に入ろうと走りました。誰かが私を抑えよう掴んできましたが、私はそれを払い除け、ただひたすらに、前に進もうとしたのです。ついには、誰かが、見たことのある花柄のハンカチを私の口元に押し付けてきました。すると、私の視界は、次第に黒く……黒……く……くろ……く……。

気がつくとき、そこはどこかのホテルの一室でした。どうやら、私は長いこと眠っていたようです。私はしばらくの間混乱し、状況が理解できず、おそらくはユニットバスルームと思われるところから響花ちゃんが出てきたところで、ようやく少し落ち着きました。

「響……花ちゃん、ここ……どこ？」

煙にでもやられたのでしょうか？ 声が掠れて、うまく出ません。目もおかしくなったようです。響花ちゃんの、いつもはとろんとしている目が、なぜかうつろになっているように見えました。消えるはずのないハイライトもありません。この部屋のぼんやりとした照明のせいでしょうか。響花ちゃんの右手が、キラキラと光って見えます。

「『ラウ・ミラージュ』っていうホテル」

「『ラウ・ミラージュ』……？」

再び、混乱してきました。『ラウ・ミラージュ』は、ブティックホテルのことです。女性二人で、しかも高校生が泊まっている場所ではありません。

「響香ちゃん」

響花ちゃんが、ベッドで寝ている私に近づいてきました。

「死んで、私のものになって……」

響花ちゃんは私に覆い被さり、耳元でそんな事を囁きます。濡れた髪が、私には色っぽく見えました。

「……えっ？」

何を言われたのか、私はよく分かりませんでした。掛け布団越しに伝わる響花ちゃんの鼓動が

、非常に激しくなっています。

「響香ちゃんは、何時になっても私だけを見てくれない……」

「そんなこと……」

「セクハラなんかする数学の先生や、お母さんのこと、見てたじゃない」

ぼーっとする頭で反論しようとした私に、響花ちゃんは被せるようにそう言いました。

「でも、響香ちゃんは悪くない」

響花ちゃんが、そう呟きます。

「悪いのは、響香ちゃんを惑わす彼らの方……。それとあなたを傷つける人も……。私はあなたに、悲しい思いはさせない……」

私は、響花ちゃんが何を言っているのか、分かりませんでした。これほど誰かに説明してもらいたいと思ったことはありません。

「あなたは私のもの……」

その時、響花ちゃんから、バラのシャンプーの香りと、トリカブトのボディーソープの香りがしました。いえ、トリカブトのボディーソープの香りがしたきがある、というべきです。トリカブトには、香りはありません。ただ、そんな気がしたのです。

「この先、あなたには彼氏ができるかもしれない。大学だって、別々になるかもしれない。そんなこと、耐えられない。考えたくない。あなたと離れたくない……！」

そう呟き終わると同時に、私の首に、何か冷たく鋭い物が当てられました。キラキラ光っていた右手は、私の視界から消えていました。響花ちゃんが、私をベッドに押し付けます。私に痛みはありません。シーツが乱れ、響花ちゃんは、左手で私の頬を撫でました。

恐怖が襲ってくるまでに、しばらく時間がかかりました。ベッドに押し付けられているせいなのか、体が動きません。逃げることはできません。だんだんと呼吸がしづらくなって、息苦しくなり、頭痛がしてきました。

「……やめて！ 響花ちゃん！」

吐き気を催す直前、やっと出た言葉が、私の最後の記憶です。何か暖かい液体が流れたと思ったら、私の視界が再び黒く……黒……く……くろ……く……。

『今日、午前十時頃。都内のブティックホテルで、女子高校生の遺体が発見されました。警察は、殺人事件として捜査を……』

【あとがき】

お久しぶりです。Puney Loran Seaponです。お楽しみ頂けたでしょうか。

今回は一応、ホラーを書いたつもりです。一昨年の製本版案山子に、同じジャンルで作品を登校させていただいたのですが、あまり怖くなかったようなので、今回はそのリベンジマッチ第一弾です。またしてもお化けの類を使わず恐怖を描くことにこだわった結果、こんな感じになりました。ヤンデレって、いいですね。この作品書く時に調べていたら、可愛いと思い始めてしまいました。すいません。妄言なので、忘れてください。それでは、また次回。

彼女たちの日常（如月椎奈）

彼女たちの日常——Their Routines

カーテンの隙間から差し込む朝日が、いつも彼女の眼を醒ます。眉根を寄せ、瞼を震わせながら、彼女は聴^{やが}て、ゆっくりと眼を開く。丁度顔にかかる光線が眩しいのか、しなやかな左手で眼元を覆う。五秒経ってから、右手を支えにして上半身を起こす。肩甲骨まで伸びた長い黒髪がはらりと肩にかかり、ネグリジェの白い肩紐が、右肩だけはだけの。しかし、彼女はそんなことも気には留めず、左手を眼元から口元に移すと、瞬きを三回、そして、欠伸を一回。布団を膝元で折り返し、両手で支えてお尻をずらしながら、右脚、左脚の順に脚を布団から出す。そのまま、陽射しを避けるように^{からだ}軀の向きを変え、白くて長い二本の脚をベッドの下に伸ばす。爪が綺麗に切り揃えられた両足の指先がフローリングの床に触れると、その冷たさに彼女は軀を小さく震わせる。慣れるまで十秒待ってから、そろそろと踵をつける。そして、両手を^{ばね}発条にしてすっと立ち上がる。黒髪がふわりと揺れ、白いネグリジェが小さくはためく。カーテンの隙間からは、まるで彼女の後光のように、眩しい光が漏れている。彼女は一つ溜息を吐くと、その場でぐるりと半回転する。左脚は床につけたまま、右手と右膝をベッドの上につき、左手を伸ばし、人差し指と親指で^{つま}爪むようにして、漸く、カーテンを開く。光が彼女を包む瞬間、彼女は咄嗟に身を戻すが、今度は窓の方を向いたまま、直立の姿勢を取る。細い両腕を真っ直ぐ頭上に掲げ、踵を少し上げるようにして、ぐっと背筋を伸ばす。十秒しっかり数えてから、ふっと力を抜く。朝日に全身浸かりながら、彼女は、「ふふ」と微笑を漏らす。彼女が完全に覚醒した瞬間、これが、午前六時二十分。ここから、彼女の一日が始まる。

彼女は部屋の隅のタンスに歩み寄り、左膝をついて下から二番目の^{ひきだし}抽斗を開ける。中から、黒の下着と肌色のストッキングを取り出すと、静かに立ち上がり、今度は上段の扉を開けて、ハンガに掛かった糊の効いた真っ白なブラウスと、ぴっちりとした黒のパンツスーツを取り出す。それらを手に抱え、彼女は部屋を出る。

彼女はすぐ横の洗濯機に下着を載せ、ブラウスとスーツは壁掛に掛ける。指をそのまま滑らせ、脇にある給湯器のスイッチを入れる。バス・ルームの扉の前に立ち、彼女はその華奢な指でネグリジェの肩紐をそっと外す。すると、^{うすぎぬ}羅は音もなくすると床に滑り落ちる。黒い下着だけになった彼女は、次に両腕を背中に回し、ブラジャーのホックを外す。肩紐を外しながら手を軀の前に戻し、ブラジャーを取ると、小ぶりの白い胸が露わになる。彼女は脱いだそれを横の籠に入れると、今度は両の親指をショーツのゴムに引っ掛け、くるくると丸めるように脱ぎ始める。前屈するように徐々に腰を曲げていくと、黒髪が滝のように零れ落ちる。聴^{くるぶし}て^{くるぶし}踵の辺りまでショーツを下げきると、左脚、右脚の順に抜く。脱いだそれを両手に持ったまま体勢を元に戻し、左手で籠に入れる。床に脱ぎ捨てられたままのネグリジェは、もう一度屈んで拾い上げ、軽く畳んでから、籠の中へ。そうして彼女は、空になった両手を首の後ろに回し、乱れた髪をばさりと払う。そこには、一糸纏わぬ、白い全裸の彼女が居た。

彼女はその場でぐるりとターンし、壁のスイッチを入れて明かりを点けてから、バス・ルームの扉を開け、中に入る。扉を閉めるとすぐに、中からはシャワーの水が流れる音が聞こえて来る。三分ほど流水の音が続いた後、三分ほど音が止み、再び流水の音。また三分後、音が止む。次にシャワーを流すのは、五分後。そして同様に五分経った後、完全に音が止む。聴^{ぼたん}て、バス・ルームの扉が開き、白い湯気を一身に纏いながら、水に濡れた彼女が中から出て来る。しっとりとした黒髪からは、ぽたぽたと雫が滴り落ちる。左手を伸ばし、ハンガからバスタオルを取ると、優しく髪の水気を拭き取り、そして、顔、首、胸、左腕、右腕、お腹、背中、局部、お尻、左脚、右脚……、の順に軀を拭いてゆく。その後、先ほどの順序を^{ぼたん}逆のように、ショーツを履き、ブラジャーをつけると、左腕、右腕の順に腕を通してブラウスを着、^{ぼたん}釦を上から順番にすべて留める。

同様に左脚、右脚の順にストッキングを履いてから、パンツスーツにも脚を通す。給湯器の電源を切ってから、彼女は再びリビングに戻る。

彼女はタンス脇の化粧台の椅子に腰掛ける。抽斗から櫛を取り出し、鏡を見ながら軽く髪を梳かす。それから台上のドライヤーを右手に取り、電源を入れ、風量や温度を左手で確かめると、櫛で梳かしながら、ストレートのロング・ヘアを丁寧に乾かしてゆく。彼女の髪は、窓から差し込む白い光とは対照的に漆黒で滑らかだ。十五分ほど掛けて彼女は髪を乾かし終える。ドライヤーの電源を切って台上に置き、櫛は抽斗の中に仕舞う。彼女の髪はまだ若干湿り気を帯びているが、残りは自然乾燥に任せるのだろう。

そして彼女は艶やかな髪を翻して席を立つと、リビングを出、キッチンに立つ。シンク横に置いてある電気ケトルの蓋を開け、シンクの蛇口を捻って、中に水を二百シーシーほど入れる。蓋を閉め、ケトルを台座に置き、電源を入れる。すると三分くらいでお湯が沸くのだが、その間に彼女は、食器棚のガラス戸を開け、真っ白い陶器のコーヒー・カップとティー・スプーンを取り出す。次に棚の抽斗を引き、インスタント・コーヒーの瓶を取り出すと、蓋を開け、スプーン一杯分の豆を掬い取り、カップの中に入れる。瓶とスプーンを片付けると、丁度ケトルが白い湯気を吐き出し、お湯が沸いたことを報せる。彼女は右手でケトルを傾け、左手のカップにお湯を八分目まで注いでゆく。こぼこぼという音と、立ち昇る湯気と共に、^{かぐわ}香しいコーヒーの匂いが漂ってくる。余ったお湯はシンクに捨て、ケトルを元の場所に戻す。彼女は、カップを鼻に近づけ目を瞑ると、その香を一息吸い込む。そのまま五秒ほど静止した後、再び眼を開けると、彼女はリビングに戻り、部屋の中央のデスクにつく。カップを卓上に置き、彼女は、細い右人差し指でデスクトップPCの電源を入れる。一分ほどして起動すると、まずはメールを確認する。しかし、どうでもいい内容なのか、読んだ後は大抵すぐに削除してしまう。その確認作業も二分以内に終わってしまうと、ウィンドウを消す。その後は文書ファイルを幾つか立ち上げて、文字がびっしりと並んだ画面を、右手のマウスでスクロールしながら眺める。彼女は二分ほど画面を睨んだ後、ウィンドウを消すと、今度はPCの電源も落としてしまう。代わりに卓上のタブレット端末の電源を入れ、電子書籍を読む準備をした後、漸く彼女は左手にカップを持つ。コーヒーからはもうすっかり湯気が消えてしまっているが、彼女は構わず右人差し指でタブレットの画面をフリックする。ページが捲れると同時に、コーヒーを一口。そのときは必ず、眼を閉じて、ゆっくりと、味わうように飲む。液体が形の良い唇に吸い込まれると、彼女の白い喉がほんの僅か上下し、胸が微動し、体内に浸透してゆく。静かにカップを置いたとき、その水面は二、三ミリほどしか下がっていない。臆て十分後、カップに口をつけたとき、コーヒーはカップの底をつく。それが、彼女が読書を止める合図。彼女はカップを置き、顔を上げ、惜しむように溜息を一つ吐き、端末の電源を切る。するとすぐに立ち上がり、カップをシンクに置き、蛇口を捻って中に水を入れる。

彼女はリビングに戻ると、タンスの扉を開け、中からハンガに掛かった真っ黒のジャケットを取り出す。それをブラウスの上に羽織り、左腕を通してから、次に右腕を通す。^{ひときわ}襟元を正し、釦をすべて留めると、彼女のスレンダーなボディ・ラインが一際くっきりと浮かび上がる。彼女は少し屈んで、上から二番目の抽斗を開け、綺麗に折り畳まれた黒いハンカチを取り出す。抽斗を閉めると、彼女は卓上のアナログ腕時計を手に取り、右手首に嵌める。そのまま足元の黒いハンドバッグを取り上げ、中にハンカチとタブレット端末を入れる。他のものは何も入れない。携帯電話を入れることもない。彼女はバッグを一旦椅子の上に置くと、右手でデスクのペン立てから三色ボールペンを抜き取り、ジャケットの胸ポケットに差す。そして、両腕を下げ、眼を瞑り、深呼吸を一つした後、その場でゆるりと一回転する。音もなく長髪が揺れ、黒い部屋の中で、真っ白い光のシャワーを浴びているかのよう。彼女は一回転すると、静止し、眼を開け、窓に歩み寄る。左足の爪先を少しだけ立てるようにしながら、ベッドに右膝と右手をつき、左腕を伸ばし、人差し指と親指で掴んで、真っ黒いカーテンを閉じる。光が絞られ、部屋の中に再び暗闇が訪れる。その中で、彼女だけが静かに生きている。彼女はベッドを離れると、リビングを出、玄関に出る。バッグを床に置き、黒いパンプスの前で屈む。まず、左足を滑り込ませ、次に右足を入れる。人差し指で踵の紐を直し、バッグを左手に持って立ち上がると、ドア・チェーンを外し、ドア・ロックも解除する。右手でドアノブを捻り、ゆっくり前に押すようにして、扉を開く。徐々に開かれるドアの隙間から廊下の蛍光灯の光が差し込み、彼女の影を逆光に伸ばす。左足

のポンプスが廊下の床をかつん、と鳴らし、続いて右足が音を鳴らしたときにはもう、彼女は部屋の外に居て、聴いてドアが外から閉じられると、部屋の中には再び闇が訪れる。静寂の中に彼女が鍵を掛ける音が響き、靴の音が次第に遠ざかってゆく。彼女が部屋を出て大学に向かう時間、それが、午前七時三十分。

彼女はアパートの階段を降りて外に出ると、アスファルトの上をかつかつと歩いてゆく。彼女の歩幅は約六十センチ。アパートの出口を左に曲がり、二十メートルほど進んで、丁字路を右折。そしてすぐに横断歩道を渡る。彼女がそこを通るときはいつも、信号の方が待ってくれる。車の前を悠々と歩いて向かいの歩道に渡った後、百五十メートルほど直進、駅の入口を潜ると、ハンドバッグから黒い財布を取り出し、それを翳して正面の改札を通る。ホームに沿って左側の通路を進み、行き違う人を避けるように階段の左側を通る。階段を昇りきると、右に曲がり、すぐ隣の三番ホームに続く階段を降りる。電車が到着するまでまだ五分ほど時間があるが、彼女はそのまま直進し、先頭車両が到着する場所で止まる。ハンドバッグからタブレット端末を取り出し、人差し指をスライドさせて、朝の読書の続きを始める。聴いて電車が目の前に滑り込むと、彼女はタブレットを一旦バッグに仕舞い、開いたドアを潜って車内に乗り込む。彼女は向かいのドアに凭れるように背を預けると、すぐにタブレットを取り出し読書を再開するのだが、二十分後に大学の最寄り駅に到着するまで、彼女の胸と脛と人差し指以外が微動だにすることはない。彼女は背後のドアが開く直前に、再び端末の電源を落としてバッグに仕舞い、代わりに財布を手にとってから、ホームに降り立つ。正面の改札を通り、財布をバッグに仕舞う。かつかつとヒールを鳴らして駅の外へ出ると、真っ直ぐに延びる道路を五分ほど進み、交差点で横断歩道を渡った後に左折。その後十分、道なりに歩く。すれ違う周囲の学生と違って、彼女だけはずっと独り、一定のペースで歩き続け、それは決して乱れることはなく、心臓の鼓動より少し早い間隔で足音が聞こえる。微風に髪が揺れ、それを右手でかき上げる仕種が一際優雅だ。十分後、彼女は大学の正門に辿り着く。それが八時二十分。一限目がある日も、そうでない日も、平日でも休日でも、晴れの日でも雨の日でも、この時刻が変わることはない。

この後は、講義があるときは当該教室へ行き、そうでないときは図書館に行く。大講義室での講義では、決まって中央・最前列の席に座り、ゼミ形式の場合は教授の隣の席に座る。彼女がノートを取ることはなく、メモ帳やスケジュール帳を使うこともない。手持ちのタブレット端末で板書を撮影する訳でもなく、彼女は常に身軽だ。筆記用具も胸のポケットに差した三色ボールペンだけで、試験のときくらいにしか使うことはない。背筋を伸ばし、姿勢を正して座り、静かに講義に聞き入り、彼女は教授に一番質問をする。右の掌を高く掲げて、「先生」とよく通る声で教授を呼ぶ。そして立ち上がり、実に的を射た質問をする。偶に教授が苦笑いしてしまうほどだ。その場で解決しないときには、講義が終わった後に直接研究室を訪ねることもある。

図書館では三階のPC室に籠り、窓際の最前列の席に座る。必要な資料を運んで来るときと手洗いのとき以外は席を立たないので、休日は大抵、一日中椅子に座りっぱなしだ。PCの画面には幾つかの文書ファイルと、インターネットのブラウザが開かれている。彼女は画面と資料とを交互に睨みながら、時折キーボードを叩く。女性にしてはタイピングが早く、ブラインド・タッチも完璧だ。こうして黙々と作業しているのは、恐らく、レポートか卒論のためだろう。

彼女は正午を過ぎても昼食を食べに出かけたりはしない。研究棟前の自動販売機で温かいブラック・コーヒーを一本買って来て、それを飲むだけだ。飲んだ後は、講義に出るか、図書館に戻るか、の二択だ。夕方になっても夕食を摂ることはせず、図書館の閉館時間までPC室に籠りきりなのだ。聴いて午後十時、閉館の時刻になると、彼女はPCの電源を落とし、ハンドバッグを左手に提げ、帰路に就く。

彼女は、朝と同じ時間を掛け、同じ経路を辿って駅に向かう。一日中椅子に座り通し、画面を睨み続けていたのに、彼女が疲れたようすを見せることはなく、毅然とした姿勢で街灯の下を歩いてゆく。そして、午後十時二十分の電車に乗り、二十分後、自宅アパート近くの駅で降りる。

彼女は改札を抜けると、駅を出た直後にあるコンビニに入り、ミックスサンドを一つ買う。具は玉子と、ツナと、ハムチーズ。バッグから財布を取り出し、支払いは電子マネー。レシートは受け取らず、商品だけを速やかに持ち帰る。ハンドバッグを左手に、レジ袋を右手に提げるその姿は、一日の中で彼女が唯一見せる、俗っぽさかも知れない。コンビニを出た後は、やはり朝と同じ道を歩いてゆく。信号は既に点滅仕様になっているが、彼女の前を通る車は一台もない。彼女は一瞬も歩みを止めることなく、十分後には、アパートの階段を昇り、自室の扉の前に立っている。廳で鍵を開ける音と、ドアを開ける音が聞こえる。ぼたん、と扉が閉められ、ドア・ロックとチェーンが掛けられる音が続いて聞こえて来る。それが、午後十一時丁度。

彼女は自室に戻ると、腕時計を外し、スーツの上下とストッキングも脱いでいる。まるで、ブラウスしか羽織っていないようにも見える。彼女はその姿でキッチンに立ち、朝と同じようにインスタント・コーヒーの瓶とティー・スプーンを出し、カップには既にスプーン一杯分の豆を入れて待っており、ケトルがお湯の用意が出来たことを報せると、カップにお湯を注ぐ。彼女は左手に持ったカップを鼻元に近付け、眼を瞑り、コーヒーの香を胸一杯に吸い込む。五秒後、再び眼を開けると、カップを持ったままリビングに戻る。カップをデスクに置き、椅子に座る。タブレット端末の電源を入れ、読書の準備を整えると、レジ袋の中からサンドイッチを取り出し、包装を開ける。右手でサンドイッチを掴み、左手で端末の画面をフリックする。ページが捲れる度に、サンドイッチを一口。一つにつき、十ページ。きちんと十回噛んでから、喉を上下させて、飲み込む。時折左手で髪をかき上げながら、五分後、なくなったサンドイッチの代わりにカップを取り、コーヒーを一口啜る。同じように、残り二つのサンドイッチも彼女の体内に摂取されてゆく。すべて食べ終えてしまった後は、朝と同じように、ページを捲り、コーヒーを飲む、の繰り返し。十分後、コーヒーを飲み干すと、端末の電源を切り、カップとごみを持って席を立つ。

キッチンで彼女は、ごみを捨てた後、シンクの蛇口を捻り、朝使ったカップと、今飲み終えたカップを軽く水で洗う。次に、横にある食器洗浄機を開け、中にカップを二つとも入れる。そのとき、昨日使った分の二つのカップを取り出し、食器棚の中に仕舞う。洗剤をカップに掛けて、蓋を閉め、電源を入れる。その後、蛇口傍のコップに立て掛けた歯ブラシと歯磨き粉を取る。歯磨き粉をブラシの上に少し載せ、口の中へ。前歯、犬歯、臼歯、奥歯……、と、左側、右側と交互に、優しく磨いてゆく。五分後、唾液をシンクの中に吐き出すと、右手のコップに水を注ぎ、口を漱ぐ。歯ブラシを軽く水で洗い、元の場所に戻す。そしてティッシュで口元を拭くと、手を石鹸で洗う。掌で石鹸を泡立て、掌、甲、指の間、親指、指先、手首……、と丁寧に洗い、すぐ下のタオルで手を拭く。すると彼女は、ブラウスの釦を上から順に外していき、蝶が羽化するように両袖を脱いで再び黒い下着姿になる。脱いだそれを軽く畳み、籠の中に入れると、彼女はキッチンの明かりを消し、リビングに戻る。

彼女はタンス最上段の抽斗を開け、純白の薄いネグリジェを取り出す。それを頭から被るうなじように軀を通し、親指を引っ掛けて両の肩紐の位置を直す。そのまま指を項に当て、しっとりとした長髪を拡げるようにばさりと払う。眼を瞑り、溜息を一つ。五秒後、再び眼を開けると、彼女は窓際のベッドに歩み寄り、膝元で折り返された布団の傍にお尻をついて座る。両手を支えにして両膝を上げ、お尻をずらしながら、左脚、右脚の順に布団の中に滑り込ませてゆく。前屈するように両腕を伸ばし、布団を掴むと、そのまま脱力し

て後ろに倒れ込み、ぼすん、と頭を枕に載せる。左手のリモコンで明かりを消す前に、彼女は一度こちらを見つめてから、左眼を閉じ、ウインクをする。「ふふ」という微笑が漏れ聞こえ、廳て部屋は、静寂と闇に包まれる。そして聞こえて来るのは、彼女の規則正しい息遣いだけ。

こうして彼女の一日が終わる。それが午前零時のこと。

これが、いつも変わる事のない、彼女の日常である。……

対談（高天美月）

対談 [a talk]

高天「もう、本当、厭になっちゃうわ」

如月「えっと、何がです？」

高天「何って、皆誤解してるのよ、ペンネームの意味を」

如月「意味……、ですか？ 『筆名』ですよ」

高天「そういう意味じゃなくて……、たとえば、泉鏡花とか、
はやみねかおるとか」

如月「ああ」

高天「『ペンネームが女っぽいから』っていうだけで作者本人
の性別まで女だと勘違いする人が多すぎるのよ」

如月「でも、それは誰にでもあるんじゃない？」

高天「ええ、確かに、百歩譲ってそこまではいいわ。でも、『小
説に登場する主人公に若い女性が多いから、作者も若い
女性なのでは？』って思う人は、理解出来ないわ」

如月「うーん、でも、それも仕方ないのでは？」

高天「つまり、『自分が体験していないことは書けない』って
いう理屈ね？」

如月「まあ、概ね」

高天「それじゃあ、私は人を殺したことはないし、煙草も吸っ
たことはないわ、もっと言うと、他人の気持ちなんて全
くわからない」

如月「それは、極端すぎだと思えますけど」

高天「ええ、私も思うわ……、でも、本当に困るのは、『作中
人物がこう思ってるから、作者もこう思ってるに違いな
い』って勘違いする人なのよね。これじゃあ迂闊に『戦
争が素晴らしい』なんて言わせられないわ」

如月「なるほど」

高天「作中人物と作者は違うってこと。更に言うなら、作者、
つまりペンネームの持ち主とその人格を所有する人間
も違う、っていうことなの」

如月「え、どういうことですか？」

高天「ペンネームは、その人の中の、別人格の名前なのよ」

如月「別人格、ですか」

高天「そうよ、だから、二人の間で考えが違っていたって当たり前なのよ」

如月「わかりました」

高天「そう、ところで、この……、『対して話す』を見てくれる？」

如月「ああ、あなたの『遺作』ですね？」

高天「ここにはペンネームで対談が載っているわ、他の人も同様に」

如月「はい」

高天「でも、よく考えてみて、さっき私は、『ペンネームは別人格の名前だ』と言ったけれど、それによれば、ここに出て来る四人は架空の人格である、ということになるのよ」

如月「え？ それって……」

高天「言ってみれば、この文章は全部、私たちのペンネームを騙って作られた虚構かもしれない、っていうことよ。だって、ペンネームで書かれているのだから、架空の人格が語ったということでしょう？ しかも、それが文章化されている以上は、普通の小説と変わりがないじゃない？」

如月「いや、それは……」

高天「だから、あの対談は遺作ではないの、だから、今でも小説が書けているのよ、安心して頂戴」

如月「え、ちょっと、待って下さいよ……」

高天「ふふ、私の言うことに嘘はないわ」

高天「さあ、これでこの私たちの会話が、『対談』というタイトルの小説なのか、それとも現実に交わされた『対談』なのか、曖昧になってしまったわ。いったいどちらか、あなたに証明出来るかしら？」

おまけ1&2 (高天美月)

『絶海の孤島、嵐の館、そして響く悲鳴、密室、アリバイ、ダイイング・メッセージ、不可能状況で繰り返される連続殺人事件、次第に容疑者は絞られるが、一向に解決の糸口は掴めない、するとそこに名探偵が颯爽と登場して言うことには』

探偵「私が犯人です」

高天「うん、これはよく出来たミステリイ小説ね」

如月「あの、これ、小説なんですか？」

高天「究極のアンチ・ミステリイと言っても過言ではないわ」

如月「いや、さすがに、過言では？」

”-----”

(要するに、作品の要素をタイトルに詰め込みすぎるのも考えものだ、ということ。別に特定の作品のことを言っている訳ではないが、まあ、どうせなら極端にやってみよう、というだけの話)

『絶海の孤島、嵐の館、そして響く悲鳴、密室、アリバイ、ダイイング・メッセージ、不可能状況で繰り返される連続殺人事件、しかしこの世界に探偵役など存在しない』

——《本文なし》——

高天「うん、これはよく出来たミステリイ小説ね」

如月「あの、これ、小説なんですか？」

高天「究極のアンチ・ミステリイと言っても過言ではないわ」

如月「いや、さすがに同じコメントはちょっと……」

”-----”

(要するに、そんなつまらないことを
わざわざ小説にする必要もない、ということ。
いわば、テレビで殺人事件の報道を見ている人を
小説にするのと同じで、面白味など欠片もあるはずがない)

地に平和を（前編）

外衛眞希

世界的な軍事大国であった王国が、強硬政策によって周辺諸国の反感を買ったのは至極当然の事であった。

そしてそれが、連邦帝国と共和国という二つの地域大国を中心とした連合国の結成と対王国戦争の開戦を招いた。軍事力に頼った統治に限界が来ていた王国は徐々にその戦線を縮小させていき、最終的には無条件降伏した。

だがそれが平和の訪れを意味したわけではない。

終戦から五年 旧王国植民地 自由民主国 某所

彼女はこの数か月で、凄惨な光景に見慣れた筈だった。

ただ、最近は少し下火だったためか、改めて吐き気を覚えた。

村一つ丸々墓場になっていた。もつとも、埋葬すらされていない。臭いは相当きつかった。口の中が苦く、酸っぱく。だがそれさえも意識の外に飛ぶほどの匂いだ。大して意味はないと知っていても鼻を覆いたくなる。着ている戦闘服BDUにあつという間に染み付いてしまいそうだった。

その場で見回しただけでも軽く二、三十体は死体があった。大半が体の何処かしらを欠損している。肌の色は、周りの生きている人間とは全く違う。

ふと足元を見てみると、切断されたらしい子どもの小さな頭右半分が形を留めて転がっていた。切断された後にさらに銃弾を撃ち込んだらしく、周囲には破片が散らばっている。

「どうやら時間をかけて楽しんだようですね。血が生乾きの部分がそこかしこに」

民家から出てきた大隊幕僚が、顔をしかめながら言う。彼の足元には、老人のものだったのか、皺くちやの手首が転がっている。家の中も酷い状態だろうことは訊かなくても分かった。

彼の背の低い上官は、ケブラーヘルメットの奥に見える、まだあどけなさの残る顔を微動だにさせず、静かに言った。

「前進命令が出てからまだ幾らも経ってないのに、これで二つ目か。……食糧は？」

「粗方略奪されています。金品は……まあ申し上げるまでもありません。この家の中は——」

そう言って幕僚は先ほど出てきた民家を親指で指差した。

「——女の死体ばかりで床が埋め尽くされてて、あと、まあ、ええ……」

「……埋めよう。それから、消毒も」

「ハッ」

上官はそれからまた別の民家に入っていった。

今度は子供ばかりが並べられ、殺されていた。一切の輝きを失ったいくつかの目が、上官を見

つめていた。

彼女は静かに十字を切った。

王国降伏後、その支配下にあった植民地は次々と独立した。

しかしその独立は旧来の行政区分に従ったものであり、問題も多々あった。特に、かつては王国によって押さえつけられていた民族間の対立は、独立後に深刻化した。

その対立が顕著な国の一つが自由民主国であり、少数派民族が政権を握っている事、また資源輸出から得られる富の分配の極端な不均衡がその根底にあった。

連邦帝国はこの地に一定の権益を持っており、関心を持ってはいたものの、軍事力の投入まではしなかった。終戦後の軍縮ムードの中では、本国から離れた地に小規模な部隊を送り込むことさえ議会の反感を買いかねなかったからだ。

だが終戦から五年後、多数派民族によるクーデターと、突発的に始まった虐殺の嵐が自由民主国の全土を吹き荒れた。それは正規軍も関与した大規模なもので、最初の三ヶ月で六十万人が死んだ。外国企業の施設にも政権派民兵から攻撃が加えられ、やがて連邦帝国の民間人が拉致殺害されるに至り、連邦帝国中央議会は軍事介入と派遣軍の編成を命じた。

共に王国と戦った共和国は、これを軍国的覇権主義だと非難した。自由民主国は共和国製兵器のヘビーユーザーだった。

数千人規模で派兵した連邦帝国軍は、隣国の協力の下で自由民主国内に地域を確保していった。これに伴って全土での虐殺も一旦は下火になりつつあった。大半を殺すか追い出すかして、南部と北部に両民族が分かれた為でもあったが。

自由民主国政府は連邦帝国を非難していたが、両軍が直接接触する事態は生じておらず、実際にこれを排除する行動なども起こさなかった。少数派民族も同様だった。

統制が既に不可能になっている政権派民兵はまた別だったが。

前日 自由民主国の隣国 首都国際空港

もともと不機嫌だった顔がさらに歪んだ。ふくらはぎの古傷が痛む。すぐに雨が降り出すだろう。

連邦帝国陸軍砲兵中佐にして総参謀部からの派遣参謀である石井里佳は、自由民主国の隣国、その国際空港のタラップに軍靴の音が響かせ、肩から吊るした参謀飾緒を揺らしながら降り立った。

石井は規定を少しだけ越えた長さの綺麗な黒髪を持つ女性将校だった。顔も悪くない。最近ようやく採用された開襟式の略装も、彼女が着ると様になる。

だが彼女は `新世代、と呼ばれる新進気鋭の将校の一人であり、難解な弾道方程式を暗算で解き、砲兵学校を次席で卒業するほどの秀才でもあった。

彼女が不機嫌な理由はいくつかあったが、その最大のものは与えられた任務であった。それは国外派遣軍司令部付派遣参謀として、F事案——すなわち自由民主国において発生している状況についての総参謀部の意図を、さらに言うと、彼女に託されたある作戦の実施を指導することであった。その作戦自体、彼女が中心となって立案された代物だったが、彼女自身はその実施に反対していた。

彼女が乗ってきた輸送機の周囲には、民間の旅客機も多く見られる。しかし少しターミナルから離れれば、多くの軍用機と掩体が見られるはずだった。連邦帝国空軍の部隊が間借りしているからだ。石井はその軍用機のある方向へ一人歩いた。この空港には一度来たことがあった。

「石井中佐殿でありますか」

待ち合わせ場所に着くや否や、旧式のヘルメットを被り、薄汚れた戦闘服に身を包んだ一人の連邦帝国軍大尉が駆けてきて、敬礼した。

「国外派遣軍司令部の山本大尉であります。中佐殿をお迎えに上がりました」

石井が答礼すると、彼は石井を興味深げに見つめた。

「ご活躍は、かねがね伺っております」

「もう何年も前の話だ。大尉」

そう石井は言ったが、胸に付けられた略綬の数々の中には大戦以降に授与されたものも混ざっていた。軍人の仕事は戦争だけではない。

「それにしても、想像していたよりお若いすな。女性将校の中では最年少で中佐に昇進、でしたか？」

「いや、同期に先を越されたよ。彼女はもう墓の中だが」

そう言いながら、石井は不機嫌な顔のまま溜息をついた。まだ階級にそぐわない年齢は、街ではしゃぐ若者達と大差無いといってもいいだろう。だが彼女はあまりその事に触れられなくなかった。若造と言われる事と表裏一体だからだ。

その雰囲気を感じたのか、山本はそそくさと態度を改めた。

「向こうにヘリを用意してあります。そいつで国境を越えて、現地司令部までお送りします」

「また虐殺が始まるのかと、司令部では気を揉んでます」

汎用ヘリのエンジンの轟音の中、山本は石井に話しかけた。インカムを装着していなければ、よほど声を張り上げないと聞こえなかっただろう。石井もそれに応じて口を開く。

「民兵の活動が再開したのか」

「ええ、残念ながら。安全地帯の外は勿論、問題は……」

「安全地帯を守る兵力か。不足しているのは知っている」

「そういえば、作戦初期には中佐殿も参加していらしたとか」

そう。初期の頃はもっと酷かった。石井は何ヶ月か前の事を思い起こした。彼女はその時も参謀としてこの地に居た。

放置され、蠅のたかる死体の山。この世の全ての絶望を掻き集めたような悪臭。人間としての尊厳が獣に食い散らかされ、腐り果てた地。目の前で狂乱状態に陥った兵も見たことがある。す

ぐに取り押さえられ、後送され、精神病棟入りだ。

今はそれよりはマシだ。

「結局のところ、今のままでは安全地帯の防衛にすら不安があります。もし民兵が押し寄せた時、全域の防衛にはこの倍は要るでしょう。しかし中央は兵力増強に及び腰です」

石井は窓から視線を外し、席にもたれながら応える。

「その必要を無くす為に、私は来たんだ。大尉」

そう。これ以上地上兵力が投入されることは無いだろう。

「……期待しております」

不信感と不安感を隠さない声だった。

国外派遣軍司令部は、自由民主国の国土に食い込んだ、安全地帯と称される連邦帝国軍保護地域の中心、東部地方都市の郊外に置かれていた。

土壁による簡易築城設備を用いた広大な星形陣地——殆ど砦のような代物——であり、トーチカや掩体のみならず、大規模な弾薬庫や多数のヘリパッド、砲兵陣地も設置されている。あるいはこここそが、この国で一番安全な場所なのかもしれない。

盛大に土煙を上げて着陸したヘリから降りた石井は、陣地中央部の一番立派な建物へと案内された。

「ようこそ、神に見捨てられた地へ」

派遣軍司令官の少将は司令官室の椅子にもたれ掛りながら、疲労の滲み出た顔で石井を迎えた。どうやら寝てないらしい。

「お疲れのご様子ですね、閣下」

石井はそう感想を漏らした。

「一昨日から、地下の指揮所に籠りきりだった。ようやく仮眠を取ろうと思ったら、貴官が来たのだ」

「それは申し訳ありません。しかし辞令には可及的に速やかに着任せよとありましたので」

司令官は鼻を鳴らしてそれに答えた。相当に不機嫌らしい。

「そもそも、すぐ総参謀部に呼び戻された君が、何故またここに来たのだ」

「それも小官ごときには分かりかねます」

「……まあ、いい。君に案内役として、先程の山本大尉を付ける。詳しいことが知りたかったら彼に聞け。……それから、命令書を持参しているらしいな」

胡散臭そうな目つきで司令官は石井を見つめる。その類の目に慣れきった石井は素振り一つ変えず、持っていた書類鞆から一枚の封筒を取り出した。

「封密命令となっております。開封は総参謀部より許可があり次第、ということになっております」

「了解した。ところで、君は何時までここにいるつもりかな？」

「それも、総参謀部の命令次第であります。……早速ですが、一つお願いがあります」

「何かね」

「部屋を一つ、貸して頂きたいのですが」

「なるほど。昨日変な大荷物が届いたと思ったら、こういうことですか」

腕捲りをした山本は、そう言いながら配線を繋いだ。

石井に与えられた、司令部内の少々手狭な部屋には、大型モニターが数台と各種機器が所狭しと持ち込まれていた。

包装を解きながら、石井が応える。

「まあ、そういうこと。これお願い」

「こいつは衛星回線のケーブルですな。何処と通信する気です」

「言わなくたって分かってるだろう？」

「……総参謀部ですか」

石井はそれには答えず、モニターの電源を入れた。しばらくして幾つかの警告表示が出た後、画面一面に見慣れた地図が浮かび上がった。自由民主国の地図であった。単なる地図ではなく、派遣軍は勿論、自由民主国のあらゆる軍事基地と部隊も表示されていた。

「こいつは……、すごいですな」

山本はそう呻くように呟いた。石井は応えずにモニターに近寄り、一点をじっと見つめた。

「どうなさいましたか？」

「いや。まあ、ね」

「西村支隊ですか」

「……古くからの馴染みでね」

国外派遣軍の主力は、全国各地の部隊から少しずつ引き抜いて編成された、独立混成第百十一旅団と第百十二旅団により構成され、それぞれが支援部隊を追加されて増強大隊規模となった三個支隊を持つ。

そのうち第百十一旅団の第三支隊、指揮官の名前から通称西村支隊と呼ばれるその部隊は、連邦帝国の支配地域の最北端を担当していた。

「民兵の安全地帯への侵入が相次いでいます。今日も朝から第二中隊の担当地域で小競り合いが」

「積極的な武力行使は禁じられている。とにかく今は難民の盾になるしかない」

境界線に程近い町の郊外。テント張りの野戦指揮施設に置かれた支隊本部で、支隊長たる連邦帝国陸軍騎兵少佐の西村奈菜は、不満そうな表情を隠さず報告に応じた。

騎兵という古式ゆかしい兵科名を冠しながら、彼女もまた新世代将校の一人であり、先の大戦では戦車将校として停戦命令が下るその時まで戦闘を継続した。

まだあどけなさの残る顔つきから年齢に察しが付く一方で、戦闘服の胸に付けられたくすんだ記章は、その意味を知る者にとっては余りにも不釣り合いだった。最初期の戦車を象った、機甲殊

勲賞。略綬には星が三つ付けられている。三回受章したということだ。三回授与される人間は滅多に居ない。機甲殊勲賞を授与されるような勇敢な人間は、二回目からは死後追叙が大半だからだ。

だからこそ、兵士たちにとって彼女は、敬愛すべき少佐殿、であった。それ以上ではあるかもしれないが、それ以下では決してなかった。

「歯痒いですな。あの悪魔どもを薙ぎ払えないというのは」

支隊幕僚の伊藤大尉が、書類仕事をしながら話しかけた。街を歩いている学生に軍服を着せたような、戦闘服の似合わない痩せた男だった。

「きっと我々が手をこまねいたまま状況が推移しても、虐殺自体は一旦減少するでしょう。しかしそうなれば北部に逃れた被虐民族と、南部の政府との対立は決定的……内戦は不可避です。そうなれば軍事力で圧倒する政府側が、もっと大きな規模で虐殺を繰り返します」

「だがこれ以上の前進や武力行使は、間違いなく政府軍との交戦を招く。それに共和国だって黙ってはいないだろう。この国はもともと共和国のテリトリーだ」

「どうにも、八方塞がりですな」

伊藤が溜息をつきながら別の書類の山に手を付け始める。そういえば、と西村を見た。

「支隊長殿の同期の方が総参謀部にいるとか聞きましたが」

「ああ。今こちらに来ているらしい」

「総参謀部はこの国の事を忘れたものと思っていました」

「とりあえず、彼女は忘れていなかったようだよ」

西村がそう言うと、伊藤は怪訝そうな顔をした。

「彼女、ですか」

「大尉も見たことがあるかもしれない。作戦初期の頃は派遣軍司令部付きで色々な部隊を回ってたから」

そこまで言われてようやく伊藤は思い当たった名前を出す。

「石井中佐でありますか？」

「そう、彼女。何のために来たかは知らないけど——」

「けど？」

西村はふと不敵な笑みを見せた。何年か前には、彼女はその笑みを戦車の上で浮かべていた。

「きっと、何かが始まる。……そう、例えば首都進撃とか」

「ぞっとしませんね。戦争はもう終わったんですよ？」

その瞬間、伊藤のデスクの電話が鳴った。伊藤が溜息を一つついて電話を取ろうとする。

「噂をすれば、ですな。はい、こちら支隊長室」

二言三言言葉を交わした後、何やら曖昧な表情を浮かべた伊藤は、電話を西村のデスクに回した。

「派遣軍司令部からです」

『久しぶり。まだ生きているみたいね』

電話の向こうから聞こえた石井の声は、記憶のものより少し疲労感が窺えた。沸き起こる懐かしさを抑え、皮肉を返す。

「そちらこそ。狸と狐が化かしあってる総参謀部でよく生き残ってるね」

『なあに、貧乏くじを引かされたよ』

「この国に来たこと？」

『もっと別の事だよ』

電話の向こうからくぐもった笑い声がした。

『……それで、本題なんだけど』

西村も相槌一つ打って続きを待つ。

『もうすぐ前進命令が出る』

「……意外だ」

西村は事も無げにそう言った。何かがあるということは、電話口の相手の動きで分かっていたのだから。

『明日には命令が下る。ちょっとフライングだけど、伝えとく』

「向こうの、政府軍の動きはどうなんだ」

いくつか書類を捲る音がして、それから石井は答えた。

『連中にとっては、反政府勢力が勢力を伸ばしてる北部の方が問題みたい。活発な活動が確認できる政府軍部隊は皆北部に向かっている。こちらには来ないだろうね』

「そうか、分かった。……でも大方、用件はそれだけじゃないんだろう？」

電話の向こうからハッと息をのむ音が伝わった。西村は苦笑する。何年の付き合いだと思ってるんだ。

『当たり前。……これから言う事はあくまでも非公式。いいね？』

「……分かった」

『ちょっとした戦争になるかもしれない』

予想だにせぬ熟語に西村の反応が数瞬遅れた。

戦争。戦争だって？

「どういうこと」

『詳しくは言えない。でも軍中央の参謀が言ってるんだ。重みは、あるでしょ？』

「……心しておくよ」

『幸運を』

「ありがとう」

それで電話は切れた。

石井は受話器を置き、丁度部屋に入った山本に話しかける。

「総参謀部からの命令書は届いたか？」

山本は少し困ったような表情をしながらも首肯する。

「ええ、確かに。ええ……」

「どうした？」

「その件で、総司令官が来てほしいと」

石井はそれを聞いて思わず溜息を漏らしてしまった。大人しく命令通りにすりゃいいんだ、と内心では思っている。

「分かった。すぐ行く」

そう言って石井は立ち上がった。

「不思議なタイミングだな、え？ 中佐」

司令官室の少将は、不愉快げに石井を睨んだ。彼の手には一枚の命令書があった。総参謀部から送られてきた、総参謀長名義の代物。それは彼の部隊に、安全地帯の拡大と、`更なる、安全の確保を命じていた。より積極的な危険排除も認めるとされている。

「総参謀部からの派遣参謀が到着した途端にこれだ。何か意図を感じさせるとは思わんかね？ 命令だけではない。一緒に大量の燃料や物資が輸送されてきている。過剰なくらいにな」

「自分もこのような命令が下ることは存じませんでした」

石井はまるで拒絶するかのように、模範的な姿勢で応じた。

「君はこの、積極的な危険排除というものをどう解釈する？」

そんなに`代理人、からの言質が欲しいのか。

ならば、くれてやる。

「安全地帯への侵入を試みる民兵集団、および安全地帯へ危害を加えることを目的とした対象の排除であろうと考えますが」

「血と酒と薬に酔った無法者が相手だ。戦闘になるぞ」

「積極的という言葉には、そういう意味合いも含んでいるものと考えます」

少将は無然とした表情になった。

前進して安全地帯を拡大、難民を保護せよ。

翌日、その今までの方針を百八十度覆すような突然の命令に大半の部隊は慌てた。唯一つ西村支隊だけは即日行動を開始し、そして死体の国を躍進した。

その状況が変わったのは、正午を過ぎた頃だった。

死体が、ドーザーによって浅く広く掘られた穴に次々と運び込まれていく。石灰を撒いた後に土が被される。粗末だが、とりあえずはこうしておく。放置していたら伝染病だって発生しかねない。

西村はその様子をじっと見つめていた。三か月前にこの国に入った時、彼女はこの光景を何度も目にした。いつ終わるとも知れぬ埋葬の日々。死体のあまりの多さに、全滅した村ごと焼夷弾で焼き払おうと提案した参謀がいたというのも無理はない。さすがに許可は下りなかったが。

いい加減鼻も麻痺した頃、伊藤が走って西村を呼びに来た。

「どうした」

慌てた様子の伊藤に、西村は不穏な気配を感じた。

「分派した小隊が、この先の村落に自由民主軍の部隊を確認しました。歩兵一個小隊規模、装甲車一台を含むとのこと。……虐殺の兆候はまだ確認していません」

一瞬目を見開いた西村は思考を巡らせる。自由民主軍は虐殺に加担している、というよりも加害者そのものだ。民兵と一緒に行動していることもある。

急がねば。或いは急いでも間に合わないかもしれないが。

「私が行く。主力は第一中隊長に任せる。へり……は、呼び寄せるだけで時間がかかるな。大尉、野戦機動車を用意してくれ」

「もう待たせてあります」

「じゃあ全速力で飛ばしてくれ」

「荒野を突っ切るようになります。揺れますよ？」

「戦車の運転はもっと荒い」

先行していた一個小隊に追いつくには、十分近くを必要とした。ライトバンのような形状をした野戦機動車は道中で何度も派手に飛び跳ねたため、ひどく汚れていた。

小隊は村落から若干離れた丘の、村落とは反対側の斜面に三十ミリ機関砲を搭載しての歩兵戦闘車^{IFV}を隠し、一部の歩兵は降車して丘の稜線で待機していた。IFVのエンジンが低く唸る。

「状況は？」

西村は、すぐに敬礼してきた小隊長に答礼しつつ訊く。

「あまり良くは……。今にも始まりそうで」

何が始まるかは、言わずともその場の誰もが分かっていた。

「突入しますか？」

西村に同行していた伊藤が訊く。戦闘も辞さないつもりらしかった。確かに必要があれば武器使用は許可される。だがそれは民兵の排除が任務にあるからであって、正規軍と交戦していいとは命令書の何処にも書いてない。

「戦闘は避けたい。出来れば、だが」

そう言って西村は双眼鏡を覗く。ちょうど、ズボンを履きかけの兵士が民家から出てきた。畜生どもが、と悪態をつく。

「そうそう動きそうにはないな……っ！」

西村がそう言うと同時に耳に入ってきた音に、全員が村落を見た。軽い破裂音。銃声だ。それも一度や二度ではない。何丁もの銃が連射している。

双眼鏡を構えていた下士官が言う。

あ、こりゃイカン。逃げ出したのが殺されてます。

「まずいですな」

伊藤が険しい表情で村落を睨んでいた。西村は静かに、だが強く言った。

「突入準備」

同時に、降車していた歩兵たちが一斉に動き出す。

その時だった。急に聞こえてきた走行音に、西村は野戦機動車に向かっていて足をとめた。

巨大な塊が丘の稜線を一気に越えてくる。

それはまごうことなき、政府軍の装甲車だった。

同時にその銃塔が閃光を発する。

着弾の土煙が奔る。

それは一直線に西村の足元へ。そして西村は焼いた鉄の棒を思い切り捻じ込まれる様な感触と、痛みを感じた。

彼女の後ろで射撃を命じる声がある。伊藤の声だった。

止めろ、と西村は叫ぶ。叫ぼうとした。声が出なかった。意識が遠のく。音も聞こえなくなる。

暗くなってゆく西村の視界に最後に映ったのは、機関砲の猛射を受けて、炎と共に吹き飛ぶ政府軍の装甲車だった。

「命に別状はありません。明日には復帰できるでしょう」

司令部に併設された病院の一室。その外の廊下から部屋の中を窺う石井と山本がいた。

「話を聞いた時は焦ったけれど。負傷は彼女一人だけで、政府軍は一人残らず殲滅。上出来だ」

「しかし、まずいですよ。政府軍と交戦したなど」

山本の焦りをよそに、石井は涼しい顔のまま。思わず山本は顔をしかめる。西村少佐が意識不明と聞いた時には、見舞いに行くのにへりを使わせろと大騒ぎだったというのに。

「問題ない。それ自体は想定範囲内だ」

石井はそれだけしか言わず、山本は怪訝そうな表情をした。

想定範囲。気付いた時には、既に山本は言葉を発していた。

「失礼ですが中佐殿。もしかして着任された日の西村少佐への電話は、前進命令の事だったのですか？」

彼がそう言った次の瞬間には、石井の雰囲気が一変していた。

「なぜそう思う？」

「前進命令が出た時、大半の支隊は慌てて準備を始めました。しかし西村支隊だけはスムーズだった。これは事前に情報が回っていたとしか思えません」

「……続けろ」

「さらに割り当てられた前進目標が問題です。西村支隊が割り当てられた目標には政府軍も向かってました。これは総参謀部、あるいはあなたの部屋にいれば衛星情報その他で分かっていた事です。しかし、西村支隊にはそれは知らされていなかった」

石井は何も言わない。

「遭遇すれば交戦の可能性もあったのに、です。現場で政府軍の動向を掴めたからよかったものの、もし何も知らずに村落に突っ込めば、ここに横たわっているのは死者だったはずですよ」

「彼女の部隊ならそれは避けられる。そう思っていたんだ」

そう呟いた石井に、山本は驚きの表情を向ける。

まさか本当にそうなのか？

だが彼にその言葉の意味を考える暇はなかった。衛生兵が駆け寄ってきたからだ。衛生兵は山本にいくつか耳打ちして、すぐに去って行った。後に残された山本の顔は再びしかめっ面になっていた。

「司令官が呼びです。その、相当いきり立っているようで」

石井は溜め息一つもらして軽く頷いた。何の用件かは察しがついていた。

「すぐ行く。……それから、私のデスクに赤色の封筒があるから開けて、そこに書かれた通りにしてくれ」

「了解しました」

山本が敬礼すると、石井はもう一度病室を覗きこんで呟いた。

「また会いに来るよ、奈菜」

「命令を差し止めるとはどういうつもりか！」

いきり立つ、という山本の描写は正しくなかった。少将は激怒していた。西村が後送されてきた時、少将は全部隊に停止命令を出そうとした。いや、出されるはずだったし、実際少将は出したつもりだった。通信参謀が通信室から命令を出す前に、石井が止めたのだ。まだ足りない。そう考えていた。

「まだ総参謀部が設定した前進目標には達していません。その状況で停止は認められません」

「それどころじゃないだろう！ 奴らの正規軍と銃火を交わしたのだぞ！ 自由民主軍は既にこちらに向けて動き始めている。これ以上前進したら、各支隊が各個撃破される！」

「その点も考慮された上での前進目標です」

少しやりすぎたかな、と石井は思ったが、今更どうにもならない。

「そもそもその想定が甘いんじゃないのか？ 連中が黙っているわけがなかったんだ！」

「だとしても総参謀部はまだ停止する必要を認めていません。彼らも逐一情報を受け取っている以上——」

「ならば総参謀部の連中の目は節穴だ！ 貴官のようにな！ 石井中佐、貴官の身柄を拘束する！」

伊藤は支隊本部代わりの指揮通信車で端末に情報を入力していた。西村が後送されてからは、彼と第一中隊長が支隊の指揮を執っていた。

彼は自分が咄嗟に下した、そして越権の射撃命令が現在の事態を招いたのではないかと思っていた。しかしそれを頭から追い出そうとするかのように次から次へと仕事が舞い込み、思い詰めたりするような余裕は無かった。第一中隊長と旧知の仲であり、変に気を使う必要が無かった事も、彼が持ち堪えた一因かもしれない。

「伊藤大尉はおるか？」

指揮通信車の後部ハッチが開かれて、ケブラーヘルメットを被った第一中隊長が顔を覗かせた。

「おう、どうした？」

伊藤がそちらを向くと、彼は白い歯を見せる。

「正面の民兵どもはとりあえず排除した。こちらは損害なし。上々だ。前進が差し止めになったから、追撃はできんがね」

「そうか、お疲れさん。一つ吉報がある。明日には支隊長殿が復帰する」

そう伊藤が言うと、第一中隊長は少し驚いたような表情を見せ、それから安堵の溜め息をついてみせた。

「ありがたい、いい加減給料以上の仕事にも飽きてきた頃だ」

「元から越えてるじゃねえか」

「冗談だよ。ところで、連中の正規軍の動きは？」

伊藤は端末を叩いて、ディスプレイを切り替えた。

「旅団本部からの情報によると、首都で集結を終えた親衛軍の三個師団がこちらに向かっているらしい」

「奴らの虎の子か！」

「ああ、それと一般部隊の自動車化師団も二個、前衛のような形で向かってきてる」

第一中隊長は口笛を吹いた。その表情は険しい。

「すげえ、千両近い戦車か。翻ってウチの支隊の戦車は一個中隊、旅団全体でも五十両前後か。派遣軍レベルで見ても予備含めて精々百五十両。おまけに連中には空軍がある……連中の作戦機は何機ぐらいだ？」

「ちょっと待て、今資料を出す。もつとも、殆ど旧型機の筈だ。王国軍のお下がりだからな」

そう言って伊藤が見せた資料には、いくつかの種類 of 軍用機が載っていた。かつて将校教育で教え込まれた王国製のものばかりだ。

「戦車も大半は旧式。まあ巧くやれば戦えるか」

「苦労しそうではあるがね」

「なあに、大戦の時よりはマシさ。俺は王国軍に包囲されたことがあるんだ。あの時は往生したぜ？」

そう言って二人揃って一頻り笑うと、耳障りな音が車内に響いた。緊急無線。先行させている部隊からのものだった。その声は切羽詰まったもので、二人の表情は真剣なものに変わった。

『敵機械化歩兵接近！ 一個中隊規模、偵察部隊と思われる！ 戦車は確認できず！』

もはや誰も、敵という単語に違和感を覚えなくなっている。

「一般師団か？ 親衛軍か？」

第一中隊長がそう言うと、伊藤は間髪入れずに答える。

「戦車がないとなると、近くに展開していた一般師団だろう。時間的にも、親衛軍が来るにはまだ早い」

それを聞いて少し口元の緩んだ第一中隊長は伊藤を見て、どこか楽しんでいるような口調で訊いた。

「さて、どうする？」

伊藤は逆に訊き返した。

「支隊長殿ならどうするかな？」

「お前はどうかんだ？」

「だいたい想像はつく」

伊藤がそう言うと、第一中隊長は不敵に笑った。

「奇遇だな、俺もだよ」

すると伊藤はつまらなそうな声で言う。

「じゃあその通りにしよう。後で叱られるのも面白くない」

それを聞いた第一中隊長は、思わず嘔き出した。

「ハハ、お前があの人が一番近くにいるからな！」

それから笑顔のまま指示を出す。迷いは無い。

「よし、やるぞ。通信兵、戦車中隊長につないでくれ。今までずっと死体運びで出番がなかったからな。連中張り切るぞ」

すぐに応答があった。どうやら向こうは退屈していたらしい。

「おう、敵だ！ 誘い込んで袋叩きにするぞ！」

《続く》

【次回予告】

石井が立案した作戦とは何か。

本国と隣国、そして沈黙を守る共和国の見え隠れする意図は。

神から見捨てられた地を、人から見捨てぬ道理はない。

たまには音楽をかけながら、読んでもいいんじゃないかな？

この小説を書かせたすばらしい曲たち。

岸田教団&明星ロケッツ『ネクロファンタジア』

『メイドと血の懐中時計』

回路 - kairo - 『Dying』

凋叶棕『RAINMAKER』

TaNabata 『蜜蜂の飛行』

FELT 『Day after』

『step』

発熱巫女〜ず『ENTICEMENT』

TUMENECO 『星空の器』

幽閉カタルシス『女神の口づけを』

Minstrel 『Killing me』

じゃねっと亭『死神の不精度』

Pizuya's cell 『栄光なる勝利を』

Liz Triangle 『リトルドリーマー』

SOUND HOLIC 『Monster's gaze』

Foreground Eclipse 『I Don't Need Any Titles To This Song!』

こもど〜ね『厄神様と贈り物の話』

Story Of The Year 『The Antidote』

EGOIST 『名前のない怪物』

GLOCK17——theoria——

松本惇暉

—

テロリズムとは、ある政治的目標のために、暗殺、暴行、粛清などの、直接的な恐怖手段に訴えることをいうらしい。

ならば、眼前に広がっている光景も、テロリズムの結果なのだろう。

ありふれた中学校の前に、赤色灯を光らせたパトカーが何台も停まっている。灯光器のせいで、真夜中だというのに、とても明るい。月がくっきり見えている。中秋の名月だ。

私の帯びている刀の鍔が、キラリと輝く。

慌ただしく駆け回る機動隊員、私服の刑事。誰もが防弾チョッキや、ヘルメットで重武装をしている。時折、怒鳴り声が聞こえる。

「もっと警備に人を回せ！ 野次馬を徹底的に遠ざけろ！」

こんな独白も聞こえた。

「SITだけじゃなくて、SWATも必要だな」

確かに、今回はやっかいな種類のも物が現れた、と思う。だからこそ、私はここに来たのだ。カストロフィー——人間を超える生命力と凶暴さを持った存在。それを処分するのが、任務だ。

「いや一夜中に呼び出されるなんて、ツイてないね」

自分の背後で、陽気な声がした。誰がしゃべったのか、すぐに分かった。聞き慣れているものだったから。振り返って、応える。

「こんばんは、美歌」

「こんばんは、舞花。今どんな感じ？」

「まだ、待機中。司令部が必死に情報を集めてる」

「ふうん、じゃあ、もうちょっとかかりそうだね」

美歌はポケットから、最新式のインカムを取り出して、耳にはめた。超小型マイクを襟元へつけるタイプだ。

「……人工^{ミドリ}知能^リの分析によると、今回は人間^{レプリカント}型らしいんだ」

私がそう言うと、美歌は顔をしかめた。

「マジで？ これはあるの？」

彼女は耳元で、指をくるくると回した。それに首を縦に振って応える。イエス。

「知能持ちかあ……人質を取るぐらいだから、当然かあ」

「もう一つ。今日は榛名くんも、暁くんも、飛鳥もいない」

「知ってる。出張だってね。タイミング悪かったら、ありやしない。ところでさ」

「はい？ どうしたの？」

美歌はクスクスと笑った。

うれしいことか、おかしいことがあったのだろうか？ もしくは、私の行動に彼女の気分を害するところが、あったのだろうか？ 三つの場合が考えられる。

「舞花も制服なんだ、と思って」

「曲を作ってたら、こんな時間になってしまってね」

私も美歌も、高校の制服を着ていた。黒いセーラー服。この夜の闇に溶けてしまいそうだ。

「あたしも一緒だよ。本読んでたら、寝落ちしちゃって」

私は、美歌がおかしくて笑ったのだと分かって、安心した。相手を不快にさせることは、避けなくてはならない。経験は、生かさなくては。

「美歌、ユキナ、知らない？」

「あれっ？ もう来てるんじゃないの？」

「私、まだ見てないんだ」

「そりゃ、珍し——」

美歌は言葉を途中で切った。私は彼女の視線をなぞった。そして、どうして口をつぐんだのか、理解した。

「噂をすればなんとやら、か」

「おおっ！ 舞花はうまいこと言うね！」

美歌は元気よくそう言って、大きく手を振った。私の視界に、一人の女の子が入った。

私たちと同じ制服を着た、金髪の少女。

こちらに向かって、歩いてくる。度も目をこすっている。たぶん寝ていたんだろう。私は^{ケータイ}端末をホルスターから出して、現在の時刻を確認した。

「……午前二時だね」

「へえ、そんなになるんだ。そういえば、あたしも眠いや」

そう言って、美歌はあくびをした。私は近づいてくる少女を、じっと見つめた。今日、彼女はどんな表情をしているんだろう……。

金髪少女は、私たちの前で立ち止まった。

「……こんばんは」

むっつりした、どこか不機嫌そうな声。西洋人らしい、目鼻立ちがはっきりした顔。彼女——メアリー・ユキナ・ホーガンがよく見せる、態度だった。

「ユキナーひよっとして、寝てた？」

美歌がどこか楽しんでいるふうに、尋ねた。

「当たり前でしょ。何時だと思ってんの？」

「眠いよね一夜更かしはいけないよねー」

「舞花、今の状況を教えて」

ユキナは美歌の言葉を無視して、私に話しかけた。お約束である。

「司令部が情報取集中。少しずつ、こっちに流されているんだけど」

「どんな情報が入ってきてるの？」

「なんでも今日の午後九時頃、この近くで、統一抵抗戦線^{U R F}に対する制圧作戦があつて……そこで、本来なら処理するはずのカタストロフィを取り逃がした、と。その数四」

「はあ……要するに、私たちは尻ぬぐいをさせられる、ってことね」

「……やつらは、ちょうど近くにあつた中学校へ——」

私が言い終わらないうちに、彼女は頷いた。

ユキナは端末の画面に指をタッチして、中学校の見取り図を呼び出した。美歌がぐっと、身を乗り出してきた。

ユキナは相変わらず、不機嫌な表情のままだった。彼女はいつも興味深いそれを見せてくれる。例えば——

「ユキナちゃんはさ、今度のやつ——」

「美歌、ちゃんづけやめて。何度も言ってるでしょ」

「あっ、ごめんごめん。可愛い女の子がいて、ついね」

「……可愛いも、嫌いだから——」

「そうだったね！ あたしとしたことが、不覚だった」

「五班の人たちが、一度突入したんだけど、けが人が出たためにいったん退避したらしい」

私は口を挟んだ。美歌とユキナのやり取りは、聞いていて飽きない。けれども、この情報は全員が共有しなくてははいけない。

「なるほど、だから私たちに泣きついたらってわけね」

「ダメだよーユキナ。五班の人だってがんばってるんだから！」

「しょうがないでしょ。ありのままを言っただけだもん」

ユキナはそう言って、顔を背けた。私は美歌のしゃべり方が、どこか教師に似ていると思った。

美歌は追い打ちをかけるように、口を動かした。

「人命第一ってことだよ、きっと。ユキナもケガは嫌じゃない？」

「そりゃあ……」

私もこの会話に加わろうとしたとき、肩を叩かれた。

「特別執行官^{GL}ってのは、ヒマでいいな。こんなに駄弁^{OK}つていられるんだから」

皮肉を利かせたこの口調。これまた聞き覚えのある声だった。私の横に、ぬっと現れたのは、防弾チョッキとプロテクターに身を包んだ機動隊員だった。

「こんばんは。黒井警部」

「これはこれは、西宮特別執行官。元気そうで」

「ちょっと、その馬鹿にした言い方直してよ」

美歌の眉間に、シワが寄っていた。黒井さんと、美歌は仲が悪い。私には、人間を嫌いになる、ということが分からない。だから、いつも不思議に思う。

「馬鹿になんかしてないさ。それより、そちらの可愛いお嬢さんは？ 知らない顔だ」
一瞬、ユキナの唇が動いた。

彼はユキナのほうへ、顎をしゃくった。私はゆっくりと、彼女の紹介をする。
「彼女はメアリー・ユキナ・ホーガン。私たちと同じ、特殊生物管理局の特別執行官」
「ほう……この人形みたいな子がね……」

ユキナは黙っていた。彼女は『可愛い』と『人形』という言葉が大嫌いだ。……憎んでいると言ってもいい。

返事もしたくないのだろうか。

「黒井さん。ところで、私たちに何の用ですか？」

私は首を傾けて、彼を見つめた。こうすると、自分が疑問を持っているんだ、とアピールできるらしい。なかなか役に立つしぐさなのだ。

「いいニュースが入ったのさ。それを君たちにも教えようと、ね」

「どうせ、しょーもないやつだよ。きっと」

美歌が会話に割り込んできた。いつものことなので、黒井さんも、私も、気にしない。何事もなかったかのように、話を続ける。

「校門にある、防犯カメラを解析したのさ。そしたら……」

彼はもったいぶって、少しの間、言葉を切った。美歌とユキナの目つきが、また険しくなった。

「カタストロフィの姿がぼっち映ってた」

「さっさと行ってよ！」

美歌は早くも、しびれを切らしてしまっただけらしい。いっぽう黒井さんは、ニヤリとした。

「今日の標的は、犬神さ」

I

「いやーあの映像はグロかったなー」

あたしは歩きながら、舞花へそう言った。無線機から流れる音以外に、響いてくるものはない。

私たちは装甲車と、盾を持った特殊捜査班^{S I T}で構成されたバリケードへやってきた。

校庭はとても静かだった。

「防犯カメラの、肉が抉れて、骨がむき出しになったやつ？」

「そうそう。肘から下がなくて……なかなか痛そうだったね。対物ライフルでやられたのかな？」

舞花は瞳を左右に動かしながら、スタスタと歩く。あたしやユキナより早足だ。

「こっちとしては、ありがたいね」

「だよーねーそういうば、ユキナに聞きたいことがあったんだ！」

「なに？」

ユキナはちょっと迷惑そうな顔をした。そう邪険にしなさんな、って

「イギリスでレプリ型っていうと、なにが出てくるの？」

あたしは首を回して、後ろを見た。ユキナは鼻を鳴らして、応えてくれた。

「イギリスで、レプリ型はだいたい吸血鬼か、人狼^{ルーガル}だから」

「ふーん、そうなんだ」

「人狼は、犬神に似てる」

ユキナがポツリと呟いた。その拍子に、あたしの目にユキナの手の中にある、ナイフが映った。自分の薙刀よりも、数倍光っている。

手入れしてるんだなあ。

「美歌、このナイフがどうかしたの？」

ついつい目がいつちやった。あたしの瞳が、ユキナの拗ねたような表情を捉えた。いやあ、金髪だと様になるね。

ホント可愛いなあ。

「ナイフがきれいだな、ってね」

「どうも、お世辞をありがとう」

ユキナは唇をほんの少し上げて、笑った。まったく、素直じゃないんだから。あたしがフォローしようとしたとき、舞花がぽつりと呟いた。

「そういえば、新種のカタストロフィがまた見つかった、という話を聞いた」

「今度はどんなやつ？」

あたしはとっさに、応えてしまった。こっちのほうが面白そうなので。

「妖怪型で、名前は……確かしようけら？」

知らない妖怪だ。

「……なんか弱そう」

「嘘をついた人間を、鋭い爪で殺してしまうらしいよ。外見は虎に似てる」

「量子虚構理論で、分析はしたの？」

ユキナがいきなりしゃべり出したので、びっくりした。あたしはちょっと考えて、心の中でポンと手を打った。

ユキナが仕事の話になると、喰い付くことをすっかり忘れてた。真面目だもんなあ。

舞花がすぐに答える。

「した。発生源は、凶画百鬼夜行。この前、研究所の人に聞いたから、確かだと思う」

あたしはここで閃いた。ずっと舞花か、ユキナへ質問したいことがあったのだ。

「あのさーあたし、いまだにリョウシキョコウ理論、だっけ？ それがよく分かんないんだよね」

二人の足が止まった。振り向きざまに、舞花の長い黒髪が揺れた。

忙しそうに、警官が私たちを追い越していく。

ユキナがやれやれ、というふうに頭を振った。いっぽう舞花は表情を変えずに（そもそも無表情だけど）、首をかしげた。

「よく執行官やってこられたわね」

と、ユキナ。

「一口では説明できないね……」

と、舞花。

「で、どうなの？」

あたしは二人を交互に、見返した。ここは少しくらい教えてくれてもいいんじゃない？

舞花がゆっくりと、口を動かした。

「美歌、量子虚構理論っていうのは、素粒子物理学の発展形みたいなもので……素粒子の動きによって、フィクションの中で語られるものが、実際に生まれてしまうことを証明した理論なんだ。そう、文章を書く、ということによって、カタストロフィは生まれてしまう。……つまり

、原子よりも小さい物質によって、空想上の怪物や人間ができてしまう、ということ」

つかえながら話をする舞花は、新鮮だ。いつも流れるようにしゃべるから、こんなに言葉を濁すことはめったにない。

あたしはなんとなく得した気分だった。もし、舞花がここで仮面のような表情を崩してくれたら……最高なのに。

「うーん、イマイチかな。ピンとこないなあ」

「私も難しくて、本を読みながらじゃないと、きちんと説明できない」

舞花はそう言って俯うつむいた。対してユキナはあたしから目を逸らしていた。ははあーん、誤魔化そうとしてるな。

「じゃあ、今度はユキナの番だね！ はい、どうぞ！」

「なんで私のなの……舞花が言ってくれたじゃない」

「ユキナのも、聞きたい」

「あのね……そんな無駄話してる時間はないの。さっさと犬神を殺やる。人質がいるんだから」

「ほんのちょっとー」

「……ユキナの言うとおりでよ。今は先へ行こう」

舞花がそう言って、スタスタとまた歩き出した。そういえば、この人も仕事人間だけ。

つれないなあ。……まあ、舞花だから仕方ないか。あたしは肩をすくめて、後を追いかけた。よし、帰るときに根掘り葉掘り、つつついてやるとしよう。

あたしは隣にいるユキナをちらっと見た。柔らかそうな髪が揺れている。彼女はあたしの視線に気づいて、怪訝な顔をした。

「なに？」

「いやーなんでもないよー」

あたしはニヤッと笑った。さて、がんばろうかな。

「一丁、やってやりますか！」

A

私は美歌のことが苦手だ。まだ、舞花のほうが取っつきやすい。でも、舞花も舞花で、あの乾いた瞳ににらまれると、自分の中を覗き込まれているみたいで、気持ちが悪い。

「誰もいない学校って、わくわくするね！」

この緊張感のなさが、イライラするのだ。

美歌の能天気な声が、ガランとした教室に響いた。二階の東端、理科室。人質がいるのは、この部屋から見下ろしたところにある、武道場だ。黒板の反対側にある窓から、狙撃手たちがライフルを構えている。

鉄製の重そうな左右開きの扉が、月明かりで光っていた。

「あのさ……いつカタストロフィが襲ってくるか、分からないんだよ。ちょっとは意識したほうがいい」

足を止めず、私はそう言った。

「そうかな？ ぜんぜん出てくる気配ないけど。本当にいるのかな？」

東風馬耳。コイツは話を聞いているようで、聞いてない。私はそのせいで、散々苦勞した。

「ちょっとは周りを見なよ」

「はいはい、了解しました」

美歌はおどけて、敬礼をした。文句を言いかけたとき、舞花が割り込んできた。

「美歌、ユキナ。信号が聞こえない？」

「コード？ あたしは全然」

出鼻をくじかれた、みたいになってしまった。……なんだか損した気分だ。私はため息をついて、舞花へ返事をした。

「私も聞こえなかった」

「……そっか。一瞬だったから、気のせいかもしれない」

コード、か。私たちのみに分かる、カタストロフィの前兆。

特別執行官の耳だけに入って来る、幻聴。私が一番嫌っているものだ。

「そういやさ、ユキナのコードって、どんな感じなの？」

コードは一人一人違う。私は――

いけない。

あやうくどんなものか、言ってしまいそうになった。美歌の怖いのは、こんなふうに、人から話を引き出すのがうまいところだ。

「普通のコード」

「えーそれじゃあ、答えになってないよー」

「そういう美歌は、どんなふう聞こえるの？」

はぐらかすために、そう尋ねていた。彼女のつつこみをかわすには、これが一番効果的だ。

「あたしはドラムみたいな音！ オークカスタムっぽい、低いのが特徴かな」

「ふうん。舞花は？」

彼女へ話を振ったのは、もちろんわざと。美歌の興味をそらすため、ちょっとばかりしゃべってもらおう。

「……ギターのような、ベースのような、音。どっちかっていうと、ベースに近い」

「舞花はどっちも弾けるもんね」

案の定、美歌は喰い付いてくれた。彼女は話を忘れるのも、早い。これで一安心。私は二人に気付かれないよう、息を吐いた。

「そういえば舞花、新譜の曲、どれぐらいできた？」

「まだ一曲しか、書けてない」

この場にふさわしくない会話が、続く。私は心の中で耳を閉ざして、前だけを見た。

「冬コミへ間に合うかなー」

「まだ二か月もある」

陽気な声と、冷たい声が混じって、暗い教室へ響いた。もっと静かにならないだろうか。

人の呼吸や、キーンという耳鳴りが聞こえるほどの、静寂が欲しい。

そんなことを考えていると、突然、自分の耳にノイズが走った。

ガラスを引っ掻いたときに出るような、そんな音。それはだんだん大きくなって、はっきりと

聞こえるようになった。

そして、そこに叫び声のようなものが加わって……。一瞬だけ、私は俯いた。

気がつくや、舞花も、美歌も、いつの間にか立ち止まって、私を見ていた。

「ユキナも、コードが聞こえてるね」

舞花がそう囁いた。私は黙って、頷く。美歌は肩にかけていた薙刀を、両手でしっかり持った。そのとき、彼女の茶色がかった黒いポニーテールが、ちらりと見えた。

舞花も、美歌も、私も、無言だった。

音はますます大きくなっていく。

「交戦^{ウォーゾーン}地帯に入った、ってことなのね」

私は誰に言うでもなく、そう呟いた。

二

私たちは、放水車の前に立って、様子をうかがっていた。真正面に、武道場の扉がある。扉へ嵌め込まれたガラスが、白く染まっていた。部屋の中で、明かりが灯っている証拠だ。

「舞花、ちょっと、いい？」

ユキナが耳打ちしてきた。彼女の息が、ふわりと皮膚に触れた。たぶん、あのことだろう。

「処分の手順なんだけど」

「どうするつもり？」

「舞花の^{そうでんは}蒼電波で、あの扉を壊して。煙に紛れて、まず私が一番先に入って、近くのやつを処分する。余裕があれば、ナイフを投げてけん制しておく」

「……あなたの治癒力を疑うわけじゃないけど……大丈夫？」

私はユキナの瞳を見つめた。目は口ほどによく物を言う、ということわざがある。

「こんなことで心配しなくてもいいよ。向こうじゃ、ここよりひどいところがいっぱいあった」

ユキナはいつもの不機嫌そうな表情のままだった。私は安心した。彼女から、不安や動揺を、読み取ることができなかったから。

「ねえねえ、ユキナ。舞花が蒼電波を撃つとき、あたしも^{そうえんは}蒼炎波を――」

美歌が胸を反らして、口を動かした。けれども、ユキナの言葉によって、最後までしゃべれなかった。

「ダメ。どこかに引火したらどうするの？」

「ちゃんとセーブするって……」

「ユキナ、^{シグナル・ベータ}signal^βなら、壁を焦がす程度で済む」

私は美歌の援護が必要だと思って、そんな言葉を添えた。ユキナの意見ももつともだけど、人質がいる以上、なるべく一気に処分したかった。

ユキナは、眉の間を揉みながら、こう言いかけた。

「……分かった。絶対に――」

彼女の声は、ある音にかき消された。

ガラガラと、まさしく引き戸を開けるような、もの。

武道場の扉がゆっくりと、開いていった。私も、美歌も、ユキナも、じよじよに広がる黄色い光へ、目を奪われた。

機動隊員たちの、盾や銃を構え直すカチャリという音が響いた。私も、無意識に柄へ手をかけていた。

ベースのような、重いコードが一際大きく鳴り響いた。

喚きとも、悲鳴とも、受け取れる声が聞こえた。

完全に開け放たれた扉から、ジャージ姿の中学生が飛び出してきた。

「ちよっ、どういうこと！」

美歌の叫びが耳に入った。私の脳内で、数えきれないほどの仮説が舞い踊った。

投降するつもりだろうか。

あるいは、こちらを混乱させるためだろうか？

どうにも解せないと思ったとき、自分の目が、戸口に立つ三つのシルエットを捉えた。

細長く、黒光りしているものが目に入った。

一瞬で、私たちのよく見る独特な影が、やろうとしていること理解した。

「伏せて！」

ユキナと、美歌の声がかぶった。

「×××××！ ×××××！」

聞き慣れた、形容しがたい、声がした。

カタストロフィ特有の、しわがれたもの。

美歌がシルエットに向かって、走り出した。私も思考を放棄して、後に続いた。刀を抜き放ちながら。

「ああ、もう！」

ユキナの嘆き聞こえたような気がした。

耳をつんざく、サブマシンガンの連射音が響き渡った。

II

あたしの目の前で、血を吹き出しながら、バタバタと人が倒れていった。

腕、足、腹、身体のどこかしらを、撃ち抜かれて。

あたしの目に映る顔は、どれも歪んでいた。苦しむ表情なんて、大嫌い。

鼓膜が破れてしまいそうなほど、コードが大きく、激しくなった。

銃弾が頬をかすめていった。あたしはいくつもの弾を避けながら、薙刀を力の限り振りかざした。

蒼い炎が刃を包んで、辺りを照らす。そのせいで、カタストロフィの恰好がよく分かった。

頭が犬で、ホームレスの着ているような、服だった。三人の犬神は、仁王立ちになって、あたしへ銃を向けていた。

こんな弾幕なんて、軽い軽い！

あたしたちには、銃弾が遅く、まるで風船が飛んでいるように見える。

ぎゅっと、柄を握りしめる。

思いつきり地面を蹴って、飛んだ。

ユキナがしてくれた忠告なんて、知ったことか！ あたしは、心の中で叫んだ。

シグナル・イレギュラー
Signal-irregular

あたしはすべての感情を込めて、薙刀を振り下ろした。

B

炎は、龍のようにやつらへ突進した。

同時に、銀色に輝く刃が、真ん中のやつの頭へのめり込んだ。

蒼い爆炎が、両側のカタストロフィを吹き飛ばした。彼らは自分の身体で、左右へきれいな曲線を描いた。美歌の刃をもろに喰らったヤツは、縦に真っ二つになった。

爆風が、私や、舞花を襲う。

とっさに手をかざして、しゃがんだ。熱気がじんじんと身体に伝わってくる。

両手に持ったナイフへ炎が映り、まぶしかった。

吹き抜ける風に混じって、呻き声がそこかしこから聞こえる。

私のまわりは、にわかにも明るくなった。美歌によって断ち切られた死体が、こうこう煌煌と燃えているか

らだ。

何人もの足音と怒鳴り声が、さっきまでの静かさを叩き壊した。警官たちが、中学生へ駆け寄って行く。

あの、バカ！

私は舌打ちをした。三人まとめて始末できたのはいい。問題は――

いままで、人質も爆風に巻き込まれたことだ。やけどを負ってしまうほど、ひどいものではない。でも、私たちが守るべき人間を危険に晒してしまった。

美歌にあとできつく言うておかないと。彼女に対する怒りが、ふつふつと込み上げてきた。

美歌は燃え盛る死体を、じっと見つめていた。私は右手のナイフを、太ももにつけたホルスタ一にしまった。

くるりと、美歌は私のほうを振り向いた。そのまま、彼女は歩いてきた。

「ユキナー大丈夫？」

「……私は、ね」

美歌は頬を掻きながら、やってきた。さすがに、笑みを浮かべていない。

「美歌のセーブするって、あたり一面を火の海にすることだったのね」

「あーちょっとやりすぎだったかな？」

「当たり前でしょ！ もっと考えて行動しなさいよ」

美歌はなにか言いかけたが、私はそれを無視して、左のほうに吹き飛ばされたカタストロフイへ、足を運んだ。

倒れた犬神は、必死にもがいていた。どうやら、サブマシンガンを探しているようだ。やつの手の中には、なにもなかった。

爆風に煽られた拍子に、どこか遠くへ飛ばされたのだろう。

私は、犬神の姿を初めてじっくりと見た。

犬耳があり、毛むくじゃらの、顔だった。ただ、あの蒼い炎をまともに受けたため、身体のいたるところにやけどをしている。

汚れたコートも、焦げて、所々黒くなっていた。

……なんて醜い。

「……そうはさせない」

私は自然と、そう独りごちていた。

犬神はよろよろと立ち上がった。私の気配に気がついたのだろう。

獣独特の、あの臭いが鼻をついた。やつはふらふらと、腕を振り上げた。私に殴りかかるつもりか。

ナイフを左手から右手に持ち替える。

犬神は私の顔面めがけて、腕を振り下ろした。

ああ、なんて力がなくて、遅いだろう。

身体を少しだけ傾けて、拳を避けた。その瞬間、私のナイフが流れるように、犬神の喉笛を切り裂いた。

三

私は右側へ吹き飛ばされた犬神の、傍らに立っていた。頭から血を流し、身体中にやけど負っている姿は、痛々しい。

倒れた犬神の瞳は、絶えず動いていた。でも、身体のほうはピクリともしなかった。

傍に落ちてるサブマシンガンを拾う余裕もないらしい。

私は刀を鞘へ戻した。膝をついて、焼け爛れた顔を見つめた。

「……あなたに聞きたいことがあるのです」

半分独り言のようになった。私はいつもやっているように、そう犬神へ尋ねていた。

「……」

犬神は黙り込んでいた。私はお構いなしに、質問を続けた。

「あなたは、今どんな感情を持っていますか？」

「……」

「怒っていますか？」

「……」

「悲しんでいますか？」

「……」

「うれしいですか？」

「……」

反応は、なかった。カタストロフィを処分するたびに、彼らに問う。どんなことを感じているのか。

私はあともう一つだけ、問いを重ねることにした。

「どうして、自殺するようなマネをしたんですか？」

「……」

犬神は、私の目を見ようとしなかった。

待った。一分、二分、三分——彼の視線は、一向に定まらなかった。きっかり五分経った。私は立ち上がって、膝についた砂を払った。

今日も、答えは返ってこなかった。経験上、私の望む結果が、ほとんど得られないことを知っている。

あきらめて、私はサブマシンガンをつかんだ。一応、回収しておかなくてはならない。

犬神に背を向けて、歩き出そうとしたときだった。

「……ビック・ブラザー」

自分ものでも、動き回っている警官のものでもない。しわがれた声が、私の耳に響いた。弾かれたように、振り返り、声の主へ視線を投げた。

「ビック・ブラザー……申し訳ありません」

犬神の口が動いていた。譫言のような、そんなしゃべり方だった。

「ビック・ブラザーとは、あなたにとって、どういう存在なんですか？」

私はもう一度、彼に近づいて、そう問いかけた。心臓の鼓動が、早くなった。

これが、期待する、ということかもしれない。

私は彼を見下ろした。

「おお、我々の神、ビック・ブラザー、抵抗を……」

「神なのですか？」

「革命思想に殉じた尊い人よ……」

「人間なのですか？」

犬神の視線は、私に向いていなかった。どこか遠いところを見ていた。

私がなおも言い募ろうとしたとき、彼の瞳から流れ出したものがあつた。

涙だった。

私はなぜか言葉をうまく紡げなくなった。どういう表現がよいのか、分からなくなった。区別できなくなる。

「……どうして泣くのです？」

「どうか、早くあなたの元へ……」

犬神は、ようやく私と目を合わせた。夜空に吸い込まれてしまうほど、彼の瞳は黒かった。

でも、私はよりは澄んでいる、と思った。

「ブラザーのところへ……行かなくては……銃を……くれ」

私の左手には、サブマシンガンがある。

「……」

無言で、私は犬神へ銃を握らせてやった。彼はむくりと起き上がり、あぐらをかいた。銃身を足で挟んで固定した。そして――先端を口に咥えた。

犬神は相変わらず、泣いていた。

引き金を引いたときは、笑っていた。

III

あたしは薙刀を構えて、武道場にそろそろと入った。

残る犬神は、あと一人。確か、手負いのやつがいたはずだ。

あたしは板張りの床へ足を踏み入れた。武道場の照明は、すべてついている。そのおかげで、すぐに犬神を発見できた。

入口から見て正面の、旗が下がっているところに、やつは座り込んで、壁へ寄りかかっていた。

犬神を明るいところで見て、意外に思ったことがある。

頭が犬なだけで、他は人間と変わらない。……服はとことんくたびれて、汚れているけど。

あたしはヤツへ近寄って、鼻先に薙刀を突きつけた。

犬神は目を閉じて、じっとしている。

じりじりと、時間が経っていく。いい加減、動いてくれないかなあ。誰だって、気配で分かりそうな気がするんだけど。あたしは待つ、ってことがめっちゃくちゃ苦手なのだ。

ひょっとして、もう死んでいるのかな？ あたしは刃の切っ先を、ヤツの肘から下がらない左腕へ当てた。

錆色の液体がにじみ出して、滴り落ちた。

そのとき、犬神が呻きをあげて、目を開いた。

「おっ、目が覚めたね」

あたしは犬神の首筋へ、刃をかざした。これなら、いつでも処分できる。

「悪いんだけど、あんたには死んでもらうよ。なにか言い残すことはない？」

どうせ、黙って睨みつけてくるだけだろう。冗談のつもりだった。

「……他のやつらは死んだか？」

「えっ？」

かすれた声が耳に入ってきて、あたしは面食らった。カタストロフィが、しゃべった？

不気味だ。

返事をしないでいると、犬神がまた別のことを尋ねてきた。

「おまえは紙とペンを持っているか？ 辞世の句と、同志たちへのメッセージを――」

「ちょっと待った！ あんたどうしてしゃべれんの？」

あたしは慌てて、犬神の言葉を途中で遮った。こんなにきちんと会話が成立するなんて……。

「なぜそんなこと聞く？ 俺が初めて会うカタストロフィじゃないだろ」

とても流暢な日本語だった。もし、首から上が人間だったら……ぞっとする。

あたしは犬神から、目を逸らした。

「とにかく、紙とペンをくれ」

犬神が、そう催促してきた。

どうしようかな……。やつの要求自体は、吞んでやってもいい。ただ、あたしはいま、紙とペンの持ち合わせがない。

あたしは悩んでいた。そんなとき、後ろからコツコツと、靴音がした。

「美歌、最後の一人はどうなった？」

テンポの変わらない、平らな口調。普段なら、冷たいと感じる声がひどく懐かしかった。

舞花が来たんだ。

「またなにかやらかしたの？ ホントに、懲りないのね」

ユキナの皮肉っぽい言い方も、心強かった。

二人は、あたしの両脇へ立って、犬神に目をやった。

「うーん、ちょっと問題が出てきちゃった」

「問題？ それはどういったものなの？」

舞花がしゃがみ込みながら、そう聞いてきた。あたしは構えを解いて、薙刀を肩にかけた。

「あのさ……紙と何か書くもの、持ってない？」

「一体なにに使うの？」

ユキナがさも呆れた、というふう^{いきさつ}に首を振った。あたしがこれまでの経緯を話し始めようとすると、件の犬神が割り込んできた。

「辞世の句を書くためだ」

「……ふうん」

ユキナもさすがにびっくりしたらしい。顎に手を当てて、考え込んでしまった。

いっぽう、舞花は犬神を熱心に観察している。頭からつま先まで、舐めるように。

その様子を眺めているうちに、思い出したことがある。

確かユキナは、手帳を持っていたはず。

あたしは彼女へ顔を向けた。途端に、彼女はしかめっ面を作った。

まあ、予想通りだね。

「……持ってるけど」

「よかったーこれで解決だね！ ユキナがアナログで助かったよ」

「一言余計。あと、私は絶対に手帳を貸さない」

「えーそんなあ。全部じゃなくて、一ページ破いてさ、渡せばいいじゃん」

「……嫌だ」

ユキナは吐き捨てるように、そう言った。良くも悪くも、融通が利かない。あたしは前髪を掻き上げて、大きく息をついた。

カタストロフィが憎いのは、知ってるけどさ……。

あたしが途方に暮れかけたとき、舞花が腰を上げた。

「……私からも、お願い。彼に手帳とペンを貸してあげて」

ユキナと舞花、二人の視線が重なった。

無表情なのは変わらない。でも、舞花の能面のような顔に、憂鬱な色が滲んだ。

ここで、よく不思議なことが起こる。

この色を見てしまうと、たいての人間は彼女の言うことに、ハイと肯いてしまうのだ。表情を失ったときに生まれた、舞花の武器の一つだと、あたしは思う。

ユキナはしばらくの間、誰とも視線を合わせずに俯いていた。

右肩から左肩へ、あたしは何度も薙刀をかけ直した。だんだん落ち着かなくなっていく。やっぱり、こういう状況には弱い。

はあ、というユキナの溜息が聞こえた。

「……分かった。貸せばいいんでしょ、貸せば」

そう言いながら、胸ポケットから手帳を取り出した。それには、シャーペンも挟まっていた。

ユキナは、犬神へ向けて手帳を突き出した。あたしはヤツがどんなふう^{いきさつ}に反応するか、気になった。

「一枚適当に、使って」

ヤツは乱暴に差し出された手帳を、無造作に受け取った。最後のほうのページを開き、一枚破り取る。そして、淡々と筆を走らせた。

あたしは少しか感心した。手帳に書かれた文字が、きれいだったせいかもしれない。

書き終わるまで、あっという間だった。犬神はペンを置くと、いきなり話しかけてきた。

「あんたたち、ずいぶん変わってるな。全然特別執行官らしくねえもの」

犬神は、まるで嘲笑っているような、そんな言い方をした。

すぐに舞花がこう答えた。

「あなたのほうが変わってます。遺言を残したカタストロフィなんて、初めてです」

C

武道場から出ると、私たちのほうへ駆け寄ってくる人間がいた。舞花から紹介された、黒井という警官だった。

「いやーご苦労様。カタストロフィは完全に処分できたかい？」

黒井はヘラヘラと笑いながら、しゃべっていた。

「もちろん！ あたしたちを誰だと思ってんの？」

「知ってますとも。天下の特別執行官さんだ」

美歌の威勢の良い声が、私の耳を打った。よく元気でいられるものだ。私の身体が鉛のように、疲れているというのに。

「今日は少し特別だったなーいきなりマシンガンぶっ放してくるんだもん」

美歌はいかにも大変だったと、言いたげだ。しかし、私にとって、それは些細なことだった。

私は今夜どうかしている。自分でも信じられなかった。

カタストロフィに物を貸すなんて……。舞花の憂鬱そうな瞳が、そうさせたのだろうか？ 考えれば考えるほど、私という人間が、理解できなくなっていく。

そっと、舞花の顔を盗み見た。

彼女は普段と同じように、お面をかぶったような、無表情だった。私を惑わせたあの色は、どこにもない。

「みんな疲れているのかな？ ひどい顔してるねえ。特に、君かな？」

黒井の言葉で、我に返った。美歌と舞花が、私を覗き込むように、見つめていた。

私は無性に、毒を吐きたくなった。

できるだけ優しげな微笑みを浮かべて、こう言った。

「あなたのほうが、私よりもっとひどい顔になってますよ」

〈終〉

張りつめた空は薄い氷を通してみるように澄んでいた。長い耳を立てると、空気の凜とした気配が感じられる。

この南の地にも冬がある。

雪良は目を閉じ、深く息を吐く。天の呼吸に合わせるように目を開けた。心の奥にいる存在が現れて、紅く凜とした瞳に荒野が映る。雪こそ降らないが、乾いた空気の緊張感は北の地のそれと同じだった。儀式用の白水干に紅の袴は、冬でも着られるようにあつらえられたものだが、やはり寒い。

「時間だ。行こう」

一つの体に意識が二つある感覚はもう慣れた。刀を振るい結界を張ることも『白』との共同だ。しかし圧倒的な力ゆえ、雪良が低い立場であることに変わりない。手綱を握れと言われても、しっかりと抑え込める自信がなかった。しかし運命を変えられるのなら、柳葉刀を振るわねばならない。

歩みを進めよう。この遣いを果たすために。

地面の霜柱を踏みながら林を抜けると、すでに飛揚とあやは門の前に立っていた。

「うわあ」

おもわず雪良は目の前のものに嘆息してしまった。

それは大きな笠鉾だった。鳳凰、千成瓢箪、虎、龍、天鈿女がそれぞれ金銀錦の垂幕に踊る。欄干には雷雲を従えうねる龍が彫られている。車輪には黒漆に金箔のふちどりがされ、それは長身の隼人の背よりも大きかった。三人が各々乗る台座の天井には、神々が演技を見ることができるよう八方にらみの龍が描かれている。

「隼人の持つ技術の粋を結集したものだからな。神々を慰める儀式にふさわしいだろう」

飛揚がそういった。若草の白水干を身にまとい、白袴に黒沓を履いている。袂と足元に鈴をつけているのか、歩くたびチリリと音を立てた。

「お前の乗る笠鉾が一番奥にある。見てくるか？」

「いえ、もうすぐ皆さんも集まるようですし。あやさんはどちらに乗るんですか？」

あやは雪良と同じ白水干に紅の袴だが、袖口にはさらに濃く染めた紫がのぞいている。

「わしは真ん中じゃ。はやく乗ってみたいのう。あの高さから眺める世界はどのように見えるかのう」

袖口で口元を隠しながら、あやは興味津々に台座を見上げていたが、その瞳から楽しさと恐怖がにじんできた。

飛揚も雪良自身も感じていないわけではなかった。隔絶された空間で各々が相手を守りつつ役目を果たさねばならない。それに耐えられるかどうかだ。一見立派な笠鉾だが、誰も助けてくれない空間がそこにあるようだった。

隼人が十人ほど門から出てきた。みな白一色の装束をまとい、袴の裾を膝あたりまでたくし上げ紐でくくっていた。笠鉾の前部には五色の綱がかかっている。彼らが車輪の前後について、一斉に前方のものが綱を引き後方のものが押すと、大きな車輪がゆっくりとまわり、地を震わさん

ばかりの音が腹の奥で響く。笠鉦のてっぺんに飾られた御幣がきらきらと日に輝き、風を受けて動くさまは、まるで生きているようだった。ある程度動かさせたことを確認すると、隼人たちが雪良たちの方を振り返って手招きした。舞殿へのぼるのだ。飛揚は隼人の腕を使って軽々と飛び乗れたが、雪良とあやは肩車をしてもらってようやく乗ることができた。

舞殿の中は薄暗かった。その分だけ外が明るく、地平線が欄干と平行にどこまでも伸びて、後ろを振り返れば隼人の砦が一望でき、長様の邸が見えた。目が慣れるにつれ、儀式を行うには十分の広さがあるとわかる。また、天井には八方にらみの龍が描かれており、その迫力に押しつぶされそうな気がした。

——恐れなくていい。それがいつかお前を守る——



儀式の場、すなわちあわいが生まれるであろう場所は、すでにあやが見定めていた。あやの乗る笠鉦を先頭に、数十人の隼人に引かれてその場所を目指す。笠鉦の揺れと、どこまでも続く平行線に眠気を誘われる。自分の舞殿からほかの笠鉦を見ることはできても、その中にいる飛揚やあやを見ることはできなかった。遠すぎて声をかけることができないし、下の隼人たちに向かって叫ぶには欄干から身を乗り出さねばならない。雪良はここが檻のようにみえた。

そのとき、背筋に冷たいものが走った。あわいがもうすぐそこなのだろう、徐々に気配が濃くなって、存在を気づかれないものではなくなっていく。

(これが、あわい)

はじめて遭遇したのは、隼人の地へ訪れた最初の時だ。その時はほんのすこし視野がかすんだような感じで、存在に気づくことすらできなかった。だが今は、その根源の放つ強烈な存在感によって眠気を払われ、むしろ圧倒されていることに気づいた。

既に日は高くのぼって昼も過ぎていた。顔にあたる風がほんのりからく、地響きにも似た音を乗せて垂幕に吹きつける。丘の向こう側には黒く大きな何かが横たわっていた。太陽の光を受けて、まるで川魚の鱗のようにならぬって光る。聞いたことのない音もそこから発せられているようで、白い丘をその巨体で押しつぶしてしまうのではないかと思うほどだ。

——海だ——

『白』がそう答えてくれても、雪良は初めての光景にただ啞然としていた。

笠鉦が止まった場所は、海に見える緩やかな丘陵の手前だった。やや黄みを帯びた白い丘が並んでいる。

ごおんごおん、と雪良の乗る笠鉦が後ろへ動き、あやの乗っているものと飛揚の乗っているそれが前進した。左右に互いの笠鉦が見える位置で止まり、飛揚とあやが舞殿から姿を現した。雪良も二人にならってゆっくり欄干へ近寄った。見下ろすと足がしびれてその場でへたり込んでしまうくらい高く、隼人たちが小さく見える。あやと飛揚は平気な顔で下の隼人たちと叫びあっていた。隼人たちの姿が笠鉦のかげで見えなくなると、あやは顔を上げた。

「画せ」

伶俐な声が舞殿に響く。あやの両手は複雑に組まれ、そこを起点に透明な糸が出ていく。三つの笠鉦の間を走って互いをつなぎ、再びあやの手へ戻った。隼人の邸で橋姫や猿田彦のやったものよりもずっと強力に外側と内側を、分けたというよりも切り離れた。

純粋な好奇心の塊のように見えたあやはすでになかった。そこには重責に耐える神妙な表情の操人がいた。

その瞬間、雪良の意識は『白』の力の泉に浸された。深みを増した紅を半眼に開き、口の端をゆがませ妖艶な笑みを浮かばせる。足元の床の表面が少しだけ黒く腐っていた。柳葉刀に手をかけて静かに引き抜き、先端で大きな弧を描くように腕を回す。すると結界が各々の笠鉾を包み込み、離れている互いの声が舞殿で聞けるようになった。その後刃を鞘に納めて舞殿に座り込み、両手を胸の前でぱん、と打ちあわせ引き離すと、両手の間から太鼓が現れた。片面を白い革に黒い鉾で張り、反対側と側面を朱色のひもで括った、両手を広げたほどの太鼓だった。撥を握り、『白』は姿勢を整えた。

飛揚は手に薙刀を携えてまっすぐ前を向き、舞殿に立っている。薙刀の柄には鈴と五色の糸がくくられていた。飛揚がこちらをちらりと見る。『白』がほほ笑んだ。

「まかせよ、流れる音に身をゆだねるのだ」

たん、たん。はじめはゆっくりと、一つ一つの音を丁寧に打ち出すようにたたく。

飛揚は薙刀を肩に預け左の袖で顔を覆い、太鼓の音にのせて一步一步舞殿の中を歩き始めた。舞の原初は歩みであり、隼人舞の一番初めに行われるものだ。太鼓の黎明の音に地を踏み鳴らし、神々の降りるべき場をととのえていく。

飛揚の舞う姿が、天井の龍の目を通じて見えた。あやの微動だにしない姿も、意識を向けるだけで鮮やかに脳裏に映しだされる。

ひい ふう みい よう いつ む な

や ここの とお

ふるべ ゆらゆらと ふるべ

あやがとなえると、空気が一瞬だけ止まったような静寂が下りた。太鼓の音と音の間、舞足と舞足の間、画された舞殿のすみでほんのちらりと白いなにかが揺れた気がした。

太鼓が消え、かわりに青竹の笛が一枝現れた。笛を兔唇にそっとあてた。鮮麗な紅がゆれる。あざやか

——さあ、舞って——

三つの舞殿に澄んだ音が響くなかを、薙刀が左右に振られ、五色の糸がなびいた。飛揚がぐるりと向きを変えて薙刀を掲げながら舞殿の奥へ小走りに進んだと思えば、軽く跳んでまたすぐ一回転し欄干のそばまで寄った。何かを払うようなしぐさで、薙刀を振りかざしくるくると回る。袂と足首の鈴が軽やかに音を立てた。

笛の音が潮風とともに吹き渡り、[中山茉奈美1] 隼が優雅に飛ぶように舞っていた。

(飛揚さんだけじゃない)

雪良にはわかった。『白』が今奏でているように、飛揚もまた「何か」と舞っているのだと。笛の音が一段、また一段と高くなるたび、飛揚の舞う隣でかすんでいたものが徐々に輪郭を帯び、同時に飛揚と重なっていく。

(止めないと)

指は止まらない。『白』は雪良の意識をけん制した。

——待て。あとすこしだ——

それどころではない、と訴えたかったが、『白』に押しえつけられた。一番高い音が舞殿を突き抜ける前に、笛の音が止まった。

飛揚の姿が消えたのだ。霞になったかのように、一瞬で舞殿から姿を消した。

「え？」

——あわいだ——

変えられなかったというのか。あわいに、どちらかが引きずり込まれるという運命を。何をやっても、そこに行きついてしまうのか。こんなにも無力なのか。雪良の頭の中で、どろどろした

何かが渦巻いてのしかかった。

「われらも行ってみるかの」

のほんとしたあやの声が、混沌を一掃した。

「え？」

「ほんの少しだけ『神世』の力が強かったようじゃな。飛揚殿があわいに取り込まれた以上、われらもそこへ向かわねばなるまい。まだ儀式はおわっとらんからのう」

この事態をあやが深刻に受け止めていないはずがない。

「行ってみるって、どこへですか？ 飛揚さんをここへ呼び戻すのではないのですか？」

しかし、あやは雪良の言葉を気にせず、雪良に真剣な表情向けた。

「雪良殿、用意はよろしいかな？」

「え？」

雪良の左右には、両手で複雑な印を結ぶ猿田彦と橋姫が立っていた。

「私達があわいまでご案内します。柳葉刀をお持ちください」

雪良の手にはすでに二振りの刀が握られている。それが一体何なのかわからなかった。いつも背中にある相棒とは雰囲気は違っていているように感じた。

「ご武運を」

橋姫が言葉をかけてくれた瞬間、視界がぐにやりと歪んだ。思わず雪良は目を閉じたが、腹の中から引っ張られるような感覚が襲う。次に目を開けた時には、既に海の景色も舞殿もなかった。ひび割れた荒野が、曇天の下に広がっている。



荒涼とした大地。風もなく、なびく草もない。乾いた地面が足裏に固い。空気はみっしりと体にのしかかり冷たかった。

飛揚は一步踏み出した。冷たくひび割れた大地に草花が芽吹き、蝶がひらめく。二歩目、三歩目から花が咲き乱れ小鳥が飛び交い、やわらかな香りが飛揚を包んだ。飛揚は歩き続けたが、曇天と大地が広がるだけで目印のようなものが見当たらず、どこへ向かっているのか分からなかった。

突如前方に光が差し、目を細めてみれば、まばゆい中に、白い衣をまとった隼人が立っていた。携えている薙刀には五色の糸に小さな幡がついていた。飛揚の記憶の片隅で、それがひらりと揺れた気がする。幼いころ、その人の舞う姿を憧れの眼差しで見っていた。光をまとった人はこちらに近づくと、懐かしい声で話しかけてきた。

——飛揚、とうとう来たな——

父はあわいに引きずり込まれた姿のままだった。表情は穏やかで、誇りに満ちていた。しかし何かが明らかに違っている。隼人としての誇りではない。父が『神世』と一体となっていることが、飛揚にはわかった。もうこの人は父ではない。しかし目の前の人を父だと信じてやまない気持ちがあった。

「さらっておいて、何を言う」

——さらわれたのではない。招かれたのだ。神樂しませる舞を、ここでともに舞うために——

薙刀を構え、刃を飛揚へ向けた。

——さあ、薙刀を掲げよ——

現実の世界から連れ出されて、ここでやれというのか。

「神は勝手だな」

——舞えばわかる。帰る必要など無いと思うだろう——

笛の音がなければ舞えないと言おうとしたところで、体が勝手に動き構えをとる。自分の薙刀と父の薙刀とが交差した。

父が踏み出すのと同時に飛揚も踏み出していた。音もなく順序正しく舞っていた。幡が揺れ五色の糸がなびく。父の薙刀から柔らかな風が発せられ、花が散る。それを受けると体が軽くなり、地に足をつけていても空を飛んでいるような感覚が全身を包んだ。父とすれ違うたび、雪の重さに耐える若枝や土の中で光を待つ虫たちの気配、春を望む命の鼓動を飛揚は感じた。そして今持つ薙刀を振るえば、氷をとかし重い雪を振り払えると確信した。

父と目があった。琥珀の双眼から、自身が神を楽しませ舞を楽しんでいるのが分かった。

——春を呼ぶのはお前だ——

対角の父が飛揚と同じ向きで舞っていた。早さも所作もぴったり同じで乱れる気配は無く、むしろ飛揚と父の影が重なっていくようだった。

父とともに舞いたいという、幼いころに抱いていた願望が記憶の淵からよみがえる。そして神とともに楽しめる、真の隼人舞を舞い続けることができるなら、飛揚はそれで十分だと思った。

春を謳歌する大地にないはずの、霜を飛揚は踏んだ。舞をやめると、^{うさぎ}跳人がぽつんと佇んで、長い耳をぴんと空へ伸ばしているのが前方に見えた。白い狩衣に紅の単衣を着て、両手には白銀の柳葉刀が握られている。

——来たか、『幽世』の主よ——

飛揚か父かわからない。もしかしたら飛揚自身だったのかもしれない。しかしその声は父のものだった。待ちわびていたと、腕を開いて跳人に近寄る。

立ち尽くす跳人は長耳をぴんと伸ばし、熟れた木の実のように紅い瞳が飛揚を見据えた。

——『神世』の主よ、ここまで深く引きずり込んではその若者が帰れなくなる——

跳人が柳葉刀の柄と柄をつなぎ合わせた。跳人の背丈を越えるそれは、ゆるく湾曲した刃がそれぞれ反対を向き、真ん中の柄が両端の刃に侵食されているようで短くみえる。振るうと結界が跳人を包み、冷たい風が飛揚の足元の若草を枯らした。

——かえす必要などない——

深紅が迫る。漆黒の柄と白銀の刃が十字に切り結んで火花が散る。片方の刃から発せられた斬撃を受け流すが、もう片方の刃も飛揚に食らいつく。何度打ち返しても白銀が閃き反撃を許さない。

柳葉刀は冷たかった。息吹の喜びを、その刃が凍らせてしまうようだった。悲しみではないが、それは無表情に温度を奪っていく。

飛揚はそれを力任せに押し返し薙ぎ払って後退した。互いに半円を描くように動いて間合いを取り、再び跳人が突進してくる。薙刀を横にないで牽制し、跳人が結界を展開させ大きく横へ跳んでよけた。その一瞬を狙って鋼の^{きつさき}鋒に熱風をまとわせ突き込んだ。結界を破り柳葉刀と触れ、余波が跳人の耳を掠める。

「……っ！」

結界にはじき返されるが、白銀と鋼鉄が触れた瞬間に、鋼を介して今まで感じたことのない殺意と激情が流れ込んでくる。跳人の中で、何か助けたいという感情がやがて血を欲する感情に変わってしまうのを必死に抑えようとしていた。以前とは段違いなものの、飛揚はそれを斬ったことがある。

倒れこんだ跳人は結界の中で、血の滲む長い耳をなでた。白い毛を紅く染める。なでた片手を

ちろりと舐めると、瞳は見開かれ鮮麗なものになった。

「雪良」

「大丈夫です。あとちょっとですから。帰りましょう」

かん。白銀と鋼鉄がかみ合った。火花が刃に爆ぜ結界に映る。この儀式の真意を飛揚は鑑る。ちりり、と袂の鈴が鳴った。

何かが飛び交って、飛揚と雪良を五角に取り囲んだ。雪良は弾き飛ばされたように空中で跳ね返り、飛揚も後ろ跳び退さった。その瞬間雪良はつながった刀を離して地面に刃を突き立てた。そこから結界が電光石火のごとく地を伝って、飛揚を包み込んだ。猿田彦を覆ったあの時の氷の籠だった。五角に画された内側を、同じ結界で守られたあやがみつめて立っていた。

五弦の弾 五弦の弾

一弦は氷雪の融音

二弦は友憶ゆうおく かくめいの鶴鳴

三弦は想い弾きあぐね

四弦は流水の如音じょおん

五弦は最もえんよく掩抑す

上から三つの稲妻が空気を裂き、それぞれの結界に迫る。まばゆい光で目がくらみ、鋭利な音と地響きが身を打ち砕いた。



雪良は目を開けた。隣に『白』が、こちらを見下ろしている。何か言っていたようだが、耳鳴りがひどく、何を言っているのかわからない。轟音で意識も揺さぶられ、目をあけているのでやっとだった。

外に意識を向けた時、最初は何が起こっているかわからなかった。体はうまく動かせないが、雪良は何とかして起き上がった。

魂の海だった。蛍火のようにゆらゆらと小さなあかりが、飛んでは落ち、沈んでは浮いていた。雪良の結界にもびっしりついていた。もし『白』の言う通りにしていなければどうなっていたかわからない。

そのわずかな隙間から、おそろおそろ雪良は外をのぞいた。薄緑の大海原の向こう側、氷の籠のあったはずのところには、椀をひっくり返したようにこんもりと魂が積もっている。さらに雪良の隣にももう一つ、蛍火の塚ができていた。

「画しきれなかったんだ……」

舞うべき場所を『現世』からこのあわいに変えたことで、魂がこちらへ一斉に流れ込んだのだ。それだけではなかった。よく目を凝らすと、ちらほらと青白いものが混ざっている。『幽世』から来た魂が、生きた魂を『幽世』へ連れていくのだ。

突然向こう側の、夥しい数の蛍火が大きく膨らみ爆発した。否。弾き飛ばされたのだ。その下には氷の結界で作った籠が現れ、あやが中に立っている。

娯。降臨し、御魂を慰める

遊。神樂ませ、己樂ませる

あやの両隣に猿田彦と橋姫が現れ、それぞれ手に矛を持ち鋒で地を突いた。その瞬間ぱっと花びらが散るように薄緑の光が一齐に跳び上がる。

——さあ、雪良殿もその刀で地をつくのじゃ——

あやの声がどこからか聞こえ、言われるがままに雪良は柳葉刀で地面を突き刺す。すると結界にこびりついた魂が浮き上がり離れていく。隣の塚も吹っ飛ばされ、氷の籠の中に飛揚が薙刀を地面に突き刺しているのが見えた。

定めた五角の中心に、魂が集まり渦を巻く。やがて大きなうねりとなり、上空までぐんぐん伸びていく。そのそばに、黒髪の女性がふっと現れた。手には幣、腰には瓢箪をつけて、両腕を広げ空を仰ぐ。表着には翼を広げた鳳凰が描かれ、空を飛ぶように見えた。

その姿を見て、雪良は次に何をやるべきか悟った。地面に突き刺した柳葉刀から手を離し、両手を胸の前で合わせると、開いたところから笛が出てきた。どう吹けばよいのかわからないが、その曲目の名は知っている。笛を構え兔唇に当てる。わずかに小首を傾げて紅の視線をその女性に向けた。

笛の音が響くと、女性は跳び上がってくるりと回り、胸を反らし幣を振った。踊りは激しさを増し、髪は乱れ袂や裾がはねる。目は大きく見開かれ、薄緑の光に輝く。魂の渦の周りで踊り狂い、何かを唱えた。

「ひふみよ いむなや こともちろらね」

結界の籠の上から柔らかな光が漏れた。上を見れば八方睨みの龍の輪郭が光で縁取られ、らんらんと光る眼が『兔の遊び』を奏でる雪良を見下ろしていた。

はじめは春野をなでる風のように柔らかい音色が、次第に燦々と輝く陽に透く若葉のように瑞々しいものへと変化していく。それにのせて女性が足を高く踏みならし幣を高く掲げ踊るさまは、悠々と空を舞う鳳凰に似ていた。銀露がやがて霜になり、雪輪を積もらせる枯野に、いつかまた命が芽吹くようにと、一段と高く鋭い音色が魂の渦へとびこんでいく。

すると薄緑の渦がうねり蛇のように細長くなった。もたげたところが龍の頭となって女性を見下ろす。

とおつかみ えみ たまふ

小さな雷、鼓、笛、それとも鐘の音だろうか。高く澄んだ音が合わさって腹に響く。結界が破れ、飛揚と橋姫、あやと猿田彦を、龍が飲み込んでいった。そして最後に雪良を柳葉刀とともに地面をえぐって食らいついた。最後に視界に入った女性は踊りをやめ、こちらにほほえみを投げかけていた。



「もう行くのか？」

振り向けば飛揚が舎の門にもたれて立っていた。薄紫の空がだんだん白み始めて、屋根瓦を黒く浮かび上がらせている。

「ええ。お世話になりました」

「境まで送ろう」

飛揚が振り返り、馬の息が聞こえる。雪良は地面を歩きたかったのも、二頭いる馬のうち一頭を厩へ戻した後、飛揚だけ馬に乗り砦を出発した。

ゆるやかな斜面にさしかかると、吹きおりの風が雪良の耳をなでた。ふとみれば、以前猿田彦と遭遇した場所だ。「白」という文字を授からなければ、今の雪良はここにいないだろう。

「走るか？」

飛揚が馬上から聞くと、雪良は首を横に振った。歩きながら後ろを振り返れば、はるか前方に横たわる丘陵が、朝靄をまとわせて朝日に照らされている。

向き直ると、注連縄が見えた。その先は隼人の土地でなくなると思うと、雪良は少しだけ歩みの速さを緩める。旅はこれが初めてではないのに、不安がよぎる。また、あわいに取り込まれて今度はどこか知らない場所に放り出されるのではないかと思った。しかしそれに怖気づく雪良はもういない。今の雪良はきちんと結界を張って守り、柳葉刀を抜ける力を持っている。

それを教えてくれた人が、馬から降りた。

「また奏でに來い」

琥珀の瞳が雪良を見る。雪良は口の端をゆがめて言った。

「……はるはやて春颯がお前の地に吹けば、きつとうさぎも遊ぶだろう」

琥珀色をたたえたまま、飛揚が笑った。

「達者でな」

注連縄をくぐり、雪良は隼人の地を出た。振り返らず、このまま前を向いて歩いた。

しんぶう

晨風が境を掠める。またひとつ、季節が越えた。

あとがき

こちらは、二〇一三年から書いてきた「神楽」シリーズの完結編です。電子書籍の「案山子 夏号 二〇一二」に「神楽 春」と「神楽 夏」が収録されています。「案山子 夏 二〇一三」に「神楽 秋」がありますので、そちらを読んでいただくと幸いです。

三人称的一人称、難敵だ。

【走る】

ストレッチ、ジョグ、ストレッチ。

体が十分に温まったところで、ウインドブレーカーを脱いだ。火照った体が急激に冷やされ、身震いをした。筋肉が、関節が、固まる前に。二、三度だけ屈伸をして走り出した。まだ薄暗いグラウンドに、自分の足音だけが聞こえる。熱くなる体に、耳だけが痛いほど冷たい。

走り始めは、呼吸が上手く出来ない。いつものことだ。自分への課題だった。もう、課題ではなくなった。

「逃げるのか」

小学校からともに走り続けてきた友人の言葉が浮かぶ。ずっと自分の方が速かった。でも、これからも走り続けるのは友人の方だ。

体が慣れ、呼吸がリズムに乗る。二度吸って、二度吐く。教えてくれたのはクラブのコーチだった。

「お前は、走らなくてもいいのか」

そう問う声に、なんと答えただろうか。未だに答えは見つかっていない。走らなくなってから、見つかるものなのかも知れない。

走っていると、体が軽くなる瞬間がある。足が勝手に動いているような感覚に陥る。恍惚。自分の体すべてが、走るためにある気がした。

「逃げるのか」

ああ、逃げるよ。タイムなんてものに縛られるのが嫌になったんだ。勝ち負けなんて最悪だ。そう言い訳をするのは、友人になのか。それとも自分になのか。

逃げるのと走るのとは、表裏一体だ。だから走って逃げる。逃げた先でも走る。

「おーい」

声が出て、走るのをやめる。ああ、止まってしまった。

走るのをやめた瞬間から体が言うことを聞かなくなる。あんなに軽かったのに、重力が何倍にもなってさっきまでの元を取りに来た。再び走り出すことができないかと思うほど。

「業者が来る前に、ご飯食べて残りの荷物をまとめなさい」

小さい頃から陸上をする人は、大会から逃れられない。大会で走らなければ、記録を出さなければ、走っていないのも同然だ。

引越し先には有名なコーチどころかクラブすらない。自分の陸上。少なくとも人に見える部分は、もう、終わってしまうのだ。

【止まる】

自分には縁のない場所であった。小学校の遠足以来で、その時も中身よりは外の芝生や遊具の方が魅力的だった。彼女に誘われなければ、決して行かなかっただろう。

「ね、お願い。近くにおいしいハンバーグ屋さんとかジェラート屋さんもあるのよ」

食べ物に釣られてしまったと言った方がいいかも知れない。ランチメニューのハンバーグは自分好みのきめの細かい手ごねハンバーグで、ソースも抜群だった。

しかし、館内に入ってすぐに後悔してしまった。しんと静まり返った館内はとても居心地が悪い。そのくせ、まばらなりに人は結構入っている。自分の息遣いすら気を付けないといけない気がする。

絵に見入っている彼女に一言告げて自販機のある休憩室へ歩く。場違いなのだ。すれ違った婦人の豪華なネックレスを見て、余計にそう思う。

休憩室の、これまた洒落たベンチに座って缶コーヒーを飲む。微かに音楽がかかっている。落ち着く。静か過ぎるのは性に合わないのだと肌身をもって感じた。休憩室はガラスの壁と扉で仕切られていて、絵や彫刻を鑑賞する他の人が見える。自分だけが隔絶されていた。

辺りを見回すと、壁にはいくつかの写真がある。近くにある芸術大学の生徒の作品のようで、これから先の才能を感じさせるような、そうでないような人物写真だった。

笑う老婆。泣く子供。眠る女性。自分には、絵よりも写真の方が幾分わかりやすい。

そしてひとつの写真の前で、体が金縛りにあった。一瞬だけ鳥肌が立ち、引いていく。

それは短距離走のゴール付近で撮影されたものだ。一位がゴールし、流しにかかっている後ろで、悔しそうな苦しそうな顔の後続が全力で走っている。人生の縮図のようで、目をそらした

。

「待たせてごめんね」

彼女が扉を開けながら入ってきた。感情を悟られないようにそちらの方へ行き、アイスを食べたいと頼む。彼女は写真の方にちらと目をやる。

「アイスじゃなくてジェラートでしょ、もう」

わざと憤慨したようにして、休憩室を出る彼女。気を遣わせてしまったようで申し訳なくなりながら、ありがたいと思った。

写真を背にして自分もガラスの扉を押す。彼女に、一番大きいジェラートを奢ってあげよう。

【捨てる】

ガサガサ。大きなビニール袋を取り出す。これまで買ったことのない、特大サイズの指定ごみ袋。

ドキドキ。なぜか胸が高鳴った。これいっぱい物を詰め込むのだ。

まずは洋服。クローゼットとタンスの全部をひっくり返したように部屋中に広がる服の山、山、山。よくぞこれだけ詰め込んだものだ。よくぞこれだけ集めたものだ。流行遅れのものやサイズの合わないものは容赦なくゴミ袋へ。気に入っていたけどくたびれてしまったものも処分。毛玉のできたものも処分。大きさに慄いていたゴミ袋が三つも満杯になった。心が満たされるような感覚。

雑貨や文具もどんどん捨てる。必要最低限を意識してとにかく捨てる。こちらはゴミ袋一つ分。もともとの量が少なかったのもあるが、少し不満が残る。

写真も、雑誌も、教科書も。DVDも、漫画も、転がっているポケットティッシュも。目に映るものを片っ端からまとめていく。どんどんハイになって、必要なものも捨てたくてうずうずする。

彼との思い出のものだけとっていたのに、歯止めがきかなくなったのはいつ頃からだろう。

捨てることが美しい。本気でそう思えてくるのだ。

物を持っている私は汚い。理性でない何かが私を責め立てる。

ピンポン。家のチャイムが鳴る。無視してフライパンをゴミ袋へ詰める。ドンドン。ドアが叩かれる。無視してテレビをゴミ袋へ詰める。ガチャリ。鍵が開いた音がした。

「何してるんだよ！」

目の前に現れたのは大好きだった彼だ。そういえば鍵を返してもらうのを忘れていた。

彼が、私を捨てたのだ。ならば私は別のものを捨てるしかない。だから家中の物を捨てている。今ならば彼が私を捨てたことに納得がいく。捨てることは楽しい。捨てることは喜びだ。

悪かったと泣きながら抱きしめてくる彼を、今度は私が捨ててあげよう。

【微睡む】

夜中にふと起きる瞬間がある。覚醒とまではいかない。夢と現実の間。子供が生まれてから、こんな風に起きるようになった。はじめは夜泣きで強制的に起こされていたものの、最近は静かになった。起きる癖だけが残った。眠りが浅いのだろうか。

横にいる小さな人間の身動きを感じる。足をパタパタと動かすので、手探りで布団をかけ直してやった。頭をゆっくりと撫でると、今度は腕を動かした。まだまだ小さいけれど、幼児期に比べればだいぶ形が人間らしくなった。抱っこも多いが普通に歩くし、最近は箸が使えるようになってきた。困っていることといえば、テレビで見たコアラを気にいって、自分が座っていると真似をするように登ってくるのだ。服が伸びると叱っても、お構いなしに登ってくる。肩に手をかけ、髪を引っ張り、太ももを何度も蹴ってくる。成長を実感するが、それとともに可愛いだけの時期が過ぎ去っていくことを嘆く。

うとうととしていたが、また強い眠気がやってきた。判別のできない寝言を聞きながら、それが遠ざかっていくのに身を委ねた。

窓から太陽の光が差しているのに気がついた。ぼんやりと朝が来たことを感じる。隣には誰もいない。ぬくもりだけが残っている。子供が起きてからそんなに経っていないようだ。眠気のままだにもうひと眠りしようと布団の中に顔をうずめる。あと少しで夢の中に入ろうとしたとき。いや、もう体半分以上入っていたくらいの時だ。ドシン、と体に何かが乗ってきた。何かじゃない、子供だ。

「おねぼうさん、おきてー」

足をバタバタと動かして体を揺さぶってくる。言葉で頼んでもやめる気配はない。起き上がるまで続ける気だ。仕方なくお馬さん状態になるよう体を起こすと、きゃっきやと笑い声を上げる。最近はよく食べるようになって、体重が増えた。いつまでこんな風に遊んであげられるのか。自分の運動不足を解消すれば、あと少しは。

「ごはんたべる」

しばらくしてお馬さんにも飽きたのか、するりと降りてキッチンの方へ走っていく。急がなければ、今度は不機嫌な第二陣がやってくる。名残惜しいけれど毛布から抜け出した。

【座る】

これから数時間、この場所に座っていなければならない。大きな鏡の前の、柔らかそうなクッションの椅子。鏡には、まだいつもどおりの自分がある。

思えば今日のためにどれだけの時間座っていたらう。打ち合わせに何時間費やしたか。美容院で髪を綺麗に染め直し、特別なトリートメントをし、パーマをかけた。その日は座りすぎて腰が痛くなった。ネイルサロンに行ってハンドマッサージと下処理とジェルネイルを施してもらった。椅子が低くて腕が痛くなった。美しくするために、たくさんの時間とお金をかけてきた。それでも鏡にはそれまでとさほど変わらないと言える自分がある。やるせなくもなるが、人間の容姿は、服装と髪型によって大きく左右される。これから、変わるのだ。

髪をセットされ、化粧を施される。これだけのことで優に二時間はかかった。それでもさすがにいい椅子で、腰もお尻も痛くならなかった。華やかな舞台の裏は分刻みのスケジュールで慌ただしいと聞いていたのに、意外とのんびりした準備に拍子抜けだ。きっと始まったら忙しいのだろう。そう思いながら一生に一度の衣装に袖を通す。袖なんてないけど、袖を通すで正しいのだろうか。どうでもいいことを考えながら今度はゆったりとしたベンチに腰掛ける。こちらも柔らかいクッションで、体が痛くなることはなさそうだ。少しすると母と父と、弟が顔を出してくれた。ほんの少しだけ言葉を交わして、すぐに別れる。家族にも挨拶や段取りの確認があって、ゆっくりできない。暇なのは私だけだ。

しばらくして彼がやってきた。彼も今日だけの特別な衣装だ。いつもと違って綺麗に撫で付けた髪の毛がおかしい。少し笑ってしまったら、照れたように怒られた。

「そろそろ時間だそうだよ」

そう言って手を差し伸べてくれる。しかしこの裾の長い衣装は上手く立てないので、さらに後ろからスタッフが裾を持ち上げてくれる。自分ひとりでは何もできない子供のように恥ずかしくなる。

歩きながら、こんな格好なのに感想の一つもないの、といつも通りすねてみた。見た目はいつもと全然違っても、中身までは変わらない。

「綺麗だよ。泣きそうだから、言わせるなって」

自分だって泣きそうなくせに、と彼も一言多いのはいつものことだ。せっかく時間をかけて化粧をしたのだから泣くはずないじゃない。大きな扉の前で彼と腕を組んで待機する。中からは司会の人声がする。私はこれから、彼と歩いていくのだ。

最初にして、最後のあとがきです。動作と心の機微を上手く描けていたらいいなと思います。なんだかんだで部誌皆勤でしたが、成長とは一体。

文芸部での四年間は、楽しい思い出ばかりでした。これまでありがとうございました！

お題作品「装」

あおいろ

幼夏

部屋の中はいつも暗かった。昔はもっと広く感じたのに、今では少し窮屈に感じる。今日も、いつもと同じ時間にミオンがやってくる。

「レルム様、ランチをお持ちしましたよ」

「遅いよミオン、ずっと待ってたんだからね」

ごめんなさいね、とミオンは微笑んだ。ミオンは僕専用の使用人だ。いつもひらひらした服を着ていて、華奢な手足がちらちら見える。

僕はママがいないから、ミオンはママの代わりになってくれた。ママにするには若すぎるのだけど、ミオンが頭を撫でてくれると安心できた。

ミオンが僕の口元まで、食事を運んでくれる。ミオンが僕と一緒にご飯を食べたことはない。ミオンが言うには、それは「許されない事」らしい。

「ねえ、ミオン」

「どうなさいましたか」

僕はデザートを食べきってから、ミオンに話しかけた。

「パパは、僕のこと嫌いになっちゃったのかな。パパ、全然会いに来てくれない。昔は沢山、遊んでくれたのに」

ミオンは驚いたように目を見開いてから、とびきり優しい顔をして、

「大丈夫、そんなことはありませんよ。ご主人様はお忙しいのです。いつかきつと、また会いに来てくださいます」

と言った。そしてミオンは、僕の額にキスをする。ミオンが僕に優しくしてくれるから、パパが来なくても僕は我慢できた。

「ミオン、僕、ミオンが大好き」

「私もレルム様が大好きですよ」

ミオンは、とっても優しい。お部屋が寒くても、暗くても、ミオンがいれば平気だった。

*

すごく遠くから、声が聞こえる。夢と現実の間、時間の河口に僕は一人で座っていた。

「黙れ！ 使用人風情が、主に楯突くか！」

パパの音がする。どうしたんだろう、すごく怒っている。

「滅相もございません……！しかし、あのような場所にいつまでも閉じ込めては」

今度はミオンの声だ。脅えている、震えた声だ。

「五月蠅い！ どうせ来月には奴も研究所送りにするのだ。この歳まで、摂食や移動の自由が与えられていること自体、十分警沢ではないか。来月からは他のそれと同じように、兵器としての

一生を歩むのだ」

「あんまりです！」

「これ以上文句を言ったら、口をきけなくするぞ！ お前も半分は奴と同じ、『化物』のくせに！」

「……ッ」

二人の声が遠ざかる。僕の意識は、闇の中に溶けて行った。

*

「ミオン、パパと喧嘩したの？」

翌日、ミオンの目は赤く腫れていた。昨日聞いた二人の声が、現実の出来事なのか、夢の中のお話なのか、確かめたかった。ミオンはいつもと同じように微笑んだが、何も言わなかった。

しばらくミオンと見つめあった。

「レルム様、『空』ってご存知ですか」

「そら？」

「空はとっても大きくて、端っこが見つからないほど広いのですよ。触れないほど高い場所にあります」

「ここより、上があるの？」

僕は見上げる。そこには、黒い石が隙間なくならんだ天井しかなかった。

「そうですよ。それに、空はいろいろな色になるのです。林檎のように赤くなったり、この壁よりも黒くなったり。お皿のような白になったり、青色になったり」

「あおいろって、どんな色なの？」

「残念ながら、ここに青色はありません。外に出なくては」

「そと……？」

「そうです、この部屋の外に」

ミオンは真上を指さす。

「レルム様なら、出来ます」

ミオンは優しく微笑んだ。ミオンが何を伝えようとしているのか、一生懸命考える。

そのすぐあと、大きな足音が部屋に近づいて来た。

「ミオン！ こいつに何を吹き込んでいる！ 出てこい！」

パパだ。でもものすごく怒っていて、僕は怖くて声が出ない。

「はいご主人様、すぐに」

ミオンが部屋の外に出て行く。僕の部屋は、一面だけ壁が無い。代わりに、固い棒が縦に沢山並んでいる。棒の隙間から、パパとミオンが見えた。

突然、パパがミオンをぶった。大きな音が響いて、ミオンの体は床に打ち付けられた。パパはさらに、ミオンを足で踏んだ。

「ふざけるな！ 逃げるようにこいつに伝えたんだろう！ こいつがいなくなったら、約束の金

が入って来なくなる！ お前が一生寝ずに働いても、得られないほどの額だ！ 分かっているのか！」

パパは、何度も何度もミオンを踏みつけた。

「やめてよパパ！ どうしてそんなことをするの！」

怖かったけれど、勇気を振り絞って叫んだ。

「ひいっ！」

パパがミオンを踏むのをやめる。パパは、壁に背中を打ち付けるようにのけ反った。

「パパ、ミオンに謝って」

パパのいる方に、一步近寄った。

「やめろ！ やめてくれ！ 来るな、私は餌じゃないぞ！」

「パパ、何を言って――」

「近づくな化物！ だ……だれか！ 誰か助けてくれえ！」

パパは地面をばたばたと、のたうち回っている。パパはこんなに小さかったらどうか。ミオンと大して変わらない大きさじゃないか。

床でぐったりしているミオンが、僕の方を見た。そしていつものように、優しく微笑むのだ。

「飛んでレムル様……飛ぶのよ！」

ミオンが声を振り絞ったのが分かった。僕は大きく羽を広げる。天井に向かい、精一杯咆哮した。牙の間から吐き出された灼熱が、天井を一度に破った。

天井の割れ目から、初めて見る色が顔を出す。

本能のままに、羽ばたいた。翼を使ったことはなかったのに、僕はやり方を知っていた。ぐんと浮かび上がった体は、小さく暗い部屋を飛び出した。

そこには壁が無く、天井もなかった。上にはただ、端の見えない大きな「青色」が広がっている。

「これが、そら！」

ずっとずっと遠くに、何かがきらきら光っている。初めての外は、暖かくて、眩しいほどに明るかった。

しかし僕はすぐに、自分で壊したお部屋に戻った。パパはもう、どこかへ行ってしまったようだ。ミオンは、同じ場所にまだ横たわっていた。

「ミオン！」

尾を思いっきり振り回し、固い棒の列を破る。固いとばかり思っていた棒は、案外やわらかくて、簡単に歪んで壊れた。

意識を失っているミオンを、鼻先でそっとつついた。

「レ……レムル様？」

ゆっくり目を開けたミオンを、僕の背中へ導いた。ミオンを落としてしまわないように、慎重に羽ばたく。外はやっぱり、暖かかった。

「ミオン、あれは何？」

「あれは、太陽ですよ」

「じゃあ、あの光ってるのは？」

「あれは、海です」

「じゃあ、あれは、あれは？」

僕らは、ずっとそんな会話を繰り返した。僕が尋ねる度、ミオンは微笑む。僕の大好きな、ミオンの笑顔だった。

おわり

あとがき

毎度毎度、作品のジャンルが違ってすいません。今回はばっちりハッピーエンドです。よかった。何をどう「装って」いたのかは、ご理解いただけたかと思いますはい。ここでインスパイアされた作品をご紹介します。

- ・ Drag on dragon 3 / SQUARE ENIX (PS3のアクションゲームです。じゅうななきん)
- ・ 名前のない怪物 / EGOIST (PSYCHO-PASSのEDですが、私はアニメ見ていません。知っているのは曲だけです)

レルム (Larm) はドイツ語で「騒音」という意味です。特に深い由来はありません。うすっぺたいあとがきだなあ。

以上、幼夏ちゃんでした。

僕の夕食に変化が生じたのは大学一年の六月十日に遡る。僕が愛花を見つけた日だ。

通りで箱から日常を俯瞰し、僕の前で涙を流した少女。愛花がなぜそのような行動をしたのかはわからないし、僕自身知りたいとは思わなかった。それはパンドラの箱であり、開けるにはかなり勇気が必要な気がした。だから、今回は彼女と僕との夕食のワンシーンを紹介したいと思う。別に、彼女の素性を君たちに想像してもらいたいわけではなく、ただ、彼女の一端を君たちに知ってほしかった、それだけである。

初夏の始まり、六月下旬の午後七時。僕が腹を空かせた時間に、彼女は僕のアパートへやってくる。そう、愛花だ。

「開けてよ、両手がふさがってるの」 ドアの向こうから愛花が僕を呼びつける。僕は玄関へ行き、ドアを開けた。

愛花はきつそうな顔をして大事そうに鍋を持ち、「今夜はカレーよ」と僕を見上げるのであった。

愛花が僕と夕食を共にするようになったのは出会った日から一週間後。「お礼がしたい」と僕のアパートに来たのだ。

最初は怪しい人だと思った。新興宗教の手先かもしれないと疑った。しかし、その疑いは彼女の手料理でどこかへ飛んで行った。つまり、彼女の作る料理はとてもおいしかったのだ。別に高級な食材を使った一品ではない。スーパーの特売品を駆使した家庭料理である。「旨い」と僕が言うと、愛花は「また作ってくるわ」と言ってくれた。それが続いて現在、彼女は一週間に一、二回ほど来るようになった。

カレーは皿に盛られテーブルに並ぶ。愛花はサラダも用意してくれたらしくテーブルは色とりどりだ。愛花と僕が向かい合うような形で座り、食事が始まる。いただきます。

「うん、美味しい」愛花のカレーは甘口だった。しかし、甘口だからこそ、野菜と肉の味がよりよく舌へ伝わり美味しいと思った。「甘口なんだな」と僕が言うと、

「刺激物は好きじゃないの。痛いだけで味がしないもの。もしかして辛いほうが良かった？」

「いや、甘口もうまい」

「よかった」

僕はカレーをおかわりした。僕の舌は彼女に調教されたようだ。

「私、ソウシヨク系男子って嫌いなの」

ふいに、愛花は僕に切り出した。「草食系？」僕は聞き返す。

「そう、ソウシヨク系」

僕はグイグイ女の子と会話するタイプでもないし、交際経験なんて一切ない。もしかして嫌われ

ているのだろうか。すこし不安になった。

「あいつらの行動は目に余るものがあるわ。ホントに嫌。嫌でたまらない」
愛花はさらに追撃する。首を絞められる感覚だ。ここは早々に降伏した方がいいのかもしれない。

「すまん、積極的な男子じゃなくて悪かったな」

「え…… 何言ってるの？」

なんか聞き返されたぞ。

「だって、草食系は嫌なんだろ。女の子に対して消極的な男は嫌いだって」

「あー、その草食とは違うのよ」愛花はきらきらと笑いながら首を振る。

「じゃあ、ソウシヨクってどう書いてソウシヨクなんだよ」僕は真意を尋ねる。

「ソウシヨクっていうのは身に装着して飾るって書いて装飾よ」

どうやら、ソウシヨク違いだったらしい。それにしても装飾系男子ってなんだ？

「あーもう！ 彼氏の自慢する奴なんて滅ばばいいのに！」

愛花はトントンとテーブルを叩き始めた。

「例えば…… 通学路でイチャイチャしてるカップル！ かなり目障りなのよ！」

愛花はさらに拍車をかけて話す。

「ホント、通学路の強敵よ。二人の憩いの時間である帰り道を永遠にしたいのか、亀みたいにのろりのろりと遅く歩くのよ。その速さは秒速五十センチ。私の帰宅時間はロスタイムを終えて延長戦よ！」。

「普通に追い越せばいいだろ」と愛花に突っ込んでみる。

「それじゃ敵の思うツボよ」と愛花はこちらを指さす。なんだその敵って表現は。

「追い越すときに、カップルはあからさまに密着するのよ。まるで私がキッカケをつくったみたいじゃない」

愛花はプリプリと僕に話しかける。口は嘴のように尖っている。確かに、通学路でイチャイチャするカップルは厄介だ。特に知り合いだったら気まずくで追い越しにくい。

「ホント、カレー鍋を持ってる私の身にもなってよ」

どうやら、さっきのきつそうな顔の理由はここにあったらしい。散々な目にあったようだ。

「ただの八つ当たりと嫉妬じゃん。カップルが羨ましかったんだろ」

「そうじゃないもん。絶対そうじゃない。」愛花は首を横に振って否定する。

「なんていうか、人前でイチャイチャする必要があるの？ ってことよ。別に人前じゃなくてもいいじゃない。どうして人前で抱き合ったり触りあったりするの？」

うーむ。回答に困った。僕自身は誰かと交際したことも無いので雲を掴むような想像をすることしかできない。

「こ、恋は盲目とか言うし、周りが見えていないんじゃない？ それに、他人に自分たちの関係を認めてほしいとか思ってるんじゃないかな」

「恋は盲目って…… 本能だけで動く動物みたい。全然人間らしくないわ。それに他人に認めてほしいなら口頭で付き合ってますとか宣言すればいいじゃない。もう！」

愛花のトントンとテーブルを叩く指の本数は次第に増えていき、今は五本で叩いている。感情的になっているのだろう。落ち着かせなくては。

「それで話を戻すけどさ、装飾系男子ってなんなんだよ」

愛花はテーブルを叩いていた手を口元に寄せコホンと一息、

「装飾系ってのはね、彼氏や彼女をアクセサリーの一つとして扱う人のこと。彼女は彼氏のステータスで彼女は彼氏のステータスって考えてる人よ」

「ステータス？」

「そう、ステータスよ、ステータス。『こんなに素敵な彼氏を持つてるのよ、すごいでしょ』とか『こんなにかわいい彼女いるんだぜ』とか『私たちには恋人がいるの、羨ましいでしょ』みたいな」

確かに、愛花の言ってることにも一理あるけど、

「それは言いすぎだろ。第一、なんで愛花が気にする必要があるんだ？ 気にしなければいい話じゃないか」

「私は…… 恋愛って誰かに見せるものじゃなくて二人だけのものであって欲しいの。その、好きな人が出来たら誰にも気づかれないように隠れてこっそり会うの。他人の前では友達のフリをして—— と、とにかく私には好きな人の前でしか見せない『私』があるってことよ」

愛花は純粋な乙女だと思った。いつか来るであろう王子を待つ姫様のような夢にあふれた女の子なのだ。愛花は頬を赤らめてこちらを見つめている。鼻のすする音も聞こえてきた。ちょっと失礼なことをしたようだ。

「恥ずかしい話させちゃったな。ごめんごめん」

「ホント、失礼な男ね」

「子供にはだいたい早い話だったようだ」僕は立膝をして愛花の頭をポンポンと撫でた。

「子供じゃないってば！！ 私もれっきとした大学生なんだから！」

そうだ、僕と同じ大学生なんだった。でも、「大学で顔を見かけないぞ。本当に大学生なのか？」

「（あんと構内で会わないようにしてるんだってば！）」

「ん？ 何か言ったか？」

「なんでもない！ あたし、もう帰る」

愛花は立ち上がるとくるりと半回転し、そそくさと玄関まで行った。そして去り際、

「あー、カレー鍋は今度回収するから余りは食べちゃって。それじゃ」

「送っていこうか？」と聞いてみる。

すると、愛花は「（だから、他人にはあんまり見られたくないんだってば。）まだ八時だし平気よ」

と、小走りで出ていった。愛花は少しはにかんでるように見えた。

【あしがき】

どうも、今畑です。帰りの連絡で「今回の部誌のテーマは『装』です」と聞いたとき、「装飾」と「草食」が頭の中で閃いてそのまま書き上げました。まずはS Fさん、K Kさん、Mさんに謝辞を。ホントにいろいろと助かりました。ホントにありがとうございます。

高校や中学がそうだったんですけど、いつも人前でイチャイチャしていたカップルはみんな結局別れてしまったんですよね。なんでだろ？ってすごく疑問です。

この作品には僕の疑問に思うことをぶち込んだので、だれかご教授してくれるとありがたいです。

買った武器は装備しないと効果が無いぜ(Sincot9)

買った武器は装備しないと効果が無いぜ

Sincot9

世界最大の王国、シキスカリ。世界を我が物にしようとする魔王の企みを挫くべく、今日も何組ものパーティーが王宮へと向かう。そんな光景を見ながら、オレは城下町の武器屋の近くに棒立ちしていた。

しばらくの間街の喧騒を眺めたり知り合いに声をかけられているうちに、一組のパーティーが城門から出てきた。リーダーとおぼしき奴は腰に『どうのつるぎ』を装備していたが、他の奴らは素手か『きのぼう』くらいだ。こりや来るな、と思った矢先、そのリーダー様がこちらを指差した。いや俺を差したんじゃない。俺の背後にある武器屋だ。

新米冒険者どもはワイワイしながらこちらへ歩いてくる。毎度の事で緩み切った気持ちを僅かに引き締めて、オレは声を掛ける。

「おい、新米ども」

その言葉に、パーティーは足を止めた。こちらを値踏みするような目つきだが仕方あるまい。俺の格好はそこらにいるゴロツキどもと何ら変わらないものだからな。怪訝そうな眼をされるのには慣れている。そんな事より、とオレは自分に与えられた仕事を全うするために言葉を続ける。

。

「買った武器は、装備しないと効果が無いぜ」

ほんの二、三か月前まで、オレはそこらにいるゴロツキの仲間だった。朝から晩まで酒を飲み、夜はストリートファイトで稼ぐ。強さは上の下くらいだったか。とにかく毎日楽しく暮らしていた。

そんなある日の事だった。お袋が病気に罹った。こいつがなかなかの難病で、治療には教会の助けが必要だと知り合いの医者に言われた。だが教会も慈善団体じゃない。神父様とシスターがおまんま食っていく為には喜捨が必要となる。医者が匙を投げるような病気の治療と言ったなら、そりやもうべらぼうな額を要求されるに決まっている。

もちろんお袋は助けたい。だがゴロツキのオレにそんな大金が用意出来るはずも無い。そんな事を考えていたら、その日のケンカに負けた。相手はオレの一枚下くらいの腕で、そいつのアッパーが顎に突き刺さった瞬間にオレは負けを確信した。

目が覚めると、オレは路地裏で倒れていた。いいパンチをもらった顎以外にも、全身が痛む。おそらくオレに賭けていた奴らがスツた腹いせに蹴飛ばしでもしたのだろう。次にアイツに会うときはさぞかしみじめな気分になれるだろう。痛む体を引きずって家に帰ろうとした時、声を掛けられた。

「お母さんを助けたくはないですか？」

そいつは黒いローブを羽織った魔法使いのようだった。声の感じからしてまだ若い。だが不思議だったのは、こんな所に居る割に身綺麗そうだった事だ。

「何だ、おめえ」

「私ならば、あなたのお母さんの病気を治してあげる事ができますよ」

「……何が狙いだ？」

路地裏のケンカ屋にそんな事を言うのだ。ロクな話ではあるまい。

「いや何、ほんの少し私たちのお手伝いをしてほしいのですよ」

ほら来た。どうせ身元の確かな奴には出来ないダークビジネスだろう。

「簡単なお仕事です。町の表に立って、少しばかり声掛けをして頂きたいのです。雇用期間は一年程度。お給金はあまり差し上げられませんが、三食食べられる程度にはお支払いするつもりです。いかがでしょうか」

その話、ますます胡散臭い。その言葉を信じて領けば、必ず厄介ごとが待っているに決まっている。そう思ったのだが、何となく相手の身なりが気になった。普通そういう事をやらせたがる手合いはいつでも手を切れるよう浮浪者やゴロツキを使うはずだ。こんな強そうな魔法使いを使うだろうか。それに何より、お袋の件もある。

しばらく考えて、オレは言った。

「お袋を治せ。話はそれからだ」

「ありがとうございます。それでは参りましょうか」

言葉通り、その男はお袋の病気を十分ほどにわたる祝詞で治してしまった。喜ぶお袋を魔法で寝かしつけ、魔法使いが説明してきたのがこの仕事だ。こうして俺は一年間、毎日武器屋の前で同じ事を喋る羽目になったわけだ。昔の生活が恋しいかと問われれば否定できないのだが、給料は慎ましやかながら十分な量が支給されるし（さすがに酒を買うには足りないが）、何よりお袋があんまりにも嬉しそうなもんだから辞め辛い。まあ新人どもをからかうのは割と楽しいし、雇用期間の後にもし契約の延長を頼まれたら、条件次第で続けてみてもいいかと思っている。

そんな風に考えているうちに、今日王宮に来た奴らは全員城壁の外へ魔物退治に行っちゃった。俺が頼まれているのは冒険者に対して武器の装備を勧告する事なので、しばらくは暇だろうと判断する。別に注意は店の中でも出来るのだから、とオレは武器屋の中へと入っていく。

「いらっしやいま……何だ、ノーマックか」

「よお。何だとはご挨拶だな」

この王国唯一の武器屋の店主、サ＝ガヌキ。見た目は禿げかけの中年オヤジだが、なかなかの商売上手である。あとどうでも良いが、ノーマックとはオレの名である。

「今日王宮に来た奴らはあれで全員だよ。暫く暇だから何か話そうぜ」

「話すもいいが、そろそろお天道様がてっぺんに来る頃だろ」

その辺りの感覚が、未だにオレには掴めない。今まで日中とは酒を飲みながらダラダラする時間だったのだ。それを数か月で変えろという方が無理筋だろう。

「昼食にしよう。表の看板をひっくり返してくれ」

「おうよ」

戸の前の掛け看板を準備中にして、カウンターにお袋の作った弁当を置く。ガヌキが椅子と特

製の焙煎茶を持ってくる。

「そういや、お前に頼みたいことがあったんだ。ノーマック、お前今晚暇か？」

「何だよ突然」

「いいからいいから。で、暇か？」

「まあ、別に予定は無いな」

この仕事の説明の際、過度な暴力は今後慎む事と魔法使いから釘を刺されている。おかげでストリートファイトも最近は無沙汰だ。

「そうかそうか。そりゃよかった」

ガヌキはにんまりとした笑顔。その憎らしい顔に嘘を吐いておくべきだったと後悔が押しよせる。

「今晚俺ら『ARP』限定の合コンがあるんだけどよ、どうしてもメンツが一人足りなくて困ってたんだ。人数合わせでいいから参加してくれよ」

「断わる」

『ARP』とはAuto Reference Peopleの略、即ちオレやサ＝ガヌキのような、冒険者に一定の言動をする事を義務付けられた人間の事だ。そんな集団限定の合コンに割と興味はあったが。

「金が無い。お袋もいる。それに何より合コンは趣味じゃない」

「金なら俺が出そう。ただ参加してくれるだけでいいんだ。久しぶりの旨い酒。肴にや女の子。どうよ」

やたらと気前がいい。ガヌキはやり手の商売人だ。自分に利益のない事をするとは考えづらい。

「どうせ裏が有るんだろう」

「まあな。お前みたいな筋肉ダルマがいたら、女の子はまず攻略対象から外すだろう。そこで俺が華麗なトークテクニックで女の子をメロメロにするわけよ。俺、モテモテ。お前、タダ酒。これはウィン・ウインの取引なわけだ」

要は囿という事か。こんな事を言われて断わらない理由が無いのだが、そこで俺はお袋との昨夜の会話を思い出した。

「ノーマック。お前は最近私を心配してくれるが、たまには羽を伸ばしてきたらどうだい」

そんな言葉と共に、母がくれた金は今もポケットに入っている。この話はひよっとしたら神様とやらがオレに休めと言ってきたその証かもしれない。

「な、どうよ？」

なおもしつこく聞いてくるガヌキに、オレは大きく溜息を吐いた。

「……お袋に聞いてくれ。お袋が大丈夫って言うなら行こう」

その一言に、ガヌキは表情をほころぼせる。

「おお。ありがとうよ！ 大丈夫さ、お袋さんだってわかってくれるさ。じゃあ、俺がお袋さんを説得してくるからよ！」

そう言って、ガヌキは昼飯をほっぽり出して店を出ていった。たぶんお袋に許可を取りに行ったのだろう。渡りに船、しかも難病を経て生きているうちに孫が見たいと漏らし始めたお袋が断

わる訳も無いだろう。

「まったく」

そう呟いて、オレは弁当を食べ始めた。さっさと食べ終えて、アイツの分まで茶を飲み干してやろう。

本当に許可を貰ってきたガヌキとの一悶着の後、オレは仕事に戻った。その後も数人客が来たが、後はずっと暇だったのでつらつらと考え事をしながらその日の勤務も終わった。その足でガヌキと酒場へ向かう。終始上機嫌なガヌキに数度蹴りを入れる内に到着したのは、中堅どころの酒場『銀鹿亭』。間違ってもオレが普段使いする事のない店だ。店の前では、すでに十人近くの男女が会話をしていた。知った顔もあれば知らない顔もいる。

「おお、ガヌキの旦那遅かったじゃ……なるほどなるほど」

そう言いかけた男（たしか道具屋の前で『やくそう』の素晴らしさを説く役だったはずだ）が、オレの姿を見て大きく頷いた。この合コンに掛ける意気込みを察したのだろう。

「遅れてすまなかったね。私たちが最後かな？」

見ると男性が四人、女性五人。そこにオレたちが加わったなら、女性がもう一人来るのだろう。

「ああ、うちの秘蔵っ子がまだ……」

「すみませーん！」

女勢の一人がそれに答えようとした時、涼やかな声が聞こえた。見れば通りの向こうから、一人の女性が駆け寄ってくる。その女性を見て、オレは不覚にも見惚れてしまった。

走るたびに揺れる亜麻色の髪は肩口で切り揃えられており、白い頬は走っているせいかほんのりと赤く染まっている。その上に付く目鼻はやや幼い印象を受けるが整っており、口唇はほんのりとした薄紅色。細い手足は上品そうなワンピース型の服に包まれているが、しかしその上からでも必要な所に必要な肉が付いている事がわかる。

「わお……」

隣りから変な声が聞こえた。オレのパトロンは今日のターゲットをすでに見つけたようであった。そんな事は露知らず、その女性は息を切らせながら『銀鹿亭』の前で足を止めた。

「すみません。お仕事が長引いてしまいまして……」

そう言って顔を上げた拍子、オレと目が合った。そして残念な事に、そこに映った微かな怯えの色を見逃す事が出来なかった。

「えっと、その……」

「し、仕事が長引いたんなら仕方ないんじゃないかな！」

「そうそう、じゃあさっそく中に入ろうか！」

俄かに活気づいた男衆の中で、オレは一人蚊帳の外といった様子で『銀鹿亭』の中に入っていた。

「だからあ、同じことを言ってるだけってつまらないじゃないですかあ」

「でもなカンナちゃん。店主みたいにいろいろ言うパターンがあるってのも大変だぜ？ ホレ見

てみる。ガヌキの旦那はもうハゲかかっている」

「アッハハハ！ 違うわね」

合コンが始まってすぐの自己紹介で分かったのは、その女性の名がツキアであるという事と、町の入口で『シキスカリへようこそ！』と言う役だということ。ガヌキの武器屋は城の近くに有るので、オレもガヌキも初対面であったわけだ。あと、話の中でセクハラまがいの事をしてくる冒険者がいるという事を言っていた。そりゃまあそんな環境でそんな容姿で働いていればちょっかいを掛ける輩の一人や二人いるだろう。その辺りを聞いて、オレは彼女と会話するのは止めた。倍率の高さを嫌って離れた男二人と一緒に、残った女性相手にのんびり会話と酒を楽しんだ。酒はめったに飲んだ事が無いような上質な物だったし（と言ってもたかが知れているが）、同じような環境で働く女性との会話は楽しかった。

「っと、悪いな。ちょっと便所に行ってくる」

気付いたらずいぶんと酒を飲んでいたのである。オレは一旦手洗い場に向かった。わずかに感じる酩酊感を冷やかな空気で覚まして席に戻ろうとすると、何やら様子がおかしい。よく見ると、先ほどまではいなかった乱入者がいた。

「ねえお姉さん、ボクと一緒に呑まない？ 連れ合いがいなくて退屈してるんだよね」

その顔を見た時、苦い物が込み上げるのを感じた。お袋が病気になったと知って気もそぞろな時に負けたあの男だ。どうしてこんな店に来ようとしたのかは分からないが、来ている服が割と良い仕立てである事から、ストリートファイトの方は順調らしい。それで奮発して店に入った所で上玉を見つけた、といった感じだろうか。取り敢えず邪魔されるのも不愉快なので、歩きながら声を掛ける。

「おい」

「んん、おやおやあ？ あなたはノーマックさんじゃないですか」

小馬鹿にした口調で振り向いたその顔は、意地悪そうに歪んでいる。

「いやちょうどよかった。じつはたまたま入ったこの店で可愛い女の子を見つけたんで一緒に遊ぼうと思ったんですが、ノーマックさんの連れでしたか。ねえ」

ビュン。空気を切り裂くような音と共に振るわれた拳が、オレの顎先で止まった。

「連れてっていいでしょう？」

そう言いながらケラケラと笑う男。この町では酒場でケンカがあった場合、殴りかかった側が店の損害を弁償するという暗黙のルールがある。それ故に本当に殴ってくることはないだろうと思っていたが、冷や汗の出るようなアッパーだった。まあだが、見切れないと言うほどではない。

「断わる。他を当たれ」

「つれないっすねえ。それとも可愛い女の子の前で泥を舐めたいっていうヤバい趣味っすか？」

「泥を舐める趣味は無い。さっさと消えろ」

「わっかんないっすねえー。さっさと寄こせて言ってるんすよオ！」

そう言って振るわれた右手を、オレは左手で受け止めた。ゴロツキには切れっ早いのが多いが、こいつもそういう手合いらしかった。

ふと視線をやると、ツキアが怯えた表情でこちらを見ていた。ゴロツキに絡まれ、拳匂目の前でケンカが始まったのだから当然だろう。そんな事を考えながら、彼女に完全に嫌われる覚悟を決めた。

「消えろ、その気が無いなら表に出ろ」

「良いんすか？ ボクがやっちゃったから別にここでやってもいいんですよ」

「気絶した上に支払いまでやらせるのは可哀想だから言ってるんだ」

その一言に、男の目の色が変わった。

「良いっすよ。表、行きましょうか。ここじゃあ顔面にシヨンベン引っかけられないっすもんね」

踵を返したゴロツキの後を追おうとして、最後にもう一度ツキアの方を見る。やはり怯え、震えた目でこちらを見ていた。未練を一瞬で切り捨てて、酒場の外へ出た。

夜の空気は肌寒く、酒気が一気に抜けていく。目の前には、いつでも飛びかかってやろうといった様子ゴロツキ。

「ノーマックさあん。もっかい地面に倒してあげるっすよ」

「どうしても良い事なんだが」

そんな微発を受け流し、一言。

「お前、名前なんつったっけ？」

ギリッ。

「……上等ア！」

そう言いながら、相手は殴りかかってきた。左ジャブをダッキングでかわし、左拳を腹にぶち込む。一瞬怯んだ気がしたが、下がった頭に膝で追撃してきた。頭を後ろに反らして躲し、そのままサマーソルトキックを絡めたバク転で距離を取る。

「あれれ、こんなもんっすか。弱くなっちゃいましたね」

バックステップで蹴りを躲したゴロツキは余裕の表情だ。ストリートファイトを止めてからも適度な運動はしているので、筋肉に衰えを感じた事は無い。だがあちらは今なお現役。正面切つてやるのは面倒だ。

「ハア……」

微発の意味も込めて溜息を吐くと、相手はあっさりと乗ってきた。

「ラァ！」

裂帛の気合を込めての突撃。右手を大きく振りかぶり、助走を付けて殴りかかってくる。前だったらこれを躲して反撃するのだろうか。

パンッ。

「あ？」

何が起こったのかわからないだろう。ストリートファイトではご法度も良い所、スライディングタックル気味の足払いである。狙ったのは踏み込んできた足。地面という支えを突然失くしたゴロツキの体は止まらず、その力を地面へと方向転換させながら……

ごんっ。

綺麗に頭から落ちた。そこまで狙ってやった訳でもないが、この音の感じからして少なくとも脳震盪で暫く動けないだろう。

「し、勝者！ ノーマックウ！」

そんな声が傍から上がった。この辺りは町の表通りだが、何時の間にやら賭けが始まっていたらしい。

「うひょー！ 三百ゴールドもかけたら千ゴールドになって帰ってきたわ！」

はしゃいでいるガヌキの声も聞こえる。こんな時にも金儲けとは恐れ入る。

「よし、みんな。この金で二次会に行くぞ。パーッとやろう！」

『おーっ！』

「いや、遠慮する」

周りの流れをぶった切って、オレはそう言った。

「ノーマック、お前のおかげで手に入った金だぞ？」

ガヌキのその言葉は魅力的だったが。

「疲れた。悪いが、今日は休む」

というのは口実で、本当はこれ以上昔のようにしていたら、あのころの自分に戻ってしまいそうで怖かったのだ。少なくともあの魔法使いと契約している間は親に心配を掛けるような真似はしたくなかった。

名残惜しそうにする皆に別れを告げ、家へ帰ろうとすると。

「あの、私も……」

ツキアだった。こちらはオレの時以上に強く引き止められたが、俯く彼女の姿を見る内に、声は名残を惜しむ声へと変わっていった。

『じゃーなー』

しばらくの後には、オレとツキアだけが残された。

「……」

「……」

気まずい。初対面から良い印象の無かった筋骨隆々の男と二人きり。しかもそんなのが目の前で暴力を振るっていた。彼女としては一刻も早く離れたいだろう。

「帰ろう。家まで一人で大丈夫か」

「えっと、あの」

言ってから失言だったと気付く。まるで送り狼じゃないか。だが言った手前、相手の言葉を聞く前に帰るのも憚られる。取り敢えず『一人で大丈夫』という言葉のを待っていると。

「さっきはあの人から助けて頂いてありがとうございました。それで、なんですけど」

そう言って、彼女は顔を上げた。暗いせいで表情はよくわからないが、その声は僅かに震えていた。

「良かったらもう少しお話しませんか。どこかのお店で……」

普段は冒険者の影に隠れてしまうオレたち。だがその裏では、こんなにもドラマティックな物

語が紡がれている、かもしれない。

あとがき

皆さんはRPGをプレイした事はあるでしょうか。私はよくプレイしますが、その中で必ず出てくる問題が、特定の人物に何度話しかけても同じ話しかしないという問題です。そんな人物の裏側があったら面白いだろうなと思って書いたのがこの『買った武器は装備しないと効果が無いぜ』です。ぶっちゃけタイトル詐欺です。

これを書いている作者は現在ピーターパンシンドロームに絶賛罹患中なわけですが、その理由の一つがこういったRPGの世界に魅せられたからなのだと思います。この小説が皆様にとってそのような作品になれたのなら幸いです。

最後になりますが、この作品を最後まで読んでいただいて、なおかつこんな末端まで読んでいただいて、本当にありがとうございます。Sincot9でした。

Special Thanks!

ファイナルファンタジーX

艦隊これくしょん～艦これ

重巡洋艦 熊野

おじいちゃんのお兄さん

辛い時に励ましてくれた東方projectのみんな

その他今までプレイしてきたすべてのゲーム